

国立国語研究所学術情報リポジトリ

談話行動の諸相：座談資料の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2017-06-09 キーワード: 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001275

談話行動の諸相 座談資料の分析

国立国語研究所

1987

談話行動の諸相

座談資料の分析

ASPECTS OF TEXT AND CONTEXT
—— An Analysis of Conversational Texts

国立国語研究所

1987

© 1987 The National Language Research Institute

刊行のことば

国立国語研究所は創設以来言語の実態調査をその主題の一つとしてきました。ここに発表する研究は、その系列に属するもののうち、言語行動様式に関するものです。言語行動を広く解釈すると、いわゆる言語的行動と、それに伴うあるいは伴わない非言語的行動をも含めなければならないと考えます。両方を総合してはじめて言語行動全体が明らかになります。これは、いわば人間行動全般を言語の側から見たものとなるでしょう。

しかし、特に非言語的側面の研究はあまり進んでいるとは言えない現状です。したがって本報告書にも述べましたように、この面の研究はまず方法論の確立というところから始めなければなりません。この方法論は言うまでもなく言語的側面と関係づけたものである必要があります。こういう点で、この調査研究には幾多の困難がありましたが、ここに一往あるまとまりを得ましたので、これを刊行し、広く一般からの御批判を賜わり、さらに今後の発展に資したいと考えました。ご意見をお寄せ下されば幸いです。

この研究は一部文部省科学研究費補助金を受けて行ったもので、研究所外の研究者にも参加していただきましたし、本報告書にもその所外の方々のうち杉藤美代子さんに一部執筆していただきました。本文中に掲げる所外のメンバーのほかにも“座談”の場面の録音・録画については多くの方々にお力添えをいただきました。特に、お忙しいところを実際の資料となる“座談”をされた方々の御協力がなければ、この調査自身が成り立ちません。これらの方々に深く感謝申し上げます。

昭和 62 年 3 月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

刊行のことば

本研究の目指すもの	江川 清	1
-----------	------	---

I 理論編

1.1. 談話行動論	南不二男	5
1.2. 談話研究の歴史	田中 望	36
1.3. 談話テキストの作成	南不二男・江川 清	49

II 分析編

2.1. 研究の方法	江川 清	62
2.2. 発話のうけつぎ	杉戸清樹	68
2.3. ポーズとイントネーション	杉藤美代子	107
2.4. 声の使い方・調音など	沢木幹栄	139
2.5. コミュニケーションネットワーク	米田正人	148
2.6. 身振り・動作の現れ方	江川 清	159
2.7. 今後の課題	杉戸清樹	180
参考文献		186

III 資料編

3.1. 資料について	杉戸清樹・磯部よし子	190
3.2. 大阪・船場グループ談話テキスト		193
3.3. 東京・下町グループ談話テキスト		207
3.4. 「談話行動の総合テキスト」について		220

TABLE OF CONTENTS

Objectives of Our Research	1
I. Theoretical Aspects	
1.1. Remarks on Discourse Analysis	5
1.2. Historical Perspective	36
1.3. Problems of Text Compilation	49
II. Analysis	
2.1. Methodology	62
2.2. Speech Sequences	68
2.3. Pause and Intonation	107
2.4. Tone of Voice and Articulation	139
2.5. Network of Communication	148
2.6. Non-Verbal Communication	159
2.7. Future Areas of Research	180
III. Data	
3.1. An Outline of Data	190
3.2. Text from Semba Group, Osaka	193
3.3. Text from Shitamachi Group, Tokyo	207
3.4. Sample Text, Both Verbal and Non-Verbal	220

本研究の目指すもの

本研究は、国立国語研究所で、言語行動研究部が中心となって実施してきた社会言語学的視点からの言語行動様式に関する調査研究の一つとして行ったものであり、ことばとことば以外の身振り・動作など非言語的行動を総合的に把握しようとして企画されたものである。

言語と非言語との問題を同時に扱った研究としては、われわれは既に『言語行動における日独比較』（国立国語研究所、1984）と題する調査報告を発表している。この調査はアンケート形式で行ったものであり、言語行動に関する多くの知見が得られている。しかし、そこで扱われたものは人々の自己の言語行動についての内省、つまり意識の側面であった。

そこで今回の研究では、人々の実際の言語行動を素材とし、それを観察記述することにより、行動そのもののメカニズムの解明にせまろうと考えた。とは言っても、行動観察とそれを基とした資料分析のための方法が未だ確立していないのが現状で、すぐに結果を云々できる段階に到っていないわけである。したがって、われわれの今回の報告は、現象の解明というよりは、方法論の確立という面に重点をおき、そのためのいくつかの試みを提示したものである。

コミュニケーション行動は、社会言語学的研究が指摘しているように、行動の生じる場面や行為者間の社会的・心理的諸関係などによっていろいろ変化するものである。われわれとしても、いろいろな場面や状況の中でのコミュニケーション行動の様相を広く研究したいのではあるが、先行モデルがほとんどない現状ではあまり多くの場面をとりあげても消化不良を起しかねないと思われる。そこで、当面は研究対象を“座談”の場面に絞り、座談メンバーの構成を

2 本研究の目指すもの

実験的にコントロールし、その中で生じるすべての言語行動を観察・記録することにした。この研究は、言語的・非言語的な多角的な観点から分析しなければならないため、多分に試行錯誤的な色彩が強い。そのため資料の収集にあたっては、いろいろな段階で繰り返して観察・検討することが可能なビデオ録画方式を採用した。

われわれがとりあげた座談場面は、参加メンバーに自分の生活空間とは離れた会場に向かわせ、様子のわからない他のメンバーとコミュニケーションをもつことを強いられるという側面がある。一般の人々にとってはこのような経験は皆無であるか、また、あったとしても希な場面でもある。いいかえると、買物とか雑談とかいった誰でもが日常生活の中で頻繁に行っているような場面に対して、座談の場面はきわめて特殊であり、“生の言語生活”からほど遠いものである。

このような問題点が認められるにもかかわらず、あえて座談場面对象とした。これは、座談は人工的に構成される場面であり、参加メンバー相互の組合せは観察の側である程度まで恣意的に決定しうる場面であるからである。また、ビデオ資料が比較的得やすいという技術的な面も、座談場面選択の理由の一つであった。

この研究を始めるに当たって、われわれが分析・整理のための当面の課題として設定したことは次の諸点であった。

- (1) 非言語的な行動の要素を抽出し、行動観察のための指標となるカテゴリー表を作成する。
- (2) 録音資料を、ポーズ、ストレス、イントネーションや相手や状況による音の高低などの事項を含む形でテキスト化する。
- (3) 録画資料を「行動記述」あるいは「行動の文字化」というべき形でテキスト化する。
- (4) 2と3とが対応する資料を作成する。
- (5) 談話の時間的経過に伴う、話題の変化、発話量、コミュニケーション・ネットワークの成立・変化などを記述、分析する。

- (6) 談話における話しことばの文章・文・単語など（狭義の）言語的分析を並行して行う。
- (7) 話しかけ型対受け型といったような被調査者のタイプ別の談話行動特性を調べる。
- (8) 東京・大阪の各資料を比較し、談話行動の地域差について事例研究を行う。
また、座談メンバーの社会言語学的属性およびメンバー間の関係などを変数とした分析を行う。
- (9) 以上の分析を通して、言語的・非言語的手段によるコミュニケーションを総合した言語行動モデルを求める。

上記の諸点について、方法論的摸索を行いながら分析・検討を加えてきたわけであるが、当初に設定した問題のうちのいくつかは目標に達しえなかった。その理由はいろいろあるが、談話資料を扱うにはその前段階として解決しておかねばならない事項が多過ぎるのである。この点については一部を2.7で「今後の課題」として述べた。今後さらに検討を続け、発表する機会をつくろうと考えている。

なお、本書は「理論編」、「分析編」および「資料編」の3部からなっている。第I部は、これまでの談話研究全般についての理論と方法を展望したものである。また、第II部は、われわれが得た座談資料の一部（第III部に掲載）を実際に取り扱ったものである。この「分析編」の各部分は、研究グループ内の研究会などで検討を加えたものも少なくないが、現時点での執筆者個々人の独自の考えを記したものであり、いわば「論文集」とみるべきものである。このように、本報告書は、国立国語研究所の報告書としては異質な構成になっているが、談話研究の現状からして当然の構成だと言うことができよう。

最後に、本研究に参加したメンバーを記しておく（所属は昭和62年3月末日現在のもの）。

渡辺友左 国立国語研究所言語行動研究部長

4 本研究の目指すもの

江川 清	同研究部第二研究室長
米田正人	同研究室主任研究官
磯部よし子	同研究室研究員
杉戸清樹	同研究部第一研究室長
沢木幹栄	言語変化研究部第一研究室主任研究官
南不二男	同研究所日本語教育センター長
日向茂男	同センター日本語教育指導普及部教材開発室長
田中 望	同センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室長
水谷 修	名古屋大学総合言語センター教授
高田 誠	筑波大学文芸言語学系助教授
杉藤美代子	大阪樟蔭女子大学文芸学部教授
吉田彌壽夫	大阪外国語大学教授
浜中武彦	金蘭短期大学教授
輝 博元	金蘭短期大学専任講師
八村広三郎	京都大学情報処理教育センター

なお、上記のメンバーのほか、座談参加者、録音・録画会場関係者を始め、数多くの方々の御協力を得ている。これらの方々なくしては本研究は実施しえなかった。深謝の意を表する次第である。

〔付記〕本研究は、つぎの二つのテーマで行ってきた研究をまとめたものである。一つは、昭和51年度から国立国語研究所の言語行動研究部第二研究室が中心となつて進めてきた「言語行動様式の分析のための基礎的研究」であり、他は昭和52年度からの3年間にわたり文部省科学研究費（特定研究「言語」）を受けて行った「談話行動の実験社会言語学的研究」（代表者 渡辺友左）と題する研究である。

I 理論編

1.1. 談話行動論

1.1.1. 談話・談話行動・談話テキスト

ここで「談話」というときには、それは、常識的に見てなんらかの意味でひとまとまりになった言語表現であるということを前提として、考えを出発させることにする。話しことばか書きことばかということは問わない。たとえば、つぎのようなものは、それぞれまとまった談話であると考ええる。

話しことば関係

日常会話一般（あいさつ、用談、雑談、さしず、けんか、感情・感覚の直接的表現など）

会議などでの議論

講義・講演

窓口などでの事務的な話

電話での話

ラジオ・テレビのニュース・天気予報・しらせ・その他各種の話

駅・車内・店内などでのアナウンス

広告放送

など

書きことば関係

手紙

メモ・ノートの種類

通知

日記、随筆

新聞雑誌の記事・論説・論文

小説

事務書類

説明書・カタログの類

各種広告

話しことば、書きことば両方に関係するもの。これは、つぎの二つのものを区別することができる。

a. 戯曲・シナリオの類、対談集、座談会記事など。これらは、そのもともとの形が話しことば的であって、表現手段としては文字を用いているものである。

b. 講義、講演、その他スピーチ類、朗読など。これらは、そのもともとの形が書きことば的であって、表現手段としては音声を用いているものである。

ここでは、このように広い範囲で談話を考えようとする立場に立つが、本書では、もっぱら話しことば関係の談話を考察の対象として取り上げている。

ところで、ある言語表現が談話と呼ばれるには、その長短にかかわらぬということに注意しておく必要がある。ふつう、談話と認められるひとまとまりの言語表現は、複数の文からなるものが多い。しかし、複数の文からなるということは、談話であることの必要条件ではない。場合によっては一つだけの文からなる談話もありうる。たとえば、一枚の広告ポスターに一つだけ文が書かれてあったとしたら、それはそれだけで一つのまとまった談話である。極端な場合は、単語一つということもあるかもしれない。あるいは、単語の羅列がひとまとまりの言語表現をなすこともある。食堂のメニューはその例だが、それも一つの談話と見ることができる。話しことばにおいても、一つの文に該当する、ただ一回の発話だけが現れることもあるだろう。あるいは、単語の羅列にあたるような発話が認められることもある（選挙運動での人名の連呼など）。そして、一方には、話しことばについても、書きことばについても、多数の文の連鎖からなる談話があることはもちろんである。

談話は、いうまでもなく、われわれの実際のコミュニケーション行動におい

て現れるものである。そこには時間軸にそった行動の過程(process)がある。そうした行動の動的な側面をとくに問題にして談話を眺めるときに、「談話行動」という表現を使うことにする。話しことばの形をとる場合は、表現にしる理解にしる、時間の流れにそった行動の過程を考えることは比較的容易であろう。書きことばの形をとった場合にも、やはり表現、理解どちらの面についてもそうした過程を考えることになる。

また、談話行動の結果現れた言語表現（または、それに付随して現れる言語以外のコミュニケーションの手段による表現）をまとまった形で取り出したものを「談話テキスト」ということにする。具体的な形としては、書きことばにおいては、書かれたもののそのものがテキストと考えられることが多いであろう。話しことばの場合には、音声で表現されたものを、なんらかの文字または記号を使うことによって固定化した形にするのがふつうである。しかし、話しことばについては、かならずしも視覚化した形にしなければテキストとはいえないというわけではない。音声のままであってもかまわない。

1.1.2. 談話の要素

どのような観点からにせよ、談話を研究対象とする場合に取り上げて問題にされる要素がいくつかあると考えられる。それらは、談話を構成している要素と見ることも出来るかもしれないが、また談話というものをさまざまな角度から眺めたときに浮び上って来る諸側面といった方が適当かもしれない。

どのような要素を考えるかは、もちろん見方によるわけだが、ここでは一つの試案として、つぎの10のものをあげる。

言語表現そのもの

参加者

話題

コミュニケーションの機能

表現態度

媒体

状況

ネットワーク

文脈

非言語表現

これらは、それぞれ無関係に独立して談話中に見られるものではなくて、おたがいに重なり合っている部分もあると思われる。以下、それぞれについて見ていくことにする。

(1) 言語表現そのもの

まず、談話をかたちづくっている言語表現そのものが問題になるのは当然かもしれないが、これについては、さらにいくつかの側面を区別することができる。

- a. 使用言語。ふつうのひとまとまりの言語表現では、そこで使われている言語（または方言）は、一つの種類のものと考えられる。外来語の使用や、他の言語による表現の引用があったとしても、それはある言語によって表現される全体的な談話の一部として使われているのが原則であろう。こういう場合には、使用言語は談話というひとまとまりの言語表現を把握するための一つの手がかりとなるが、一方では二つ（あるいはそれ以上）の言語または方言が混用されていて、はっきりした区別がつかねることもある。現代日本語社会における標準語と方言の混用はその例である。
- b. 形態。ここで形態というのは、さまざまな意味でのことばの形である。談話と呼ばれるような、ひとまとまりの言語表現は線条的な形で連続しているのがふつうのありかたであろう。話しことばにおいては、当然音声の連続体であり、大ざっぱに分ければ、そこには segmental な音声要素と、それにかぶさって現れる suprasegmental な音声要素がある。とくに談話では、文またはそれ以上のサイズの部分にかぶさる intonation の問題は見逃すことができない。書きことばにあっては、文字（およびそれに伴う各種記号など）の連続体である。ところで、話されたものや、書かれたものは、この世界で無限に続いていたり、ひろがっていたりするものではないから、その連続体にはかならずなんらかの

切れ目があるはずである。話しことばにおいて、なんらかの話の中断(ポーズ)があった場合は、そこに言語表現のまとまりの切れ目(なんらかの意味での談話の単位の切れ目)がある可能性がある。ただし、この際注意しなければならないのは、ポーズがある場合には、かならずそこになんらかの談話の切れ目があるとはかぎらないことである。書きことばにあっては、ポーズにあたるものは「ことばのない空間」ということができる。書かれた言語表現のまわりには、言語的コミュニケーションに関与しない空間があるはずである。こうした書きことばの場合も、片端から読んでいく行動を前提とするのであれば、ここでことばのない空間と呼ぶものもことばのない時間におきかえられるかもしれない。しかし、書かれた文字(そしてそのほかの記号や絵など)が一度に目にとびこんで来る場合もあるだろう。いずれにしても、言語表現の切れ目は、単位の問題と密接な関係を持っている。そして、言語表現そのものについてなんらかの言語単位を設定することは分析上のさまざまな目的から考えて必要なことだが、かかる問題が多岐にわたるので別項で取り上げる予定である(→1.1.3.談話の単位)。

(2) 参加者

a. 参加者の種類。原則的にいえば、以下の三種類を区別することができる。

話し手または書き手 (addressor, 以後まとめて送り手という)

聞き手または読み手 (addressee, 以後まとめて受け手という)

関係者 (第三者, referent)

この中で受け手については、「マトモの受け手」(直接の相手になって聞いたり、読んだりする人)と「ワキの受け手」(同席者)を区別する考え方もある。ワキの受け手の有無が談話の性格に関係することがあるからである。

送り手、受け手あるいは関係者が単数か複数かということで区別することもできる。

もう一つ、やはり送り手その他が特定か不特定かという区別もある。たとえば、日常会話などでは、送り手と受け手は一定していると思われる。書きことばでも、私信の場合は送り手、受け手がともに一定であるのがふつうであろう。

ところが、新聞、雑誌、一般の書籍などでは、送り手（書き手）の方は一定であるとしても、受け手（読み手）は不特定多数であるのが原則である。話しことばでは、会合でのスピーチ、教室での講義などにおいては、送り手は一定、受け手もある程度多数であっても、ほぼ一定していることが多い。ところが、放送になると一般の出版物と同じで、受け手が不特定多数となる。

b. 参加者の層。単に送り手あるいは受け手が複数であるということだけではなくて、送り手側あるいは受け手側が、それぞれなんらかの点で役割を異にする複数の人間でなりたっている場合がある。たとえば、テレビのCMなどがそうである。われわれの目に直接ふれるのは、画面で何かを演じているタレントである。しかし、その背後にはそのCMの製作者（複数であるのがふつうであろう）がいる。そして、そのまたうしろには、その広告のスポンサーがいるはずである。この中のどれを送り手というのか、あるいは、全体を送り手とするのか。受け手の側にも、複数の層が存在することもあると思われる。伝聞によって知る、はじめの書き手とは別の人が要約したものによって知るといった場合は、その例かもしれない。いずれにしても、送り手あるいは受け手の層が単一のものか、複数のものからなっているかによって、談話の性格が影響を受けることはありうることであると思われる。

以上のほかに、参加者どうしの間の関係の問題も無視できない。これについては後述の（9）「ネットワーク」で取り上げる。

（3）話題

話題に一貫性があることも、まとまった言語表現の特徴の一つとしてあげてよいであろう。ただ、どこにそうした内容上の一貫性を認めるかについては、さまざまな問題がある。ある特定のことがらについての用談とか、特定のテーマについての論文などならば、内容上の一貫性は比較的容易につかむことができる。ところが、日常の雑談になると、話題があちこちに飛ぶことが多い。電車の中などの雑誌の広告などもそうで、そこには、その号にのっている記事や小説などの題目がならんでいる。それらは、それぞれ違う話題のものが多くから、それらの間の内容上の直接的な共通性は指摘しにくい。もっとも、こうし

た雑誌などの広告の場合は、雑誌記事の題目という点で、なんらかの共通性はあると主張することも可能かもしれない。広告とは性格が違うが、一つのまとまった論文でも、その中の個々の章や節では、それぞれ違った小さな問題が扱われていることが多い。それが、全体テーマで統一されているわけである。このように見てくると、内容上の一貫性というか共通の性格といったものには、いろいろの段階のものの存在が考えられる。内容上の一貫性をどのような段階で問題にするかは、どのような段階で談話を考えるかということと、当然密接に関係している。

(4) 言語的コミュニケーションの機能

われわれのことばが一般のコミュニケーションにおいてはたしている役割は、単に受け手に客観的なものごとについての情報を伝えるだけではない。人と人との社会的接触にもっぱら関係する働きもある（あいさつなど）。感情・感覚の直接的な表現もある（間投詞による一語文など）。鑑賞の対象にもなる（文学、話芸など）。各種の思考活動にも用いられる。こうしたことばの働きを、言語的コミュニケーションの機能と呼ぶ。

言語的コミュニケーションの機能は談話とどう関係するか。一般的にいえば、あるまとまった言語表現は、ある一定の言語的コミュニケーションの機能を持っていると仮定することができる。たとえば、あるまとまったあいさつの会話は、人と人との間の社会的接触に関する機能を持つ。一通の事務書類は、ある客観的なものごとについての情報を伝えるという働きをする。一編の随筆とか詩は、芸術的鑑賞の対象となるという機能を持っている。

ことばにどのような機能を認めるかということについては、以前からさまざまな意見が出ている。古いところでは、K. Bühler の表出(Ausdruck)、訴え(Appell)、演述(Darstellung)の三つの機能を区別する考えがある(Bühler 1965)。よく知られているものには、R. Jakobson の6機能説がある。すなわち、情動的(emotive)、動態的(conative)、詩的(poetic)、関說的(referential)、メタ言語的(metalingual)、交話的(phatic) (Jakobson 1960)。これと似たものとしては、D. Hymes の expressive, directive, poetic, con-

tact, metalinguistic, referential および contextual の7つの機能をたてる考えがある(Hymes 1968)。日本でも、こうしたことばの機能またはそれに類する概念について、さまざまな考えが出ている。岩淵悦太郎は、ことばの基本的な働きとして「認識」「伝達」「思考」「創造」の四種のものを考えた(岩淵 1965, 1970)。また、時枝誠記は「実用的(手段的)機能」「社交的機能」「鑑賞的機能」の三つをあげている(時枝 1955)。

いくつかの意見が出ているが、あまり抽象的な少数の項目の区別だけでは、実際の言語表現の性格をこまかく説明するためには不十分であろう。逆に、具体的な項目をたくさん立てると、全体的な体系を見失うおそれがある。言語的コミュニケーションの機能は、さまざまな言語表現の中での談話としてのまとまりを見つけるためばかりでなく、談話の分類や談話中での各種言語要素の現れ方の分析のための手がかりともなるものである。

(5) 表現態度(フリ)

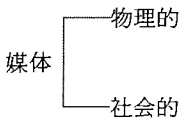
ここで表現態度と呼ぶものは、まだはっきりとその性格を規定できない面があるが、大ざっぱに言えば、表現のしかたに関する送り手の基本方針のようなものである。筆者は、それをフリ(知らないフリ、喜んでいるフリなどのフリ)と呼んだことがある(南 1980)。たとえば、同じことがらを表わすにしても、それをストレートに言うか、もってまわった婉曲な言い方をするか、皮肉っぽい言い方をするか、淡々とした言い方をするかといった違いがあることは、われわれが日常よく経験するところである。ことばの形の上に現れた特徴でいうならば、あらたまった調子、くだけた調子、ふつうの(中立的な)調子などというものをあげることもできる。さらに観点を変えるならば、本当のことをいうか、ウソをいうかといったことも、この表現態度の問題とすることができるかもしれない。

ある表現態度(フリ)がえらばれると、それはふつう一定の間持続する。皮肉な調子のものの言い方と、まともなものの言い方とがめまぐるしく交代するということはまずない。また、ウソはある期間それで首尾一貫していないと、ウソとしての効果をあげることはできない。ある種の表現態度が持続している

一定の間は、その観点から見たかぎりにおける談話のまとまりである。こうしたことから、表現態度は、談話の単位を考える上において、また談話のタイプを分ける上において重要な役割をはたす要素であると考えられる。

(6) 媒体

言語的コミュニケーションは、かならずなんらかの媒体を通して実現すると考えられる。この概念を広く考えれば、二人の人が向きあって話をする直接の会話の場合にも、やはり媒体はあるとすることが可能である(ゼロの媒体)。積極的な形を持った媒体については、まず、つぎの二種類を区別する。



前者には、電話、放送、録音、録画、手書きのもの、印刷物(コンピュータ・ワードプロセッサの類を利用した印刷も含む)などがある。後者は、人間的媒体といってもいいであろう。たとえば、使いの者に伝言を言わせる、子ども、老人、体になんらかの障害のある人が、親あるいは他の代理の人に言ってもらう(書いてもらう)などがそれである。

さて、一つのまとまった言語表現は、ある一定の種類の媒体によって現れるのが原則であると考えられる。一回の電話の話、一巻のテープに録音した話、一通の手紙、一編の小説を内容とする単行本など、それぞれまとまった言語表現である。もっとも、具体的な個々の場合については、いろいろな問題がある。印刷された手紙の文章のあとに、ペンで何かを書き添えたものなどは、それぞれを別にして扱うべきか、全体をひとまとまりと見るか。また、同じ媒体でも、談話のまとまりとしては別にして扱った方がよいものが伝えられることもある。たとえば、一つづきの電話で、AとBとがひとしきり話をしたあとで、Aに代ってCがBと別の話をはじめるというようなことは、われわれが日常よく経験するところである。

(7) 状況

言語的コミュニケーションが起る際の四囲の状況であって、そのコミュニケーションの内容および形式を規定するものである。従来の言語生活研究などで「場面」と呼ばれていたものの大きな部分がこれにあたる。ひろく考えれば参加者、媒体などもこれに含めることができるかもしれないが、それらは別にあげたので、ここでは除くことにする。一応つぎの四種を区別する。

社会的 公的な場合か私的な場合か、特定個人を相手にしているか不特定多数を相手にしているか、他に聞いている人間（ワキの受け手）がいるかどうかなど。もっとも、これらの問題は参加者のところでも取り上げた。

心理的 緊張した雰囲気かリラックスした雰囲気か、負い目があるかないかなど。

生理的 発音器官、聴覚器官に障害があるかないか、手や目が不自由か健全かなど。

物理的 室内か戸外か、まわりがやかましいか静かか、立ち話か坐って話しているか、そのほか天候など。

以上の社会的、心理的、生理的、物理的のいずれについてみても、それが関係する言語的コミュニケーションになんらかの影響を与えるものでなければ、この場合の状況として意味をなさない。

(8) 文脈

文脈といっても、いろいろの意味のものが考えられる。ここでは有意味的な言語要素の連続に関係があるものにかぎる。ということは、音素とか単音の連続については考えないということである。すなわち、たとえば「音素 XYZ の連続があり、Y は X-Z という文脈において現れている」などということは問題にしないということである。

ここでは、文脈というものを、一般的につぎのようなものと仮定する。

ある言語表現に先行または後続、あるいはそれに沿う形で存在し、かつその言語表現を形式面、内容面において規定する情報の連鎖。

文脈につぎの2種類があると考える。

a 言語的文脈

b 状況的文脈

a は、その文脈に関係する言語表現自身によって与えられる情報の連鎖(または情報の集積)である。たとえば、

今月はじめこの道路のバイパスが開通した。それによって交通の渋滞が非常に緩和された。

という2つの文の連続があったとする。「それによって…」にあたる情報は、その直前の「今月はじめ…開通した」という文によって与えられている。そしてこれらの2つの文は一つづきの言語表現を形成する。こういうようなのが言語的文脈である。

b は、その言語表現に関与する状況から与えられる情報の連鎖(または情報の集積)である。そして、この状況的文脈は

b₁ 事物的情報源によるものb₂ 記号的情報源によるもの

の2種に分けることができると考える。

b₁ は、問題の言語表現に先行または後続、あるいはそれに沿う形で生起する言語以外のものごとで、その言語表現を形式面あるいは内容面において規定しているものである。たとえば、料理を教えている人が料理のいろいろな手順の進行に従って説明をしたり、指示をしたりするようなのが、一つの典型的なものである。この場合、説明や指示のことばにとって、進行する料理の手順は状況的文脈(そして事物的情報源)となる。

b₂ は、ある言語表現を続けていくもとなる情報が、それに先行、後続、あるいはそれに沿って起る、なんらかの記号による表現によって供給されるものである。これをさらに、

言語的情報源によるもの

非言語的情報源によるもの

の二つに分けることができる。言語的情報源によるものの具体的例としては、ラジオを聞きながら、あるいはテレビを見ながら、そこで話されていることを話題にした談話を続けることなどがそれである。また、なにかを読みながら、

それについて話をするということもある。これらの例では、ことばが情報源となっているという点ではaと似ている。しかし、aの場合は、情報源となる言語表現と問題の言語表現とは、一つづきのものであると認められる。b₂の言語的情報源によるものの場合、情報源となる言語表現と問題の言語表現とは別のもの（または別のレベルのもの）である。非言語的情報源によるものというのは、言語以外のなんらかの記号の表現によって情報が供給されるものである。

文脈をこのように分類したが、実際のありかたとしては、ここで分けたものが複合した形で現れることもしばしばあると考えられる。b₁にしろb₂にしろ、状況に依存する文脈がありながら、aの言語的文脈も形成されることもあるだろう。

(9) ネットワーク

ここでネットワークと称するのは、参加者および参加者どうしの間の、言語的コミュニケーションによる情報の流れの関係である。とくに、送り手および受け手と、その間の関係である。いくつかのタイプを区別することができるが、ここでは、参加者間の情報の流れ方と、参加者の量的性格の二つの面を問題にした分類を取り上げる。

まず、情報の流れについて

独話 一定の送り手から受け手へ一方的に話が行われるもの

対話 送り手と受け手が交代して、その都度情報の流れの方向が変わるものとを区別する。

独話については、参加者の量的な面に関して、以下のものをさらに区別することができるだろう。

1対1 この型のものが、話しことばで現実にもいつも起るかどうかは問題だが、たとえば、ある送り手からある受け手へ一方的に命令を下すとか、一方がなにかをしやべりまくり、相手は無言のままでいるといった場合がその例となる。書きことばでは、通常の私信の多くはこれにあてはまるものであろう。さらに、送り手側あるいは受け手側におけるワキの参加者の有無によって区別することが必要な場合もあるかもしれない。

1 対複数 送り手が1人で、受け手側が複数ということである。さらに、つぎのように分ける。

一対特定複数 受け手の範囲がきまっているもので、たとえば、ある会場における講演、教室における講義、限定された範囲の人たちに送る同文の書簡、書類など。

一対不特定多数 話しことばでは、一般の放送、街頭での宣伝、車内・店内でのアナウンスなど。書きことばでは、新聞、雑誌、宣伝・広告のチラシ、ポスターその他。

以上のほかに、機械的に考えれば、複数対1、複数対複数、というタイプもありうる。複数対1は、1人の受け手に対して、複数の送り手が同時にことばを発するというわけだが、話しことばでは実際にはあまり考えられないことである。偶発的に複数の者が1人に対して声を揃えてなにかをいうことはあるかもしれない。1人を相手にしたシュプレヒコールがあれば、この例となる。いわゆる“つるし上げ”はこのタイプに近いものか。書きことばでは、個人にあてられた連名の文書がこの例となる。

複数対複数。ここでは受け手側の特定、不特定は区別しないで考える。話しことばでは、あるグループの人間が一方的に他のグループの人間に対してことばを発するのがこれである。シュプレヒコールなどで、これに該当する例になるものはあるであろう。書きことばでは、複数の受け手に送られる連名の文書。

1 対複数、複数対複数のものについては、情報の流れ方に関して、さらにいくつかのタイプを区別することが可能である。一つは、「一段型」と「多段型」との区別である。

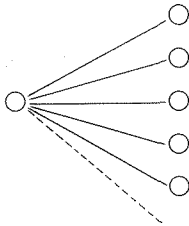
一段型 複数の受け手のそれぞれに送り手からの情報が同時に行きわたるもの。

多段型 複数の受け手が何段階かに分かれて、送り手からの情報を順次受け取るもの。

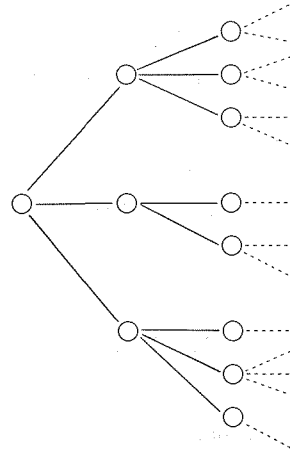
別の区別のしかたもある。「拡散型」と「線条型」とに分ける。前述の一段型は拡散型である。多段型には、拡散型と線条型とがある。

対話の場合にも、量的な面に関して、一対一、一対複数、複数対複数の型が

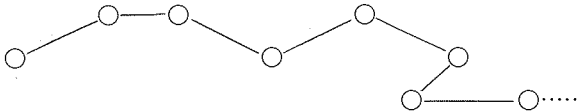
一段型 (= 拡散型)



多段型 (拡散型)



多段型 (線条型)



ある。そして、対話における情報の流れ方については、一対一、一対複数、複数対複数を通じて、つぎのようないくつかの型を認めることができる。

まず、対話には送り手と受け手の交代がある。その交代のしかたに、つぎの二つを区別する。

交互

自由

交互というのは、ある原則によって送り手と受け手が規則的に交代するものである。自由というのは、その点規則的でなく、随時交代が行われるものである。場合によっては、一方がしゃべりつづけて、独話の観を呈することもある。また、だれかの発話に他の者がわりこむこともある。

もう一つ別の見方からする型の区別が考えられる。

主導——追随

対等

これは、情報の流れ方といってもより質的なものである。主導——追随型は、

だけれが、話の進め方について、いわゆるリードをするもの、対等は、そうしたリードをする者とリードされる者との違いが認められないものである。もちろん、いろいろな段階の中間的な存在があるはずである。

(10) 非言語的表現

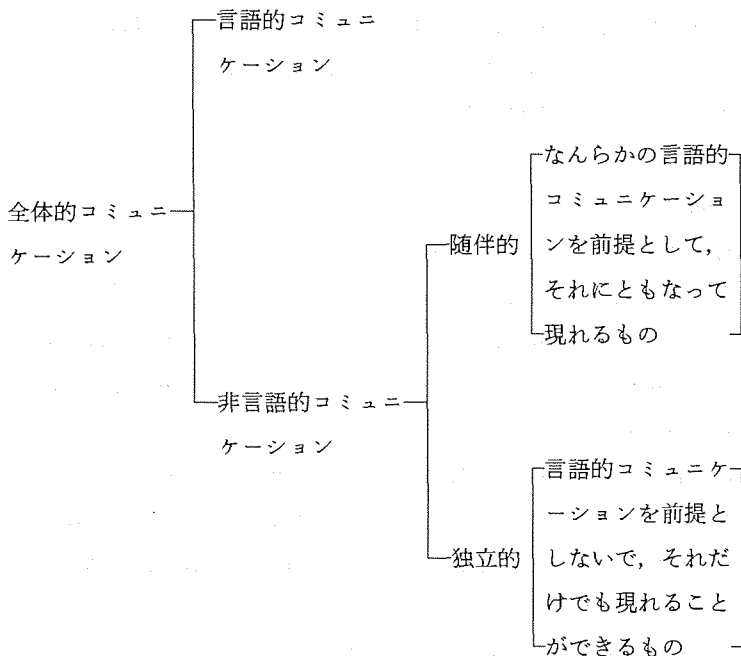
人間の行うコミュニケーションの中で、ことばによるコミュニケーションの比重が大きいことは、たぶん疑いない。しかし、そのことばも実際のコミュニケーションの中で使われる場合には、つまり実際の言語行動においては、それだけが独立して現れるということはない。なんらかのことば以外の要素といっしょに現れるのがふつうである。

たとえば、話しことばの場合には、話にともなう顔の表情、視線、身ぶり、姿勢などがある。書きことばの場合には、どんな材料を使うか（紙の種類、ペンやインクの種類、印刷の種類など）とか、ことば以外の伝達方法（挿絵、写真、グラフなど）を使うかといったことがある。

また、言語的な要素なのか、非言語的な要素なのかははっきりしないものもある。話しことばにおける声の質（高い声、低い声；かたい、あらたまった声、やわらかい、甘えるような声など）とか、各種の間投音、書きことばにおける文字の書体（楷書が草書かなど）、いわゆる書式などはその例である。

以上のようなものは、ただ無意味にことばにともなって現れているというのではなくて、人間の行うコミュニケーションの全体の中でなんらかのはたらきを持ち、なんらかの内容を伝えていると考えられる。

このように、人間の行うコミュニケーションでは、言語的な手段によるものと、言語以外の手段によるものとの、たがいに協力して全体的なコミュニケーションをかたちづくっている。それらを一応ことばを中心として眺めるという観点から概観すると、つぎのようになる。



ここで、非言語的コミュニケーションを「随伴的」なものと、「独立的」なものに分けたのは、林四郎の考え方にしたがったものである（林 1973）。随伴的なものというのは、たとえば、さきにあげた話しことばの声の質、話にとまらう表情や身ぶり、書きことばにおける紙やインクの種類を選択、印刷方法の選択などである。つまり、なんらかのことばによるコミュニケーションの存在を前提にしなければ考えられないものである。それに対して、独立的なものとしては、服装の種類を選択（フォーマルかカジュアルかなど）、服装の着脱（帽子をかぶる、とる；手袋をはめる、とるなど）、表情、身ぶり、ものごしなどの中で言語行動に伴わなくても現れることができるもの、各種の映像を利用した伝達手段で、ことばと共存しなくても現れるものなどをあげることができる。

1.1.3. 談話の単位

(1) 書きことばにしる、話しことばにしる、なんらかの談話を分析しようとする

る場合には、まずその単位を考える必要がある。われわれは、語彙の調査・研究においては、単語あるいは形態素といった単位を用いる。文法研究でも、文、各種の句、単語、形態素などの単位を使うことによって文法体系を記述する。談話の研究においても、そこで使う単位をきめないことには、分析の対象を資料から切り取ってすることができない。たとえば、談話の種類と語彙の現れ方との関係、談話の種類と敬語要素の現れ方との関係を分析する場合にも、対象とする談話の範囲を確定するために、まず単位をきめておく必要がある。

書きことばの資料には、形の上でもわかりにきちんといくつかの部分に分かれているものが多いようで、それらを手がかりとして幾種類かの単位を考えることができると思われる。たとえば、まず一つの作品があり、それがさらに部、章、節、段落などといった、形の上からも内容の上からも切れ目やまとまりが明らかにわかるものに分かれていることが多い。新聞記事でも、見出し、いわゆるリードの部分、本文の部分とはっきり分けられるものがすくなくない。しかし、書きことばの資料がすべてはっきりした部分の切れ目を示すものばかりであるとはかぎらない。形の上からは、はっきりとわからないものもある。手紙（とくに私信）などはその一例である。

話しことばの資料においては、一般的にいって、単位的なものを考えるための手がかりを見つけることがなかなか容易ではなさそうである。それでも、前に述べたように、演説、講演、ラジオ・テレビのニュース、会合でのスピーチなどは、書きことばに近い性格を持っていて、比較的扱いやすいように思われるが、日常会話は、その性格上単位的な部分をとらえるのがむずかしい。とはいうものの、日常の会話の中で、形の上から見ても、内容上の性格から見ても、全然切れ目のない話がいつまでも続くということは、現実にはありえないことである。どこかに単位的部分の切れ目が見つかる可能性がある。

(2) 単位認定の手がかり

単位認定の手がかりとしては、まず、前の1.1.2.で取り上げた談話の要素がある。一般的にいえば、それらは談話のまとまりと切れ目を見つけるための、なんらかの目じるしとなる。それぞれの要素についての、談話の単位認定に関

して問題となる点を列挙すれば、つぎのようになる。

談話の要素	問 題 点
言語表現そのもの	使用言語の種類, 形態の連続性, 切れ目 (ポーズ)
参加者	一定の組み合わせの持続性, 参加者の交代
話題	等質性, 切れ目
言語的コミュニケーションの機能	一定性, 切れ目
表現態度	一定性, 切れ目
媒体	同種のものが持続するか, 異種のものに変るか
状況	連続性, 非連続性
文脈	連続性, 非連続性
ネットワーク	連続性, 非連続性
非言語的表現	同種のものが連続するか, 異種のものに変るか

談話の単位を見つけるための手がかりとしては、以上の諸要素のほかに、談話の全体的構造の型とでもいうべきものをあげることができる。あるまとまった言語表現では、それを構成している諸要素およびその要素間の関係に、一種の型あるいは規則性を見出すことが可能な場合が多い。たとえば、言語表現のまとまりのはじめまたは終りを示す積極的な要素が現れることがしばしばある。書きことばにおける章、節の番号、小見出しの類などはその例である。手紙の拝啓、前略、敬具、草々などもそうである。話しことばでも、その種の要素はいくつかあげることができる。放送のニュースのはじめの「7時のニュースです」とか、スピーチのはじめまたは終りのことば、日常会話のはじめまたは終りのあいさつなどの例がある。こうした要素あるいは要素間の関係に見られる型は、それがある程度確認された場合には、実際の言語表現の単位的部分を見つけるための手がかりとして利用できると思われる。

(3) 談話の単位の性格

従来述べられてきた談話（文章という名称で呼ばれていることがしばしばあるが）の定義を見ると、それ自身の内部の統一性、完結性、およびその前後の文脈との断絶をあげているものが多い（『国語学辞典』『文章』の項、市川 1968、永野 1972 など）。こうした内部の統一性や完結性、あるいは前後の文脈との切れ目については、抽象的な段階で考えているかぎりでは、それで説明できるように見える場合が多いかもしれない。しかし、それらを具体的ないくつかの点——たとえば、上述のいろいろな手がかり——について見ていくと、はっきりしない場合がすくなくない。現実にある、なんらかの談話の単位にあたると思われる言語表現のまとまりについて見ると、すべての点に関して同じようにまとまっている、あるいは他とくぎられているという状態ではないように見える。ある点に関しては、他の部分と区別されて切れているかもしれない。が、他のある点に関しては、続いているかもしれない。親が子どもに夜寝る前になにか話をしたとする。その翌朝になって、またその続きを話したというような場合がそれである。形——切れ目の点では就寝中の何時間かの中断がある。しかし、話題の点では続いている。あるテーマについての報告を何人かの書き手が分担して書いた場合は、話題について連続性があるが、参加者（書き手）の点では切れていることになる。

一般的に言えば、図 1、図 2-1、図 2-2 にあげたようなさまざまな場合がありうるだろう（それらの図では前にあげた談話の要素の中から、「言語表現そのもの（形態、使用言語）」「参加者」「話題」「言語的コミュニケーションの機能」「表現態度」「媒体」をあげ、それに「全体的構造」を加えた）。

現実にある談話の中の部分のいくつかの例について、上述の諸点を検討してみると、およそつぎのようになるとと思われる。話しことばと書きことばとに分けて示す。

いずれにしても、われわれが談話の中のまとまりと認めるものは、すくなくとも今まであげてきたような諸点——まだほかにもあるにちがいないが——のどこに注目するかによって、その切れ目が違ってくる、一種の相対的な性格を

持つものだという認識が必要である。とはいっても、これらの諸点が、談話の中のまとまりに関してみな同等であるかどうか問題なので、どれがどれに優

図 1

	言語表現 (形態)	言語表現 (使用言語)	参加者	話 題	機 能	表現 態度	媒 体	構 造
A	■	■	■	■	■	■	■	■
B	■	■	■	■	■	■	■	■
C	■	■	■	■	■	■	■	■
D	■	■	■	■	■	■	■	■
E	■	■	■	■	■	■	■	■

A, B, …Eはそれぞれ単位的なまとまりを見せる部分

■ や ■ は、切れているかどうかを示す。構造については同じ構造の型に参加しているかどうかを示す。

図 2—1 話しことばの場合

	言語表現 (形態)	言語表現 (使用言語)	参加者	話 題	機 能	表現 態度	媒 体	構 造
1 回の電話	○	○	○	△	△	△	○	○
訪問者と主人側との会話	○	○	○	△	△	△	○	○
家族間の日常会話	△	○	○	×	×	△	○	△
1 回のスピーチ	○	○	○	○	○	○	○	○
講演・演説	○	○	△	○	○	○	○	○

図2-2 書きことばの場合

	言語表現 (形態)	言語表現 (使用言語)	参加者	話題	機能	表現態度	媒体	構造
手紙	○	○	○	△	△	△	○	○
随筆	○	○	○	○	○	○	○	△
新聞記事(本文)	○	○	○	○	○	○	○	△
雑誌記事	○	○	○	○	○	○	○	△
新聞(全誌面)	○	○	△	×	×	△	○	△
総合雑誌(全体)	○	○	△	×	×	△	○	△
個人文集	○	△	○	△	○	△	○	○
複数の書き手の文集	○	△	△	△	○	△	○	○
雑誌の広告	○	△	○	△	○	△	○	△
部・章・節・段落など	○	○	○	○	○	○	○	○

○＝言語表現(形態)、構造については、はっきりした特徴を示す。その他の項目については、一定または等質的。
△＝はっきりした特徴を示したり、示さなかったり。あるいは、一定または等質的だったり、そうでなかったり。
×＝はっきりした特徴を示さない。あるいは、一定または等質的でない。

先するか、あるいはどれがより安定した基準でありうるかといった、おたがいの間の関係の検討がこれからの課題である。

(4) 単位の種類

いずれにしても、談話は切れ目なしにいつまでも続くものではないから、談話の構造を分析する、または談話の類型を明らかにするといった、いろいろな観点からする研究のためには、今まで述べてきたような手がかりによる、なん

らかの単位を切ることが必要である。そして、その際の単位には、さまざまな種類のものを考えることが可能かつ必要であると思われる。

さまざまな種類の単位といったが、それらの中には談話に固有のものも考えられるであろうし、一方、言語研究の他の分野ですでに用いられているものが、談話の研究でも使われるということもあるであろう。

談話固有の単位として、筆者は以前日常会話について「談話」（単位の名まえとしての）と名づけた、一種の単位を仮定したことがある（国語研 1971, 南 1972）。これは前にあげた 11 の手がかり（「言語表現そのもの」以下 10 の談話の要素および「全体的構造」）を使ったのではなくて、「ことばの形」「参加者」「話題」「言語的コミュニケーションの機能」および「ことばの調子」（これは前述の「表現態度」の一部にあたる）によって区切りを認定した単位である。大ざっぱにいうと段落に近いと思われるが、短かいものから相当長いものまであり、かならずしも段落とは一致しない。短かいものは、ヨイショとかアア オモシロイといった一語または二語だけからなる一つの文を一談話としたものもある。長いものになると、一談話で 221 の文からなるものもある。このようにして分けた談話（単位としての）によって、日常会話における語彙的要素や、敬語の要素の現れ方を調べて、その特徴を相当程度明らかにすることができたと、筆者は考えている（国語研 1971, 南 1972）。

筆者は、さらに、もう一つ大きな単位——いくつかの談話（単位としての）が集まってできる単位を仮定し、これを「会話」（単位としての）と呼ぶことを提案した（南 1972）。これについては、二つの理由をあげることができる。第一の理由は、談話（一般的な意味での）は、続けようと思えばいくらでも続けられるものであるにしても、その中でいくつかの談話（単位としての）が、まとまりを作る場合があるということである。たとえば、ある家を、ある人が訪ねて、その家族と談話をかわした、ひとしきり話をした上で訪問者はその家を辞して帰っていったとする。その訪問者が、その家の家族と話していた間の話は、参加者の組合わせの点でひとまとまりのものである。これを一つの談話（単位としての）と見るという意見もありうると思うが、そのひとまとまりの話は、話題その他の点でいくつかの談話（単位としての）に分かれる可能性がある

る。第二の理由は、そのいくつかの談話（単位としての）のまとまりは、単にばらばらのものがよせ集められているのではなくて、なにか一種の構造(の型)をかたちづくっているように思われることである。そのまとまりの中には、いくつかの違った種類の談話（単位としての）が現れるが、全体の中でそれぞれの占めるべき位置は、はばきまっているように見える。たとえば、「あいさつ」ではじまり、そのあとに「用談」「雑談」が続き、また「あいさつ」で終るといったようなものである。

今のところ筆者は、この会話（単位としての）を談話の最大の単位として考えているが、一方、小さい方の単位もいくつか考える必要があるであろう。

談話（単位としての）よりも一段小さいもので、かつ談話固有のものとして、「段落」とでも呼ぶべきものが必要ではないかと考えているが、それをたてるべき確証を得ているわけではない。さらに、段落よりも小さく、文よりは大きい単位として、一種の文と文との連結体も考えられる。「連文」などと呼ばれるものである。

談話固有でない単位——つまり、文法論や語彙論ですでに用いられている単位には、よく知られているとおり、いくつかのものがあ、それらも談話の構造の分析において重要な役割をはたす。すなわち、文、各種の句、単語、形態素などがそれである。

1.1.4. 談話行動の過程

談話行動が実際に行われるときの過程について考えた一つの仮説的モデルをつぎに述べておきたい。送り手の行動と受け手の行動とに分けて見ることにする。

(1) 送り手の過程

まず、談話について「空間的構造」と「時間的構造」の二つの構造を区別する（南 1978）。

空間的構造というのは、ある言語表現の全体的構造の中で、各種の言語要素

が、その言語（方言）の体系に基づいて、なんらかの構造——文法的構造など——を作っている側面に着目したものである。たとえば、「バラが咲いたよ」「咲いたよ、バラが」の二つの言語表現では、それぞれを構成している成分（バラが、咲いたよ）の順序が違う。しかし、われわれは両方ともバラ（が）——咲いた（よ）の間に共通した（体系的）関係を認める。常識的な表現をとるならば、両者とも主語——述語の関係を持つと考える。このような時には、それらの二つの言語表現の空間的構造に注目していると考ええる。

時間的構造というのは、まず空間的構造に時間の軸にそった線条的な形を与えて、表現を実現するしくみのことである。上にあげた例でいうならば、「バラが咲いたよ」「咲いたよ、バラが」の間には、共通した空間的構造があると考えられるにもかかわらず、われわれの目にふれる（耳に聞える）形は違っている。その違っている形を与えるのが時間的構造である。さらに、途中から介入する情報に対応する変更（取り消し、訂正、追加）に関する処理も時間的構造に含めて考えることにする。

空間的構造が作られることを「形成」と呼ぶ。そして、形成の過程を、言語の要素の選択の過程と考える。

言語要素の選択には、かならずその選択を規定する条件がある（形成条件）。そして、ある条件が適用される対象と、その適用によって選択が行われた結果がある。

$$A \longrightarrow a / C$$

ここに A=対象 a=結果 C=形成条件

形成条件には、二つの種類のものがある。すなわち、外的条件と内的条件。

外的条件とは、言語の世界の外のことと認められるものである。これはさらにつぎの三種のものに分けられる。

指示対象 主体的意向 付随的状況

内的条件は、言語の世界の中のものごとである。まず、その言語（方言）の体系そのものが、もっとも一般的なこの種の条件であるといえるが、さらにこまかく見ていくと、意味（言語的意味）、言語行動の型、談話の種類などに関する諸条件、さらに文の構造についての諸条件、音形に関する諸条件、表記に関

する諸条件などいろいろのものがある。

それぞれの対象と条件については選択の規則がある（形成規則）。

言語要素の選択の過程には、いくつかの中間段階があると考えられるが、その中間段階における条件の適用の対象と選択の結果は、すべてなんらかの意味での要素の類であるとする。これを「中間状態」と呼ぶ。

選択の過程の最初の段階における要素の類は、ある言語（方言）の体系の総体である。これをかりに「原状態」と呼ぶ。

選択の内容についていえば、それは要素についてのなんらかの意味での限定である。段階を追って限定されていく結果、要素の類のメンバーはすくなくなる。

限定の結果、一つの要素が残ったもの、それがわれわれの目にふれ、耳にきこえる言語表現である。「最終形式」または「output される形式」と呼ぶ。

すべての言語表現の空間的構造形成の過程の構成要素は、つぎのように表わすことができる。

[L, S, F, R, C]

ここに L=原状態（問題の言語または方言の体系の総体）

S=中間的状态 ($S_1, S_2, \dots, S_n$)

F=最終形式

R=形成規則

C=形成条件

また、要素選択の過程を一般化して示すと、つぎのようなものになる。

$$\left[\begin{array}{l} (L \rightarrow S_1) / C_1 \\ (S_1 \rightarrow S_2) / C_2 \\ (S_2 \rightarrow S_3) / C_3 \\ \vdots \\ (S_{n-1} \rightarrow S_n) / C_n \end{array} \right. \quad S_n = F$$

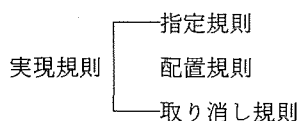
時間的構造というのは、まず空間的構造に時間の軸にそった線条的な形を与えて表現を実現するしくみのことである。前記の例でいうならば、「バラガ咲イ

タヨ」「咲イタヨ、バラガ」の間には共通した空間的構造があると考えられるにもかかわらず、われわれの目にふれる（耳に聞える）形は違っている。その違っている形を与えるのが時間的構造である。さらに、途中から介入する情報に対応する変更（取り消し、訂正、追加）に関する処理も時間的構造に含めて考えることにする。

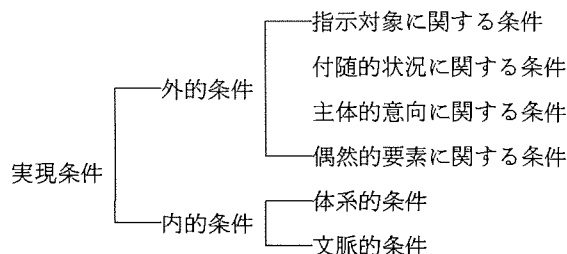
形成されたある空間的構造を、時間の軸にそった線条的な形として表現することを「実現」と呼ぶ。

言語表現の実現には「指定」「配置」「変更」という三種類の過程があると考えられる。指定とは、形成された空間的構造のどの部分を実現するかという、その範囲の指定である。配置とは、指定された部分をどこに位置させるかということである。変更というのは、途中から介入する情報に対応する言語表現の変化についてのものである。これには、すくなくともつぎの四つの段階を区別することができる。すなわち、すでに形成された空間的構造のなんらかの部分の取り消し、その部分についての空間的構造の再形成、再形成された空間的構造についての再指定、そして再配置。

言語表現の実現についての規則を「実現規則」と呼ぶ。それには、つぎの三種類のものがある。



また、どういう場合にはどういう規則がはたらくかということについての条件を「実現条件」と呼ぶ。つぎのような種類を考える。



一般に言語表現の実現は、空間的構造と時間的構造の両方があるとはじめて成立する。そのうちのいずれか一方が欠けていても、言語表現は成立しない。

ここに空間的構造を sS 、時間的構造を sT 、実現した言語表現(最終形式)を F とすれば、

$$F = sS \cdot sT \quad \text{となる。}$$

(2) 受け手の過程

受け手の側の行動(常識的な意味では理解と呼ばれる行動)に、二つの過程の存在を仮定する。それぞれを「確定」と「把握」と呼ぶ(南 1984)。

確定というのは、送り手の発した言語表現を、それが何であるか、どのような言語記号の要素(またその連鎖)であるかを確認することである。把握というのは、確認された言語表現によって、それが表わす内容を知ることである。たとえば、そばにいる友人から「オイ、ソノ雑誌取ッテクレナイカ」といわれた場合、その発話にあたる文の形、またその文の構成要素(オイ、ソノ、雑誌…)が何であるかをたしかめるのが確定である。そして、その内容(自分に対する呼びかけ、そこで話題になっている特定の雑誌、取ってほしいという要求など)を知るのが把握である。

もちろん、確定と把握はそれぞれまったく別にあるものではない。送り手の発した言語表現を作っている言語記号の要素の確定があってはじめて内容の把握ができるともいえるが、また逆に内容の把握によって言語記号の要素の確定が可能になるともいえるのである。両者は相互依存的というべきか、いやそれよりも、同じ受け手の行動の二つの側面を抽出してきたものだといった方が正確である。

確定の過程を考えるということは、きわめて大ざっぱにいうならば、受け手の側にも送り手の側と同じような「言語表現を作る(言語表現の構造を形成し、実現する)過程」を認めることである。したがって、確定の過程の基本的性格は、送り手における言語表現の形成と実現の過程とほぼ共通している。すなわち、受け手の側にも、言語記号の要素の類、選択にかかわる各種条件、そしてそれらに関する言語主体(この場合は受け手ということになる)の処理がある

と考えるのである。

ここで言語要素の類といったものには、確定の過程の諸段階にに応じていろいろなものが考えられる。その性格は、表現（送り手の行動）に関して考えたものと同じといってよい。ところで、その一番もとになるものは、これまた表現に関して述べた原状態である。この場合は、受け手が持っている言語記号の要素の類の総体、つまり日本語なら日本語の広い意味での体系（語彙的要素はもちろん、文法的要素、音形、表記の面の要素、さらに表現の型、談話の型、言語行動の型など）の総体である。受け手の方にこうした用意がなければ、送り手からどんなメッセージが来ようとわかりようがない。

選択のための各種の条件も、基本的には表現の場合と同じものを考える。まず、外的条件としては、指示対象に関するもの、付随的状况に関するもの、主体的意向に関するもの、および偶然的要素に関するものの四つがある。ただし、その中の指示対象としたものについては問題がある。表現の場合、指示対象と呼んだものの内容は、要素の選択にかかわる外界の事物である。受け手の行動においても、そうした条件が考えられるだろうか。ところで、一般的にいて受け手の行動が送り手の行動（表現）と明らかに違っていると思われる点の一つは、まず送り手が発したメッセージがどうしても必要な条件だということである。ここでは、そうした送り手が発したメッセージを、表現の場合の指示対象にあたるものと考えておく。

付随的状况は、受け手の行動においてもいろいろな点で無視できない条件である。もちろん、この場合は受け手を取りまく状況のことである。たとえば、「ヤスメ」という送り手からのメッセージは、なにか仕事をしている最中に聞く時と、学校での体育の時間に聞く時とでは同じのものではない。けっきょく、記号要素が違うことになる。把握される内容も当然違ってくる。したがって、それに反応する行動も異なるのはいうまでもない（リラックスした自由な姿勢／きめられた「ヤスメ」の姿勢）。

つぎに、主体的意向も、送り手のものではなくて、受け手の主体的意向である。一般的にいて、受け手は送り手のメッセージを忠実になぞっているわけではない。一字一句もれ落ちがないように聞いたり、読んだりすることは、む

しろめずらしい。適当に読みとばしたり、聞きとばしたり(?)することが、かえって全体的な把握に役立っているとも考えられる。内容的な面に関しても、paraphrase などはおだやかな方で、まったく新しい解釈をしてしまうこともしばしばある。極端な言い方をするならば、受け手は送り手のメッセージを受けて(または、受けながら)、別の新しい言語表現を作っているのである。つまり、それがここでいう確定である。

さきに、内的条件として、体系的条件と文脈的条件の二つをあげたが、受け手の場合も同様である。その中の体系的条件を、確定の面に即していうならば、送り手からのメッセージを受け取って、それが言語記号の要素(の連続)としてどのようなものであるかを確認していくときに、日本語なら日本語の体系内でありうる形として考えるわけである。ときにそれから逸脱することがあるとしても、全体としてはありうるものである必要がある。

文脈的条件は、一般的に言えば、先行する言語表現の表わす内容が、後続する言語表現のいろいろな面を規定するものをいう。音の形では同じ「ホケン」という言語表現(の部分)を聞いても、その前に「××生命デゴザイマスガ…」といったことばがあれば、それは「保険」だと考える。また「学校」「体育」あるいは「健康」などといったことばのあとに出てきた場合には、たぶん「保健」の方だと見当をつけるであろう。

表現の場合と同様、確定にも、さきに述べた「空間的構造」と「時間的構造」(過程として見る場合には、それぞれ「形成」と「実現」)があると考ええる。それぞれの性質も基本的には表現の場合と同じである。

空間的構造(形成)は、先述のように、ある言語表現の構造の中で各種の言語要素がその言語(方言)の体系に基づいてなんらかの構造——文法的構造など——を作っている側面に着目して考えたものである。ここでいう確定の場合も、一応送り手のメッセージで使われている言語(方言)の形によるのがふつうであると思われる。当然その言語(方言)の体系に基づく構造があるはずである。

時間的構造(実現)は、これまた先述のように、まず空間的構造に時間の軸にそった線条的な形を与えて表現を実現するしくみである。また、途中から介

入する情報に対応する変更にかかわるしくみでもある。そして、さらにこまかく見ると、この種の構造については指定、配置、変更の三種類の過程があると考えるわけだが、受け手の行動においては、とくにその中でも変更の過程が重要な役割をはたすことに注意したい。それは、送り手のメッセージを受け手が受け取り、確定していく途中で、その受け取り方に変更を加える（訂正を加える）ことがしばしばあるからである。石綿敏雄のこぼを借りていうならば「(うまく) 解釈できない場合は、もう一度フィードバックされて、解釈がしなおされる」のである（林・石綿・南 1983）。つまり、確定の場合も、いったん形成された空間的構造は変更によって取り消しとなり、新しい構造が再形成されることがしばしばあると思われる。

把握は、確定された言語表現によって、それが表わす内容を知ることであるが、その把握の対象にはさまざまなものがあると思われる。

たとえば、個々の事物、およびそれらの間の実際上の関係、あるいは論理的な関係、送り手の各種の判断、送り手の態度、受け手に対する送り手の意図などが考えられる。

把握に関して時間的構造に注目することもできる。常識的に考えられるものの一つは、送り手からのメッセージが時間の軸にそって受け手に受け取られるにつれて、把握の対象が部分的なものから全体的なものになっていくということである。部分的把握と全体的把握として区別することも可能であろう。ただし、両者の間の中間的段階をどのように分けるかについて一般的基準を立てることはむずかしいと思われる。それに「全体」の範囲はいつもはっきりとかぎられたものとはかぎらない。たとえば、一冊の本というのは形の上では他のものと明確な区別がついているのがふつうだが、内容の点ではかならずしも形に対応した境界があるかどうか疑問である。さらに、全体的把握は質的に部分的把握とは異なることに注意したい。つまり、全体的把握は部分的把握の総和ではない。

時間的構造に注目することによって問題となってくる把握の対象がいくつかある。すなわち、全体の文脈、周辺的な事情、背後にあるものごとなどがそれである。さらに、変更（取り消し、訂正、追加など）があった場合には、当然

把握の面でもそれに応じた変更があるはずである。すぐ前で、把握の対象の全体はかならずしも境界がはっきりしないといったが、談話の流れの途中も予定された通りに進行しているとはかぎらないことは、日常よく経験するところである。

1.2. 談話研究の歴史

—— 時枝誠記の残したもの ——

1.2.1. はじめに

時枝誠記 1960 『文章研究序説』（以下の同書の引用等はすべて明治書院版 1980 による）の序には、つぎのような文章がある。

そこ（筆者注：『日本文法口語編』のこと）では、従来の文法学において論ぜられた語論，文論に加へて，文章論の一領域を新しく設定すべきことを提案した。しかし，それは文法学における文章論を提示したに止まり，文章研究の一般的課題がどのやうなものであるかについては，これを明かにするまでに至らなかつた。それ以後，私はこの問題の基礎理論の確立と，課題の探求とに，私の大部分の努力を集中して今日に至つた。（中略）私は本書において，文章研究に関する，考へ及ぶかぎりの問題を引き出すことに努力した。

ここでは，その時枝の提起した問題が後の研究者によってどう受け継がれ，発展したかを考えてみたい。

時枝が『文章研究序説』のなかで提起した問題は，今日の談話研究の広がりとの関連で整理してみると，つぎのようになろう。これらは，必ずしも時枝が重要な点としてあげたものだけではなく，『文章研究序説』のなかではごく示唆的に言及されているにすぎないものもある。とくに「文章研究」の書であるだけに，話しことばへの言及はごくまれにしか見あたらない。しかし，現在の談話研究では話しことばの分析は重要な研究項目になっている。時枝の研究のなかで少しでも話しことばにふれているところがあれば，そこに注目しておくことは必要なことと思われる。

1) 言語行動のモデルに関する問題

『文章研究序説』の大半は、大きく言えば言語行動のモデル論であるといってもよい。ただし、そのモデルは、主として「文章行動」つまり書きことばにおけるモデルであった。

『文章研究序説』では第二篇「各論」、第一章「文章表現の機構」の主として、二「言語の主体と文章」、三「言語の場面と文章」、四「言語の表材と文章」の各項がそれにあたると考えられる。

2) 話しことばに関する問題

これについては、先に述べたように直接問題としてとりあげられてはいない。主として文章あるいは書きことばとの対比のうえでふれられているにすぎない。話しことばが多くとりあげられているのは、第二篇、第一章の三「言語の場面と文章」のなかで、場面との関係が論じられる部分である。

3) 社会行動に関する問題

現代の談話研究のなかで、談話の社会言語学的側面、たとえば、非言語行動まで含めた意味での言語行動様式と社会とのかかわりの分析あるいは会話行動とそれをささえる文化、社会的ルールとの関係などは、重要な研究分野になっている。しかし、『文章研究序説』では、この問題も話しことばに関する問題と同様、正面からとりあげられてはいない。文章との関係でところどころに示唆的な言及があるにすぎない。

本稿では、以上の三点について後の研究者がどのようにそこに含まれる問題を展開していったかを跡づけることが主題となる。ここでとりあげる研究者は、永野賢、林四郎、南不二男の三氏である。もちろん、この小論のなかで、三氏の研究の談話研究のすべてにわたってとりあげることはできない。ごく部分的に筆者の管見に入ったものでしかない。また、以下でとりあげる三氏の研究がすべて『文章研究序説』で提起された問題と直接関係付けられるわけではない。とくに、話しことばに関する問題、社会行動に関する問題については、各研究者によってまったく独自に構想された部分が多いかもしれない。しかし、いずれの場合でも広い意味での時枝の影響は考えるべきことのように思われる。

結論的にいえば、時枝『文章研究序説』のもっとも大きい影響は、その研究の射程の広さあるいは関心領域の広さに由来しているのではないだろうか。そ

のような広さは、まさしく、時枝の言語観そのものの反映であった。言語過程説のもつ、静的な言語構造よりも動的な言語行動を重視する考え方が、現在の日本の談話研究の広がり大きな影響をあたえたのである。

従来の国語学においては、文章論の位置付けの問題が主たる関心事であったようにおもわれる。つまり、『文章研究序説』の序でふれられた「従来の文法学において論ぜられた語論、文論に加えて、文章論の一領域を新しく設定すべきことを提案した」とするその領域の妥当性が問題とされてきたのである。これについては、否定的見解も多く出されてきた。（これについては、『論集日本語研究 8 文章・文体』1979 有精堂の「解説」山口仲美などを参照のこと）しかし、現在の談話研究にあたえた影響という点では、この論争自体はあまり生産的とはいえないように思われる。むしろ、時枝の視野の広さのほうが後進に残したものは大きいといえよう。

また、先に引用した時枝の文からもわかるように、時枝自身の関心も文法学のなかに文章論を位置付け、研究の射程を狭めるよりも、「文章研究」というより自由な枠組みのもとに、ある意味では周辺的な領域を明らかにするほうにあったわけである。

以上の点から見て、大きな観点からいえば、話しことばに関する問題も社会行動に関する問題も時枝『文章研究序説』の影響下にあると言えるはずである。

1.2.2. 文法学における文章論について

本稿の主題である 1 節にあげた三つの問題に進む前に、時枝が構想だけ述べて自身では詳細にわたった研究を進めなかった「文法学における文章論」のその後の展開に簡単にふれておこう。

時枝の構想にほぼ忠実に従って、ということはつまり文法学のなかに文章論という領域が成立するという前提にたって、文章論を展開した中心的な研究者は永野賢であった。永野によれば、文章論あるいは永野のいう文法論的文章論とはつぎのようなものである。

文法とは、言語表現の全体構造を貫く法則の体系である。そして、言語

表現とは、伝達すべき複雑な総体をいくつもの部分的な言語的単位に分析・分割し、それらの単位を関係づけ、順序立てて、時間の延長の上に配列して表出する人間の行為である。従って、文法というのは、言語表現上の単位の内部構造、すなわち統一体としての原理が、言語形式に反映している事象としてとらえられるものである。そこで、文法論とは、このような統一体の成立する原理と法則とを、専ら言語形式という観点から究明しようとするものであって、言いかえれば、言語表現の単位となる質的統一体たる語と文と文章について、下位の言語単位から上位の言語単位の構成される原理と法則とを明らかにし、体系的に整理して記述する方法論であり、さらに、その方法論によって、言語表現を分析・考察した成果が文法論である。ゆえに、文法論には、語論と文論と文章論とがあるということになるのである。

そこで次に、語と文と文章の構成であるが、それぞれを構成する構成要素の結びつき方には明らかに違いがある、ということに着目しなければならない。

まず、語を構成する要素の結合は非常に緊密であり、その結びつきの順序は変えることができない。このような結合の姿を、私は「接着」と呼んでいる。次に、文を構成する要素すなわち、いわゆる文の成分の結びつき方は、語を構成する要素の結びつきに比べて相対的に緩やかで、場合によっては順序を変えることができる。これを習慣に従って「接続」と呼ぶ。それらに対して、文章を構成する要素—これは一応文と考えておくが—この文の結びつき方は、文を構成する成分相互の結びつきよりもさらに緩やかなことが認められる。この文相互の結びつきの姿を、私は、「連接」「連鎖」「統括」という三つの観点でとらえ、「連接論」「連鎖論」「統括論」の三本の柱を立てるのである。

連接論は、文章を構成する文の連続を、隣り同士の二つの文の関係の積み重ねとしてとらえる見方である。つまり、第一の文と第二の文の結合の関係、第二の文と第三の文の結合の関係、第三の文と第四の文の結合の関係というふうに見ていって、結末に至るという考え方である。いわゆる連

文論に近いわけであるが、連文論がふつうは二つの文の論理的・文法的な関係を究明するにとどまっているのに対して、私の接続論は、そうした連文の積み重ねによって、最終的には文章全体の構成を見ようとするのである。つまり、隣り同士の二つずつの文の関係を見ながら全体を考えるのが接続論である。

次に連鎖論は、文の連続における一つ一つの文を鎖の輪に見立てて、文が鎖状に連なることによって文章が成り立っているとする見方である。一つ一つの環は隣の環とつながっていると同時に鎖全体の一環でもあるから、一つ一つの環が鎖全体に対して何らかの役割を果たしているということに着目するのである。この連鎖論を私は三つに分け、まず文の頭にくる主語のつながりを「主語の連鎖」、そして、文末の陳述形式のつながりを「陳述の連鎖」、さらに文頭と文末とを除いた文中の語句が文章全体を通して現れるものを主要語句と見てそのつながりを「主要語句の連鎖」と呼んでいる。

第三に統括論とは、接続論と連鎖論との観点を総合する意味をもっているものであり、文の接続および連鎖に加えて、文章全体を統べ括る文法的特徴をもつ文の姿に着目するわけである。この統括が最終的には文章という単位体の統一性を保っているとする見方である。(永野賢 1985 「文法論的文章論における主語の連鎖という観点について」『学芸国語国文学』東京学芸大学国語国文学会、1986 『国語教育における文章論』共文社に再録より)

引用が長くなったが、ここに永野のいう文法論的文章論の骨格がすべて出ているように思われる。ほかに、市川孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版、森田良行 1958 「文章論と文章法」『国語学 32 号』、長田久男 1984 『国語連文論』和泉書院なども、時枝の文法学における文章論を追究したものといえよう。これらの文章論の特色は、森田「文章論と文章法」における時枝文法、長田『国語連文論』における渡辺文法のように、先行する文文法の体系を文章のレベルにできるだけ忠実にあてはめようと試みた点にある。この関係は、海外の研究でいえば、Harris, Z.S. 1952 'Discourse analysis' Language 28 が構造言語学の方法論を談話のレベルに適用しようと試みたことと平行的な関係に

あるといえよう。ただし、ハリスの談話分析は、そこに含まれていた「変形」の概念が後にチョムスキーに受け継がれ、むしろ文文法のレベルで大きな貢献をすることになる。

これらの文章論の共通点は、それらが主として文章を構成する単位の結合法則に研究の主力をそそいだ点にも見られる。もちろん、永野の先の引用にもあるとおり、統括論などの形で文章の構造を大きく把握する観点も多くの研究者の研究の枠組に用意されている。しかし、実際の成果としては、あまり目立ったものが残されていないのが実状のように思われる。その意味では、海外の談話研究のなかで、van Dijk, T. A. 1978 “Macrostructures” Erlbaum, などに代表される構造論が大きくとりあげられているのに対照的だといえる。

海外の談話研究との対比でいえば、文法学における文章論の研究は、海外における二つの流れと対応するのではないだろうか。つまり、日本の文章論の研究が主としてとりあげてきた文の結合に関する言語形式の問題は、一つは文文法の研究の発展として、文文法では処理しきれない問題を談話のレベルで解決するという形で研究されてきた。その典型的な例は、照応関係あるいは一般的に代用表現の問題である。ここでは、あくまで可能な限り文文法の枠内で処理し、どうしても残る問題を談話レベルで、いいかえれば誤用論において解決しようとする考え方がもたれている。このような研究の例は、照応に関する生成文法的研究に多く見られる。他の一つの流れは、文文法とは独立に文と文との結合関係を分析し、それを構成する言語形式をとり出す方向の研究で、Halliday, M. A. K. & Hasan, R. 1976 “Cohesion in English” Longman などが代表的なものである。日本の永野、市川、あるいは林四郎 1973 『文の姿勢の研究』明治書院などの研究も方向としては後者に近いといえよう。

1.2.3. 言語行動のモデルに関する問題

時枝『文章研究序説』は、先にも述べたように、文章という表現手段に関する広い意味での言語行動モデルということができるように思われる。ただし、そこではそのモデルを構成する要素に関しての説と行動の結果得られた文章の

分析が中心になっていて、行動のプロセスが詳述されているわけではない。(その意味でのモデルはむしろ時枝誠記 1941『国語学原論』岩波書店に見られる。)

ここでは、『文章研究序説』のなかから言語行動モデルがかいま見られる部分を引用してみよう。まず、第二篇第一章の三「言語の場面と文章」の項で『国語学原論』を引用し、「言語の成立条件としての主体、場面及び素材」をあげ、まず主体と場面について、

我々は、場面によつて、我々の気分、態度を制約されると同時に、我々の気分、態度によつて、場면을制約する。

と述べ、また表記と場面の関係についても、

表現と場面との間に、どのような関係があるかといへば、表現は、常に必ず何等かの場面において成立するものである。例へば、画家が、一幅の絵を制作する時、もし画家の頭の中に、その絵が置かれるべき客間、食堂、寺院の壁といふものが想像されてゐたとすれば、それが、この画家のその時の場面であつて、絵は、そのやうな場면을充すものとして表現されるのである。画家は、必ずその表現が、場面に調和するやうに工夫するであらう。これは、表現が場面に制約されたことであり、時には、明るい絵が、食堂の気分を和やかなものにするやうに、場面が、表現によつて制約されることもあり得るのである。

主体と場面、あるいは表現と場面の相互制約関係は、機能的関係と呼ばれ、『文章研究序説』においてばかりではなく、一般に時枝の言語のとらえ方の中核を成す部分である。

ただ、時枝自身はこのような表現行動の動的側面を文章の分析においてはあまり積極的に展開しているように見えない。つまり、このような動的モデルからは、本来表現行動の過程で時々刻々と場面が変化するモデルが帰結するはずなのであるが、『文章研究序説』では、そのような分析はほとんど見ることができない。これは、そこで扱われているのが文章であつて、話しことばの談話ではなかったことによるのであろう。もし、時枝が話しことばの談話、とくに会話の分析を中心課題としてとりあげていたら、おそらく場面が表現行動の過程で発話ごとに変化していくモデルを打ち出していたに違いない。

文章あるいは一般に談話のモデルとして、時間の経過にしたがって変化していくモデルを展開したのは、林四郎と南不二男であった。林は「シンポジウム 記録文章論の開拓」1984『国語学』139号で、つぎのようにのべている。

……文章の意味の特徴は、初めあり、終わりあり、まん中あり、その間にいろいろ紆余曲折があって変容していく。意味のあり方が、時間の流れの中で、過程を経て様々に変容していく。そういう動きを本質的に持っているのが文章の意味だと思います。

また、南も同じシンポジウムで、つぎのように述べた。

今の林さんのお話にもありましたが、文章というものは、時間の経過にしたがって、外形、内容ともに変わっていくものだと、私も考えております。その変わり方ですが、話しことばの場合ですと、相手の反応に応じて変わるとか、あるいは偶然的な事故かなにかといった新しい情報の介入によって変わるなどがあります。そういう途中での変わり方、意味の面でも外形の面でもありうると思いますが、それをどのように分析記述するのか、これは大きな問題だと思います。

林、南がこのような動的モデルを展開していったのも、やはり話しことばの研究がきっかけとなっているように思われる。このシンポジウムでは文章について動的分析の必要性を述べているが、これは話しことばの談話からの反省なのではないだろうか。

林の言語行動モデルに直接関係する論文としては、1974「人の死をめぐる言語行動」『年報社会心理学』15号、1978「言語表現の外側と内側」（ともに林四郎 1978『言語行動の諸相』明治書院に収録）、1978「文章の伝達」『言語』7巻5号がある。なお、1923「表現行動のモデル」『国語学』92号は、むしろモデルの構成要素を詳しく列挙したもので、動的側面にはほとんどふれられていない。

談話あるいはそのなかでの言語表現の動的側面についてもっとも積極的にモデルのなかにとりいれようとしているのは南であろう。南不二男「言語表現における「空間的構造」と「時間的構造」」『国語学』115号では、表現の過程での訂正などの現象を視野に入れた「一種の柔構造」としての言語表現の構造モデルを提案している。この論文はつぎのような文章ではじまっている。

実際の言語表現は、その表す内容もまた表現の形も、はじめから固定した不変のものとしてあるのではなくて、途中で変化することができるものである。たとえば、途中で話題が変わる、相手の反応を見ながら話す、まわりの状況の変化に応じて話し方を変える、伝達的手段を切りかえるといったことは、われわれが日常しばしば経験するところだ。われわれの言語表現の構造には、こうした途中からはいつてくるなんらかの情報に対応して変化しうる可能性（一種のフィードバックによる変化の可能性）が存在することを認めなければならないであろう。

このような指摘は、時枝『文章研究序説』の主体と場面、あるいは表現と場面の相互制約関係、つまり機能的関係を談話の生成過程に導入したものと考えられる。

また、南は1984「理解のモデルについてのおぼえがき」『金田一春彦博士古稀記念論文集、第2巻、言語学編』三省堂では、生成のモデルだけではなく、理解の側面についても興味深いモデルを提案した。ここでは、時枝の『国語学原論』における表現—理解のモデルを批判し、メッセージの送り手と受け手の双方にほぼ同様の過程を仮定している。時枝のモデルは、南の同論文によればつぎのようなものである。

表現と理解について、今までに述べられている考え方の一つの典型的なものは、表現の側では意味内容を記号化し(encoding)、理解の側ではその記号の形を受け取って、それを意味内容に還元する(decoding)過程と見るというものであろう。日本でそのタイプの立場からそうした過程をくわしく考察したものとしては時枝誠記のものがある。

それに対して、南のモデルは「送り手側についても、受け手側についても、単一方向性を持つ過程を認める」モデルである。

時枝は、文章を対象として考察を進めたために、文章における推敲・改稿・別稿などの興味深い問題をとりあげながら、結局南のような動的モデルに達することはなかった。それはおそらく、時枝が話しことばを研究の対象にとりあげなかったことに起因しているように思われる。話しことばが対象として考察されなかったのは、要するに時代の制約ということであろう。もし、時枝がそ

の制約をこえて、話しことばをとりあげていたら、南のようなモデルにいきつくことは、さほど困難ではなかったように思われる。『文章研究序説』のなかには、そのための種子がところどころにかいま見られるからである。

1.2.4. 話しことばに関する問題

日本の談話研究のなかで話しことばの研究が占める重要性は、話しことばがとりあげられるようになったことが、談話研究を文章研究という狭い枠組から解放し、社会言語学的研究への道を開いたことにあるのではないだろうか。そして、時枝の『文章研究序説』は実際のところ話しことばを扱っていないから、時枝自身が談話の社会言語学的研究の創始者とはならなかったが、『文章研究序説』の問題のとらえ方自体はあきらかに社会言語学的、あるいはそれが言いすぎであるとすれば、少なくとも言語生活的とらえ方であった。

そこに分析の対象として話しことばがインプットされれば、それはそのまま社会言語学的研究になっていったであろう。

『文章研究序説』はたしかに文章を対象としているけれども、話しことばへの言及がまったくないわけではない。たとえば「言語の場面と文章」の項につきのような説明がある。

話しを元に戻して、言語における場面的対象の中心は、聞手であり、読手であり、総じて表現の相手である。今、音声言語の場合について考えると、聞手が単数の場合と、複数の場合とがあり得る。前者は、会話対談の場合で、後者は、講演座談等の場合である。それぞれに場面が異なるのであるから、それらの表現形式は、当然それぞれの場面の制約を受けて異なった形式を持つことになる。場面的対象は、ただ数に問題があるだけでなく、相手の身分、年配によつても異なる。相手が畏敬すべき人、親しみ易い人、軽蔑すべき人等によつて、場面が異なり、表現形式もその制約を受ける。敬語が発生する根拠はここにある。更に場面は、当の聞手だけに限らず、その場の全体の気分、状態を含めたものを意味するのであるから、例へば、葬式の場面、おめでたの場面、打ちとけた場面等に従つて、その

制約を受けるものである。

『文章研究序説』では、「場面の制約を受けて異なった形式を持つこと」の具体例として『源氏物語』の分析に入ってしまうから、われわれの日常生活での話しことばはそれ以上とりあげられていないが、このような考え方には話しことばの談話分析のもっともオーソドックスな方法が含まれているといっていようであろう。

時枝以降、日本の談話研究のなかで話しことばの分析に本格的に足を踏み入れたのは、南不二男・松本昭 1971 『待遇表現の実態—松江 24 時間調査資料から—』国語研報告 41 であったように思われる。もちろん、これ以前にも話しことばの研究も、話しことばの談話の研究もなかったわけではないが、話しことば談話の社会言語学的研究への道がはっきり明示されたという意味で、同書の持つ意味は大きいといえよう。

南自身に同書以前に話しことば研究の業績があるが、それと『待遇表現の実態』との違いについて、さきにふれた「言語表現における「空間的構造」と「時間的構造」の「あとがき」に興味深いエピソードが述べられている。

私が国立国語研究所で最初に参加を命じられた仕事は、話しことばの文型の研究であった。(中略)その報告書『話しことばの文型(2)』の刊行の直後、何かの用で所長室にうかがったおり、話題がたまたまその本のことにおよんだ。岩淵先生はわれわれの労をねぎらわれたあとで「ただ一つ、ぼくに不満な点がある。それは、今度の報告書が文法体系に関する面の分析だけに終わって、言語生活的な面との関係を十分取り上げていないことだ。」とおっしゃった。(中略)その後私のことばについての研究上の興味は、いつのまにか、岩淵先生のおっしゃったような、体系的な面と言語生活的な面(社会言語学的な側面)とを総合的に見ようとする方向に向かっていった。

南の研究上の興味の変化に、時枝の文章研究がどのような影響をあたえたのかくわしいことはわからない。しかし、それ以降の話しことばの談話の研究の流れが、『文章研究序説』の問題提示の延長線上にあるといえるように思われる。

1.2.5. 社会行動に関する問題

現在の談話研究のなかで、談話の社会言語学的研究の占める位置は大きい。とくに談話をコミュニケーション行動あるいは社会行動の枠内で分析する研究は、最近の談話研究の主流といっても過言ではあるまい。(このあたりの事情については van Dijk ed.1985“Handbook of Discourse Analysis vol.1 ~4” Academic Press の論文構成を参照されたい)

日本の談話研究については、この面の研究は先にふれたように、南・松本の『待遇表現の実態』が道をひらいたといえようが、『文章研究序説』にもこの面での展開を示唆する箇所がある。

言語において、場面を考へることの最も重要な意義は、言語が、主体とその相手との間に、種々な人間関係を構成する機能があるといふことである。言語は、そのやうな関係の構成を実現するに最も有力な手段として実践されるのである。動物は、相手を、恐らく、自分の仲間との間に何等かの同土関係を結ぶ相手としては見ないであらう。彼等は、本能的に相手に接近したり、反撥したりするに過ぎないのであらう。ところが、人間においては、隣人はただ感情的に接近したり、反撥したりする相手ではなく、それに向つて問ひかけたり、命令したり、援助を求めたり、懇願したりする相手として意識する。人間においては、隣人と種々様々な社会関係を結ぼうとする意欲を持つのである。即ち人間における場面は極めて複雑であつて、言語は、そのやうな種々の場面の実現を意図するのである。

このような場面論は、そのまま社会言語学である。ただ、ここでも時枝はこのような要素を文章表現を類別する一つの基準として使うことしか述べていない。

しかし、このような観点は文章に適用するのはさほど容易なことではない。むしろ、話しことばの談話の分析に応用されていたら、非常に興味深い結果が生じていただろうとおもわれる。

時枝の社会言語学的興味の種子は、林四郎などに受け継がれ、先にもとりあげた「人の死をめぐる言語行動」などの論文を生んだ。また、林、南の敬語に

関するアプローチなどにも、一つの典型的な開花が見られるように思われる。

1.2.6. おわりに

ここでは、時枝誠記『文章表現序説』を出発点として、そこでとりあげられた問題が以降の研究者によってどのように発展させられてきたかをごく限られた範囲で見てきた。

「文法学における文章論」については、永野、市川らの研究によって、ある程度行きつくところまで行ってしまった感があるように思われる。今後は、むしろ応用的側面、とくに教育への応用に重要な研究分野が残されているのではないだろうか。もちろん、これまでも、永野、市川、また林四郎の一連の文型に関する研究などは積極的に国語教育にとり入れられてきた。しかし、まだまだ実験的取扱いなどで研究すべき問題はたくさん残っているように思われる。

言語行動モデルの問題や話しことばの談話分析、コミュニケーション行動、あるいは社会行動と談話の関係の問題は、今後の研究の進展をまつ部分の多い分野である。その意味で、時枝が文法学における文章論ではなく、一般的な文章研究にまずとり組み、問題領域を示してのちの談話研究に有益な示唆を残したことは、大きな意味があったといえることができる。

1.3. 談話テキストの作成

談話テキストとここでいうのは、談話行動の結果現れた言語表現（また、それに付随して現れる言語以外のコミュニケーションの手段による表現）を、まとまった形で取り出したものである。談話の研究において、具体的な形を持ったものとして直接分析の対象となるものは、この談話テキストである。したがって、談話の研究においては、談話テキストの作成が、まずその出発点となる。ここでは、談話テキスト作成上のいろいろな問題を取り上げる。言語的表現と非言語的表現とに分けて、どのような問題があるかを眺めることにする。

1.3.1. 言語的表現とその表記

ここでは、テキストにおける言語的表現の部分のいろいろな表記のしかたと、それらが伝えることができる情報の範囲について概観する。

表記のしかたを二つの面に分けて考える。一つは、表記の要素（文字、記号など）として何を使うかということである。別のことばで言えば表記の材料の問題である。もう一つは、たとえば、音声学的に非常に精密な表記をするか、そうした形の上のくわしさよりも意味を持った要素の区別やその表示に重点をおくかなどといったことで、いわば表記の方針に関する問題である。

a. 表記の材料

日本語の談話のテキストの場合、主として考えられる表記材料はつぎの通りである。

カタカナ
ひらがな

漢字

ローマ字

数字 たとえば、アクセント、イントネーションの表示に利用可能である。また各種単位の通し番号や参加者を示すコードなど、付加的情報を表すのにも使われる。

その他の記号類 ピリオド、コンマ、マル、テン、各種の括弧、斜線（／、／／）、スペースなどは、言語的表現の単位（的部分）の境界やその種類を示すのに使われる。また、アクセント、イントネーション、強調、ポーズ（間）、その他の音声上の特徴を示すためにさまざまな記号を使うことができる。

以上の文字や記号類、とくに文字は、テキストの性格に応じてある単一の種類のものを使用することが多いかもしれないが、場合によっては複数の種類のものを混用することも可能である。漢字かなまじりの表記はその例だ。

なお、文字や記号の大きさや形を変えるとか、通常の線条的な配列のしかたに変化を与えるなどして、なんらかの情報を伝える工夫をすることもできる。たとえば、強調して発音された部分を大きな（または太い）文字で印刷するとか、高く発音されたところ、低く発音されたところを行の高さを変えて表すといった方法も考えられる。

b. 表記の方針

あるテキストについての表記の方針は、そのテキストが何を表すことを目的としているか、そのテキストを何のために使うかといったことによって左右される。言語表現についての表記の方針で一般的に考えられるものとしては、つぎのようなものをあげることができるだろう。

音声表記 これは一応発話されたものをそのまま記録するものだが、簡略なものから精密なものまで、いろいろな程度のものがありうる。

音韻表記 音声表記の記録についてある一定の観点から音韻論的分析を加えた形を記載するもの。簡略音声表記で[hondana]〈本棚〉, [homba-ko]〈本箱〉と書いてある中の[hon, hom]の[n, m]を同じ音素だと

考えれば、音韻表記では、/hondana, honbako/となる。どのような形になるかは、音韻論についての研究者の立場によっていろいろのものがあろう。

形態音韻表記 音韻表記（または音声表記その他）のテキストにさらに形態論的分析を加え、それによって分析された形態素の形を記述するための要素——形態音素によってテキストを表記するもの。言語的表現のある部分とある部分が音韻表記（または音声表記その他）の上では違った形をとっていても、形態論的分析の結果、それらが同一の形態素に該当する要素 (allomorph) と認められる場合には、形態音韻的には同じ形で表記することができる。上記の例の /honbako, hondana/ の /bako/ /dana/ の部分をそれぞれ /hako/ <箱>, /tana/ <棚> と同じ形態素に該当すると考えるとすれば、この場合の /b, h; d, t / を {H, T} で代表させて {HON-HAKO, HON-TANA} のように書くことも可能である。もちろん、分析についての立場、考え方の違いによってさまざまな形のものがありうる。

正書法またはそれに類する表記 その社会に現在行われている正書法またはそれに類する標準的な表記の方法による表記。現代の日本ならば現代かなづかいを使った表記、さらに漢字かなまじりの書き方ならば漢字については常用漢字を使ったものなど。

その他 なにかある目的のために特別に工夫した書き方によるテキストを作ること考えられる。

上にあげた各種の表記の方針のうち、音声表記、音韻表記、形態音韻表記の三者を比較すると、具体的な発話の形を直接的に伝えるという点では当然音声表記がもっとも適している。音韻表記、形態音韻表記になるにしたがって抽象的な性格が強くなるため、具体的な形からは離れることは避けられない。一方文法的あるいは語彙的な要素を一定した形で示すということについては、音韻表記さらに形態音韻表記にした方がよい。

談話行動の研究でしばしば問題となる強調や言いよどみなどの現象の記載は、音声表記のレベルで行われなければならないことが多いと思われるが、それと

文法的あるいは語彙的な要素の記載とをどうかみ合わせるかということは工夫を要する問題である。あるテキストについてはある一つの表記の方針で首尾一貫するのがふつうのやり方であろうが、このような場合には複数の表記の方針の併用を考える必要があるかもしれない。

正書法またはそれに類する表記の方法による表記、たとえば漢字かなまじり文では、文法的なまた語彙的な要素の表示、もっと一般的に言って内容(意味)に関する情報の伝達は比較的容易かもしれない。しかし、ことばの形の面についての情報を伝えるという点では困難な点もある。

言語的表現の各種の単位、とくにその境界の認め方とその示し方も、表記の方針と密接な関係を持っている。音声表記のレベル、音韻表記のレベル、形態音韻表記のレベルそれぞれの単位がある。どのような単位を示すかはそのテキストの目的による。それともう一つここで問題にしているような談話テキストにおける言語的表現の単位について考えなければならないのは、非言語的表現との関係である。非言語的表現の単位的部分と言語的表現の単位とをどうマッチさせるかということは、この種のテキスト作成上の一つの課題だ。

各種の表現の方針と前述の表現の材料とは本来区別して考えるべきものだが、当然両者の間には密接な関係がある。たとえば、日本語のテキストの音声表記をカタカナで行うことは、簡略な表記をめざすものならば可能であろうが、精密な表記をめざすとすれば、他の、より適当な記号を使った方がよい。そこで国際音声字母やそれに付随した各種の補助記号が使われることが多い。もっとも、調音の面でのきわめてくわしい記述を追求した Jespersen や Pike のいわゆる非字母記号の使用は、こうしたテキストの場合はあまりに繁雑に過ぎて現実的とはいえないだろう。音韻表記さらに形態音韻表記になれば、音声を表す面での精密さの程度はすくなくなってもよい。しかし、どんな表記材料を使うにしろ、それぞれの記号が言語的表現のどの要素を表すかということが十分定義されていなければならないことはもちろんである。一方、印刷とかコンピュータの処理のための便宜といった技術的な、いわば外的な条件によって使われる表記材料のシステムが左右されることもある。

なお、言語的表現とその表記に付随して考えられる問題として、さまざまな

付加的情報——つまり、言語的表現そのもののいわば本文の部分に付け加えられるなんらかの補助的情報——をどう表すかということがある。たとえばつぎのようなものがそれだ。

参加者関係の情報 人物そのもの、話し手、聞き手などの別、その他の

参加者の属性（性別、登場順など）

言語的表現のなんらかの単位にあたる部分につけられる番号

言語的表現の部分と部分との間の相互関係（重なりなど）

その他必要に応じていろいろなおこがらを取上げて記載することができる。

単位の切れ目の表示も付加的情報の中に数えてもよいが、すでに表記の材料や表記の方針のところでもふれた。

これらの情報は、なるべく簡単かつ体系的な形でテキストに記載する必要があるので、そのテキストにもっとも適したコード化の方法とその記載のしかたを工夫しなければならない。

1.3.2. 非言語的行動とその表記

前の「言語的表現とその表記」で言語的表現の表記のしかたについて、表記の材料と表記の方針との二側面に分けて論じたが、非言語的行動についてもこれと同様に扱うことができる。

a. 表記システムを考えるに当たって

言語的表現のテキスト作成については先行事例も多く考えやすいが、非言語的行動のそれは少ないといえる。

そこで非言語的行動の表記を考える前に、非言語的行動——とくに身振りや動作——そのもののもつ性格についてごく簡単にみておきたい。

1) 身振りや動作は「時空間」、つまり四次元的空間での位置とその移動の軌跡として表されるものである。したがってこれを二次元平面上に表すには表記上種々の工夫を要する。

2) 音声言語が主に調音器官で発せられるのに対し、非言語的行動は身体の各

部位が同時に関与して行われることが多い。もちろん、特定の身体部位の位置や動きだけに限定してすむと考えるとよい行動もみられるが。

- 3) その動きは必ずしも線条的なものばかりではなく、非線条的なものも少なくないこと。
- 4) さらに、身体各部位の動きは行為者自体の中だけで完結せずに、それが向けられる相手との関係で生ずるものも少なくはない。たとえば、相手の肩をたたくとか相手との距離が問題となるといった場合である。
- 5) 記述や分析の目的によっても異なるが、一つの動作、つまりその単位の設定は、一般的にいてかなり難しい面があること。
- 6) 非言語的行動の中には行為者が意図的に行ったもののか無意図的に行ったもののかの判定が容易でないものが少なくないこと。
- 7) また、意図的に行われた行動であってもそれが相手に伝わらないことがある反面、無意図的であったにもかかわらずそれを見た相手が何らかの反応を示すこともある。このような現象をどう考えるか。
- 8) 視線の移動などのようにかなり具体的な動きと考えられるものでも、それがきわめて微妙な場合では観察にくいこともあること。

他にもいろいろな問題があろうが、これらの性格を考慮した上で最も理想的な表記システムを考えるとすれば、それはつぎの諸条件を完全に満足するものであろう。

- 1) 非常に複雑な、細かい動きまでも正確に反映しうるものであること。
- 2) また、その表記から逆に元の動作の再現が可能なものであること。
- 3) その記述に客観性があり、はじめから終わりまで一貫して一定基準で表記しうるものであること。
- 4) 表記が簡明であり、読み手の側から見てもわかりやすいものであること。
- 5) 当初には予想もされなかったような新しい行動に遭遇した場合にも、システムに大幅な変更を加えることなく対処しうるだけの柔軟性をもっていること。

これらの要件を同時に満たすような表記システムを作りあげるのは容易ではない——むしろ不可能だといってもよい。実際問題としては、ある種の要件を

犠牲にし、表記の目的にできるだけ近づきうる範囲でのシステムを考えるしかなく、またその方が得策であることはいうまでもない。

b. 表記の方針と表記の材料

表記の方針としては、最も理想的な表記システムとして述べたような非常に精密なものから、ごく簡略なものまでのいくつかの段階が考えられる。また、動きの長さや量の定量化をめざすものから、ある種の動きがあったかどうかだけを示すにとどめるだけのものもある。

一方、表記のための材料としては、絵画的の材料、言語的材料および記号的材料の三種が考えられる。

絵画的の材料には写真や略画などがある。これを用いたものとしてある手話辞典の例をあげておこう。

この方法は例図からもわかるように、補助記号やことばによる説明を併用しなければ表現しきれないような動きも少なくないが、何ととっても視覚的に示しうる点で有力な方法だといえる。しかし、われわれの総合テキストでこれを採用するには表記の手間がかかりすぎるという点で実用的とはいえない。



39 建物

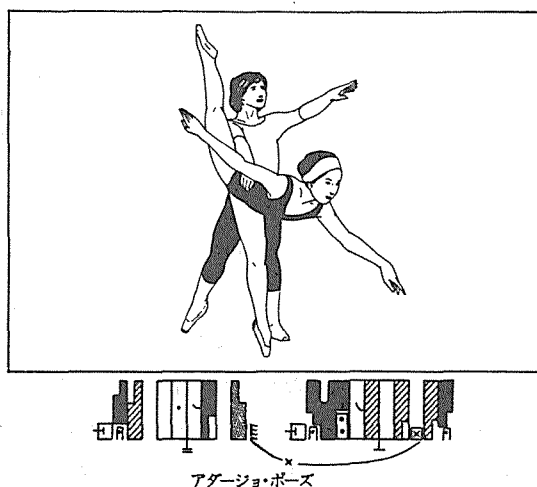
つぎに、言語材料、即ち、ことばを用いる表記が考えられる。

ことばを用いるといった場合でもいろいろな表記のレベルがありうる。つまり、身振りや動作などを文章によってかなり細かく示すことから始めて、それをもう少し抽象化・簡略化した語句で示すものや、さらに略したものまでいろいろの段階がありうる。しかし、複雑な動きを細かく正確に記述しようとした場合、どうしても説明が長くなりすぎ、記述の一貫性を保ちがたいという点が問題となる。一方、抽象化しすぎると一つ一つの行動の再現性を欠くことになる。一般に、言語材料は中程度の精密さを目指す場合には有力であるが、より精密なレベルで記述しようとするときにはあまり有効ではないようである。なお、語句程度の材料で非言語的行動を表記することについては、以前に述べた(江川 1978)のでここでは省略する。

最後に、記号的材料を用いることが考えられる。これには言語的材料でふれ

た略語を用いる段階——略語の代わりに他の記号に置き替えても同じであるから——から、以下で簡単に紹介する「ラバンの記録法 (labanotation)」のような非常に精密な記号システムまで多種多様な形態がありうる。

ラバン記録法はキネトグラフィ (kinetography) ともよばれ、バレエ譜から出発したものであるが、現在では人間行動の記録分析を必要とする諸領域で広く用いられるようになっている。これは下図のような楽譜を 90 度左回転させるような譜表をもとに、身体各部のそれぞれがとる三次元的な位置とその動きとを表現しようとする記号システムである。動作の時間的流れは譜の下から上へ向かって示される (ただし、図例は 1 時定での動きだけを表示)。



これは言語的表現の表記方針でいえば音声表記に対応するものであり、非常に細かい動きまでかなり正確に記録することができるものである。それだけに、用いる記号の数が多すぎ、この表記システムの学習は容易でない (ただし、目的によっては簡略化することは可能である)。また、一つ一つの動きを記録するのに時間がかかりすぎる点にも難がある。

記号的材料による表記にはこの他にも Birdwhistell, Benesh などをはじめと

していろいろな提案がなされている。われわれの間でも一つの試案を得ている(杉戸 1978) が省略する。

以上、いろいろな表記材料による表記形式の例をみてきたが、現時点では、単一の材料だけを用いるというよりは複数の材料を併用したり、混用したりするほうがより実用的だといえそうである。

c. 身振り・動作の単位

どのような領域においても観測記述のための単位をどのように設定すべきか、という点で苦勞する。非言語的行動の単位も同様である。常識的にいえば、コミュニケーション上からみた何らかの一まとまりの行動を一つの単位とすべきであろう。ところが、実際問題としては非言語的行動には非分節的なものも少なくなく、「一まとまりの行動」を明示しにくいものが多い。

また、ある程度それが可能である場合でも二通り以上の単位が考えられる行動もありうる。たとえば、「一つ、二つ、……五つ」と言って指を折りながら数えあげる行動を考えてみよう。この行動では指折り数えるという行動全体を一つの単位とみることができる。また、一指ずつ指折る動作の一つ一つをそれぞれ一単位とみることができる。どちらを単位とするか、または二種類(以上)の単位を採用するか——これは目的次第で異なるが、いずれにせよ何らかの基準で単位を定めた上でなければ表記は不可能である。なお、言うまでもなくこの単位は観察可能なものでなければならない。

われわれは言語的表現と非言語的行動とを総合したテキストを作成しようとしているのであるから、一定の単位の行動が行われている区間とその間の言語的表現(ゼロ表現を含めて)とを対応させる方法を考えておかねばならない。

d. 非言語的行動の主体と相手の表示

種々の非言語的行動のそれぞれについて、行動の主体とそれが向けられた相手とを明示する必要がある。行動の主体の表示には大きな問題はないが、相手の方はかなりやっかいである。

行動が向けられた相手(一人であっても複数であってもよい。また、それが

空間や物であってもよい)の識別の段階には、

- 1) 容易に特定しうる
- 2) 観察者の推論を混じえれば特定しうる
- 3) まったく不明

が考えられる。この場合、1)だけを明示するか、すべてを明示するかを決めておかねばならない。

なお、行動の向けられる相手といってもつぎのような場合もみられる。つまり、行動そのものとしては特定の相手に直接向けられたものであっても、実はその相手以外、あるいはその相手を含めた複数の人々にある意図を伝達したいと考えて行われた行動もある。たとえば、満座の中で特定の人物を叱責し、これを通じて他の者にも間接的に注意するといった場合である。このような行動をも記述するか否かについても決めておく必要があろう。

e. その他の情報

以上の他にもコミュニケーション機能上重要な役割を果たしている非言語的行動の要素は少なくない。たとえば、つぎのものである。

- | | |
|-----------|---|
| 1) 動作の速さ | 表記の方針としては、物理的に計測するような非常に精密なものから、抽象化した段階表示のものまでいくつかの段階がある。また、とくに目立った要素だけを示すことも考えられる。 |
| 2) 動作の大きさ | |
| 3) 動作の強さ | |

- 4) くり返しの回数——具体的な回数を示すか、単に「複数」とするか目的によって異なる。

- 5) ポーズ(動作の「間」)——言語表現と同様に考えられる。

- 6) 動作の開始時の情報——始まりが明確か否か

- 7) 動作末の情報——はっきりとした形で終わるか、何となく終わるか

- 8) 表情——「喜怒哀楽」程度で示すか、細かい表情の違いまでを示すか

これらの情報をどのように処理するかは非言語的行動の表記システムを考える上で重要な課題であるが、当面は必要に応じて注記欄に記入することとした。

1.3.3. その他テキストに記載すべき情報

これまで述べてきたのは、言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーションそのものの形、およびそれに付随した形で記述される各種情報——たとえば各種の単位的部分の境界の表示、その単位的部分に付けられた番号、話し手や聞き手その他参加者の表示など——についてであった。これらは、いわばテキストの「本文的部分」をなすものである。ところで、それ以外のものでもそのテキストにとって示しておくことが必要と思われる情報がある場合がある。それらもなんらかの適当な方法でテキストに記載しなければならない。

そのような情報としては、たとえばつぎのようなものが考えられる。

a. テキストの内容についての説明

方言テキストならば、標準語訳。標準語あるいはそれに近い言語のテキストでも、全体的にあるいは部分的に意味の説明が必要な場合がある。

b. 状況に関するもの

物理的状況：戸外か屋内か車内（機内、船上）か、へやの種類、話し手その他の参加者の位置、立っているか、坐っているかなど；時刻、経過時間など；そのほか明暗、色彩、音、におい、温度など。

社会的状況：第三者の有無（本文的部分にすでに記載されている参加者以外、たとえば通行人、群衆など）、参加者どうしの間の人間関係（たとえばさまざまな立場）、そのほか会議か儀式か日常の雑談か、食事をしているか、お茶を飲んでいるかなど。

心理的・生理的状況：そのときの参加者の気分、雰囲気——リラックスしているか、緊張しているか、きまづい思い、ふざけているなど。また生理的快・不快といった身体的条件。

c. 媒体に関するもの

直接的な話。

間接的な手段を使う話。電話、放送、録音、スピーカー、補聴器など物理的手段を使用するもののほかに、第三者（子どもなど）にもものを言わせるといった社会的な手段の使用も考えられる。非言語的コミュニケーションについては、テキストの本文的部分におけるそれ自身の記載において、媒体（伝

達手段)も同時に示されることになる場合が多いと想像される。

d. 補助的行動に関するもの

なんらかの補助的行動(言語的手段によるコミュニケーションを主にして見た場合だが)をしたときには、それを記録する必要がある。たとえば、話の途中で実物を見せる、模型を見せる、さわらせる、実際にになにかを扱わせる、(料理教室などで)味見をさせる、においをかがせるなど。

e. コミュニケーション全体に関するもの

その談話行動(非言語的行動も含めた)全体についての解説、本文的部分の翻訳(たとえば方言テキストの標準語訳や一定の間続く非言語的行動の時間の流れにそった説明)、問題となる部分につける注釈、さらにいろいろな補足説明など。また、言語的あるいは非言語的な本文的部分に関して付加される情報がそのほかにも考えられる。たとえば、各種の単位(的部分)の切れ目、単位(的部分)の番号、単位(的部分)の関係などの表示がそれである。しかし、これらは前にも述べたように本文的部分の一部として扱われるのがふつうであろう。

以上のようなさまざまな情報をテキストに記載するにあたって、つぎの二つの問題が考えられる。一つは、それらの情報をどのような手段でテキスト上に表現するかということ、いわば表現の材料についての問題である。もう一つは、それらの情報をなんらかの表現材料で表すとして、それをテキスト中のどのような位置に、どのような形で記載するかということである。

a. 表現の材料

まず考えられるのは、ふつうのことばによる説明である。たとえば各種の状況の説明を、「ここで停電して暗くなる」「屋外で道路工事の騒音」「電話のベル」「マイク使用」のような形ですることは可能である。また、標準語訳など本文的部分の翻訳はことばによるのが当然であろう。注釈や補足的説明もそうである。つぎに考えられるのは、ことば以外のなんらかの記号の使用である。各種の状況の中で、ある程度その現れが恒常的で、いくつかのカテゴリーに類別できるものがある場合には、それを簡単な記号で表すことが可能である。媒体についても同様で、この方が一層記号化しやすいかもしれない。

なお、ふつうのことばによる説明とことば以外の記号による説明は、使い方が正しくなければ混用することもできる。

b. 表現方法

さしあたって問題になるのは、ここで取上げたような各種情報を、テキスト中のどのような位置にどのような形で示すかということである。原則的に言えば、いろいろな状況や媒体についての記載、そのほかの補足的説明の類も、線条的な本文の部分の流れにそった形で、それぞれにもっとも適当な位置に示すのが理想的である。しかし、テキスト中のスペースなどに関する技術的な問題によってそうした理想的な形にするのが困難な場合もあると想像される。その際は、テキスト中のどこか——たとえば末尾の部分——にまとめて記載することになるが、本文の部分との対応関係を正確に示す必要があることはいうまでもない。

一般的に言って、どのような表現材料を使うか、どのような表現方法をとるかは、記載しようとする情報の性格およびそのテキスト全体の形態による。

[付記] 本稿は、『研究報告集2』（国立国語研究所報告 65, 1980）所収の「談話行動の総合テキストについて」（南不二男・江川清・米田正人・杉戸清樹執筆）の中の「3. テキスト作成上の諸問題」の部分に、加筆、削除その他の修正を加えたものである。その中で、1.3.2.「非言語的行動とその表記」は、江川が執筆し、その他の部分の執筆には、南が当たった。

II 分析編

2.1. 研究の方法

2.1.1. 資料収集の方法

この研究の目的については、冒頭の「本研究の目指すもの」で述べたので、ここでは略して、以下の各論において分析対象とした資料を中心に、その収集方法と資料の性格について記す。

われわれが用いた資料は、談話行動のうちの「座談」として構成された場面のものである。談話行動の現れる数多くのもののうちから、あえて座談場面を対象とした最も大きな理由はつぎのとおりである。

第一は、他の場面に比べて座談場面のほうが、比較的良質のビデオ資料を得やすいことにある。資料の得やすさというのは、ビデオ録画に必要な照明やスペースなどの物理的・空間的な条件の他に、参加メンバー全員が録画を承諾してくれていることにもある。

第二の理由は、座談の場面は、われわれ実験観察者の側で人工的に構成しやすい場面だということである。つまり、この種の場面は、参加メンバー相互の組合せや話題また談話の流れなどがある程度まで意図的にコントロールするという点にある。そうすることにより、いろいろな観点からの分析が可能になるのである。

2.1.2. 座談グループの構成

一つの座談グループは原則として、4名の被調査者（被観察者）を核として、

これに司会者1名を加えた合計5名のメンバーから成り立っている。

被調査者の組合せにあたっては、生育地、性、年齢、親疎関係などを考慮した。しかし、録画の都合上一定の会場に集まってもらうことや歓談しやすい条件をつくるなどの制約から、事前のコントロールがうまくいかなかったグループがいくつかみられる。なお、被調査者の生育地については、各調査地点での二世以上の者を対象と定めたが、実際には一世も若干含まれている（ただし、本書の分析対象はすべてネイティブ）。ここで被調査者をネイティブにしたのはあとの分析のために変数をできるだけ少なくしておきたいからであり、ある程度研究が進んだ段階ではこの制限をはずしたいと考えている。

また、司会者は、われわれの研究グループの（依頼を受けた）者があたり、他のメンバー相互間の自由な発言を妨げないように留意しながら談話をリードした。しかし、いくつかのグループでは司会者の属性——性、年齢など——を変えたり、司会の進め方——聞き出し役、自分もメンバーの一員として積極的に参加、あるいは標準語だけを使うか被調査者と同じ方言を使うかなど——にいろいろ変化をもたせるようにした。

このほかにも、2人が対面して行う「対話場面」での資料も得られているが、これについては省略する。

なお、1グループあたりの座談時間はおよそ1～1.5時間である。

2.1.3. 調査地域・時期

実験観察調査は、昭和52年から55年の4年間に、東京の山の手・下町、大阪の船場・河内・泉州の各地区数グループを対象として行われた。

これらの資料のうち、録音・録画状況のよいものの中からいくつかのグループをまず選出し、さらに各分析者の分析観点にうまく合致するものを「共通資料」とすることにした。そのうち、本書の執筆者が最終的に分析対象として取り上げたのはつぎの二つの座談資料であった。

そこで、この二つの資料について、座談メンバーの構成員等の情報を記しておく。

①大阪・船場グループ（米津グループ）

座談実施日：昭和51年8月9日

録画場所：人間組織研究所（大阪市東区）

座談メンバー：氏名等の情報はつぎのとおり（職業は座談当時のもの）。

表 2-1 船場グループの被調査者属性

	氏 名	生年	職業	出生地	生育地
M1	前 田 新 三		薬問屋		
M2	佐々田 永太郎		文具関係		
M3	米 津 禎 三	M28	こども服店	南区島之内	南区島之内
F1	米 津 ア ヒ		主 婦	南区博労町	

司会者：国立国語研究所所員（男）

メンバーの関係：4人のメンバーはすべて知人（特にM3とF1は夫婦）の関係にある。

分析対象部分：座談が始まってから約30分後を起点とする10分54秒間。この間の話題は、「電車開通・巡航船」「自動車」「米相場・旗振り」「電灯・三部制」「ガス灯・街灯」に大別される（資料編の3.2ではこれよりもやや小さい単位の話題が示されている）。

②東京・下町グループ

座談実施日：昭和52年8月3日

録画場所：国立国語研究所（東京都北区）

座談メンバー：つぎのとおり

表 2-2 東京・下町グループの被調査者属性

	氏 名	生年	職業	出生地	生育地
M1	内 藤 辰五郎	M35	ボーリング業	墨田区本所	墨田区
M2	松 村 亀 雄	M43	とび職	墨田区本所	墨田区
F1	小 島 八 重	M40	主婦	台東区元浅草	台東区
F2	原 田 貞 子	M44	つり具店	台東区元浅草	台東区

司会者：国立国語研究所員（男）

メンバーの関係：M1とM2とは幼なじみ、またF1とF2も幼なじみであるが、両ペアは座談会場で初めて出会った関係にある。ちなみに、F2は、後日、他のメンバーと一緒に再登場してもらった。

分析対象部分：談話開始から約5分を経た場面からの10分2秒間。この間の話題は、「町名」「町名ゆかりの名文句」「東本願寺周辺」「居住地の川」「御西様への道」の5場面であった。

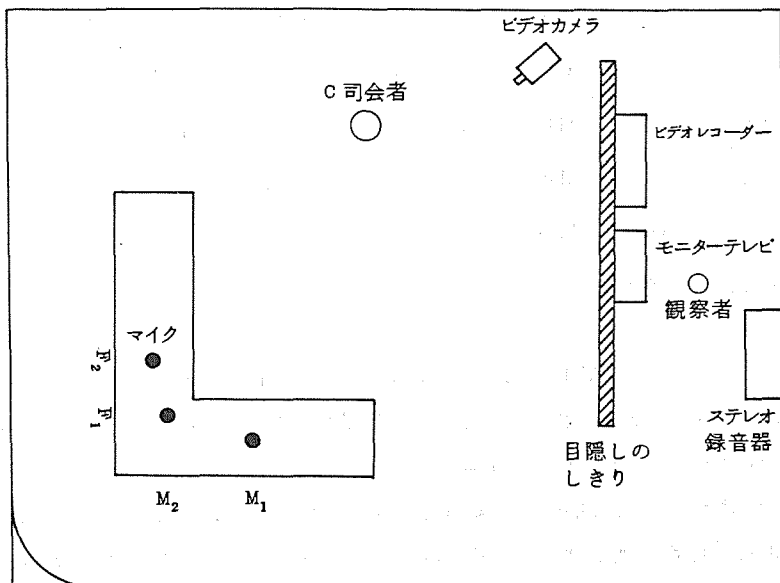
2.1.4. 録画の方法

録画資料の作成にあたっては、国立国語研究所あるいは大阪外国語大学所蔵のビデオテープレコーダーを用いた。また、ビデオの音声をカバーするために、これとは別に2台のマイクロホンを用いてステレオ録音を行った——音声の文字化は主としてこのテープから行った。

録画・録音のための機器や人員の配置は、使用会場の構造や座談メンバーの人数の関係でやや異なるが、基本的には次ページの図のようにになっている。

ビデオカメラの操作は、座談の始めの自己紹介時のみ発話者ひとりひとりをアップで追ったが、あとは座談資料の核となる4名の被調査者全員が同一画面に収録されるようにロングで撮影した。ロング撮影を行ったのは、われわれの目的からすると話者の動きと同じくらい（以上）に聞き手の反応をも記録して

録画・録音のための配置図（東京下町地区の場合）



おく必要があると考えたからである。

2.1.5. 資料の制約

このようにして得られた資料には、これが座談場面であるという制約の他にもいくつかの制約がある。

一つは、写されているという緊張感を被調査者に与えていることである。ただし、座談が進むにつれてカメラは次第に意識されなくなったようである。そこで、われわれは、被調査者の言動が自然になったと目される時点以降の部分进行分析の対象とした。

第二は、当時のビデオ機器の解像度にかかわることであるが、表情とか視線の方向といった微妙な面の分析には耐ええないものであることである——これは、座談メンバーの数だけカメラを用いることで、ある程度までは解決すると

いえる。

この二点はわれわれの資料のみならずビデオ観察全般がもつ短所であるが、この資料独自の制約も多い。たとえば、撮影の都合上、被調査者を椅子に腰かけさせたため、彼らの自由な動きの大部分を封じてしまったことやからだの上半身の動きしか観察しえなくなっている。また、1画面に全員を収めようとしたため、椅子の配置が不自然となった。このため、話しかける相手に偏りが生ずるなど、被観察者間のコミュニケーションの方向に何らかの影響を与えている恐れが強い。

2.1.6. 資料の整理

上記のようにして得られた資料をつぎのような段階を経て整理した。

①第一次文字化：原則としてカナ表記・文節分かち書き。ポーズやイントネーションなどの情報は付加されていない。

②第二次文字化：同上文字化資料のネイティヴチェックを行うとともに、イントネーションについての情報を付加した。

③身振り・動作の記録：②で得られたテキストに身振りや動作あるいは録音・録画状況などの情報を付け加えた形での「総合テキスト」を作成した。

なお、③の総合テキストの例は巻末の「資料編」の3.4.、また②の例（ただし、イントネーション情報を除く）は3.2.、3.3.にそれぞれ示しておいた。

2.2. 発話のうけつき

2.2.1. 分析の立場

前節で示したように、今回の研究過程で得られた談話資料は、それぞれ、1時間から1時間半程度の時間をかけて、参加者が自由な話題について語り合ったところを収録したものである。談話の内容・話題の点でも、参加者の人間関係や参加状況など外見の点でも、複雑な様相をそなえている。そうした談話がどのような構造をもっているのかを知るためにはいろいろな道が考えられるであろうが、談話の構造の全体像をひとつかみにできるようなまとめた方法はまだわれわれの手元にはないというべきであるのが研究の現状と思われる。

こうした点をふまえて、当面、どのような態度で問題に近づいていくのがよいかを考えると、ひといきに全体像にせまることはむりとしても、たとえば1.1.に掲げられたような、談話ないし談話行動をなりたたせるいろいろな要件(言語表現そのもの・参加者・話題・媒体・状況・ネットワークなど)に注目して、それぞれの観点から分析的に談話をとらえる作業をつみかさね、そののちに、たがいの知見をつきあわせて総合していく、という手順は十分に実行可能であるように思われる。もちろん、そうした手順を踏むことは、その前提として、談話というものごとが、いくつもの要件からなりたっているという見方に立つことである。この見方自体、検討されなければならない一種の仮説であるはずだが、同種の仮説的な立場は、たとえば言語行動研究の分野で有効な分析方法の基盤となっていると考えられる(南 1979, 林 1979, ネウストッブニー 1979, 杉戸 1983 など)ことをよりどころにして、ここでは、この立場を当面の出発点にして分析的な手順をたどりはじめることにしたい。

2.2.2. 本節の目標と分析の観点

本節では以上のような立場に立って談話の構造を記述的に把握することを目指にするわけであるが、その際、談話の構造とひとくちにいうなかでも問題点を限定して、参加者の談話への参加状況を把握することに目標をおくこととしたい。具体的には、談話の進行にともなって現れる、(1)発話者の交替と(2)発話内容のうつりかわりを記述的にみていき、それを鍵にして目標に接近したいと考える。

こうした目標を掲げた分析は、より一般的に見なおせば、言語行動における参加者同士の相互交渉(interaction)を把握する作業のひとつであり、それは、談話行動を社会言語学的にとらえていくための基礎作業のひとつとしての位置づけを与えることができると考える。[注1]

上に示したふたつの観点は、1.1.で南が列挙した談話行動の10の要素のうち、主として、「2. 参加者」「3. 話題」「8. 文脈」「9. ネットワーク」に関係するものごとを扱おうとする観点であるといえる。

このうち、発話者の交替という観点は、もっとも外見のな姿としては、文字どおり、どの参加者のあとにどの参加者が発話したかをたどるもので、「参加者」「ネットワーク」という要素に関係の深い観点である。ここでは、この外見のな姿とともに、それぞれの発話がどんな種類の発話であるかも考慮に入れて見ていこうと思う。つまり、それぞれの参加者がどんな種類の発話でどんな順番で談話に参加しているかをたどることによって、参加者の談話への参加状況を把握しようとするのである。

どんな種類の発話であるかを見ようとするとき、具体的には、発話内容つまり「話題」に注目することになる。また、そのうつりかわりは「文脈」を構成する重要な事象である。つまり、もうひとつの観点である発話内容のうつりかわりは、「話題」とか「文脈」という要素に注目するのが主体となるが、そうした要素を具体的に見ていくためには、「言語表現そのもの」、とくに話題に直接関与すると目される言語形式の内容的な側面、さらには「うつりかわり」というからには、さまざまなかたちで連続して現れる複数個の言語形式のあいだの

内容的な関係をあつかうが必要になる。ここでは、こうした事象の記述に参加者への観点を組み合わせながら、目標とする分析を試みようとするのである。

以上に示したところからわかるように、談話構造の把握という全体的な課題にとって、参加者の談話への参加状況を把握しようという当面の目標は、あつかう要素の種類からして、ほかにもいろいろ設定しうる目標にならぶひとつであるにすぎないし、そこで試みる分析の観点も、同じ意味で限られたものでしかない。談話構造の諸側面のうち、ほんの一側面をあつかうにすぎないことを、あらかじめ留意しておきたい。

2.2.3. あつかう談話資料と用いる略称

この節では、手元の談話資料のうち、大阪・船場・^{ジョネッ}米津グループと東京・下町・内藤グループの資料を中心にあつかう。それぞれ、1時間以上にわたる談話のなかから、今回の分析作業の共通利用部分として選定した10分間ないし11分間弱の談話部分である。参加者のプロフィールなど、資料についての説明は2.1.3.を参照されたい。

以下では、簡単のために、米津グループの談話を「米津談話」、内藤グループの談話を「内藤談話」と呼ぶこととする。

また、米津談話は男性3人(M1, M2, M3)と女性1人(F1)、および司会者(C)の5人の参加者によって進められているが、それぞれを、YM1, YM2, YM3, YF1, YC(Yは米津の頭文字)の略号で示す。同様に内藤談話の男性2人をNM1, NM2, 女性2人をNF1, NF2, 司会者をNC(Nは内藤の頭文字)の略号で示す。

2.2.4. 談話資料を見るための単位

談話の進行とともに、どの参加者がどの参加者のつぎに発話したのかを追うために、図1(内藤談話)、図2(米津談話)を作成した。

図1、図2を見るうえでは、談話資料を分析する際に問題になる談話の「単位」

図-1 内藤談話の発話交替

太字：実質的な発話
細字：あいづち的な発話

図1-1 「町名」(発話数=66)

NM1		4	6	9		14	16	17		23	25		34				
NM2	2				12			18		22							
NF1	1	3	5	8	11				20	24		32					
NF2				7	10	13	15	19	21		26	27	28	29	30	31	33
NC																	

NM1	35	38	39	41	45	47	52	56	57	59	62	63	
NM2				40			50	54	55		61	65	
NF1		37		43	44	46	48	51				66	
NF2	36			42			49	53	58	60	64		
NC													

参加者	NM1	NM2	NF1	NF2	NC	計
発話回数	21	10	15	20	0	66
あいづち内数	12	8	10	9	0	39

図1-2 「町名ゆかりの名文句」(電話番号=53)

NM1	2	5		10	12	14	16	19	22	25	30
NM2											
NF1	1	7		11		15	18		20	23	31
NF2		4	6	8	9	13		21		24	26 27 28
NC							17				29
NM1	33		40		43	46		51			
NM2							44				
NF1	34	36	39				48 49	52 53			
NF2		35	37 38	41 42	45	47		50			
NC											
参加者		NM1		NM2		NF1		NF2		N C	計
発話回数		15		5		17		15		1	53
あいづち内数		6		5		14		7		0	32

図1-4 「居住地の川」(発話数=46)

NM1	4	6	11	17	20	21	24	29	32
NM2	2		10	15	18				
NF1	3	8	12	14		22	25	26	27
NF2	1	5	7	9	13	16	19	23	28
NC								30	33

NM1	35	37	41	42	43	45			
NM2		38							
NF1	34	39	44						
NF2	36	40				46			
NC									

参加者	NM1	NM2	NF1	NF2	NC	計
発話回数	15	5	12	14	0	46
あいづち内数	8	5	9	5	0	27

図1-5 「御西様への道」(発話数=60)

NM1		2	3	5	7	9	12	15	17		24	27	29	30	
NM2									19	20	23		28		33
NF1			4			10	13		18		25				
NF2	1			6	8	11	14			22	26		31		
NC							16		21					32	

NM1	35	37	39		43		50		53	55	57				
NM2						48		52							
NF1			38			46			54		60				
NF2	34			41	45	47	51		56	59					
NC		36	40	42	44		49			58					

参加者		NM1	NM2	NF1	NF2	NC	計
発話回数		20	7	9	15	9	60
あいづち内数		13	4	4	3	8	32

図2 米津談話の発話交替

図2-1 「電車開通・巡航船」(発話数=85)

		太字：実質的な発話 細字：あいづち的な発話															
		9	11	13	15												
YM1															24	27	
YM2	1	3	6	8	10	12	14	17	19	20	22	25	28	30	32		
YM3																	
YF1	2	4	5	7				16	18	21	23	26	29	31	33		
YC																	
YM1					43	45	47	49	51	53		57	62	65			
YM2	34	36	38	41	44	46	48	50	52	55	58	60	63	66			
YM3				40	42												
YF1	35	37	39							54	56	59	61	64			
YC																	
YM1	67	70	72	75													
YM2	68	71	73	77	79	81	83	85									
YM3						82											
YF1	69			74	76	78	80	84									
YC																	
参加者			YM1	YM2	YM3												計
発話回数		19	37	3	0					26		0					85
あいづち内数		13	6	0	0					24		0					43

図2-2 「自動車」(発話数=81)

[illegible]

図2-3 「ことばのこと」(発話数=24)

	2	4	6	8	9	10	11	12	13	14	16	18	19	20	21	22	24
YM1																	
YM2																	
YM3																	
YF1																	
YC	1	3	5	7	9	11	11	12	13	15	17	19	21	23			
参加者			YM1			YM2				YM3			YF1		YC		計
発話回数			12			0				0			0		12		24
あいづち内数			3			0				0			0		8		11

図2-5 「電灯・三部制」(発話数=42)

[illegible]

図2-6 「ガス灯・街灯」(発話数=51)

[illegible]

についての、本節なりの立場を説明する必要がある。2種類の単位(ないし、談話内部の小部分としてのまとまり)が問題になる。

ひとつは、図1を1-1から1-5に、図2を2-1から2-6に小分割して示すことに関係する。各図の標題に示したように、ふたつの談話資料は、

内藤談話	1-1 町名	66 発話
	1-2 町名ゆかりの名文句	53
	1-3 東本願寺	109
	1-4 居住地の川	46
	1-5 御酉様への道	60
米津談話	2-1 電車開通・巡航船	85
	2-2 自動車	81
	2-3 ことばのこと	24
	2-4 米相場・旗振り	54
	2-5 電灯・三部制	42
	2-6 ガス灯・街灯	51

という、内容的なまとまりの連続からなりたっていると考えることが可能である。ここでいう内容的なまとまりとは、主として、話題とされていることからの面から見たまとまりであるが、1.1.3.(2)で南の掲げる談話の単位を認定する手がかりを参照して見なおせば、話題以外にも、だれが主として話題を持続させているか、だれが主たる聞き役か、などの、参加者とかネットワークという要素をも手がかりにしているといえる。単位としての段階や大きさからすれば、国語研 1971、南 1972 が「談話」という術語を与えたまとまりに近い性格をもつものである(1.1.3.(4)を参照)。今回の研究のために談話資料を準備する過程で、複数の研究者が一応一致して認定したところが、上記の5~6個のまとまりである。本節で、当面は外見的な発話者の交替を追う場合、こうした話題のまとまりに分けてから出発する必要はないはずだし、また、上に述べたようにまとまりの認定に参加者の条件が考慮に入っていることを思えば、研究の

手順からして一種の循環論におちいるのだが、ここでは、論旨を簡単にするためにこのような談話の小部分ごとに発話者の交替を見ていくこととする。

もうひとつの「単位」は、「発話」で、図1と図2で1, 2, 3, …の番号で示されているものである。これは、ひとりの参加者のひとまとまりの音声言語連続（ただし、笑い声や短いあいづちも含む）で、他の参加者の音声言語連続（同上）とかポーズ（空白時間）によって区切られるごとに1単位と数えようとする単位である。

例 NF 1 44 ハー、ハー。

NM 1 45 ヒガシガツクンデスヨ。

NF 1 46 アーソーデスカ。

NM 1 47 ホラ、タイヨーノアタルホーダカラ。

NF 1 48 ハー、ハハハ。

それぞれの発話者略号ごとの1行分を、1発話と数える。

（内藤発話の「町名」の部分から）

この発話という単位は、文法でいう文よりも短い、文節や句や語、ないしそれらの言いさしの部分だけ、ということもあれば、ふたつ以上の文の連続であることもあるという、長短まちまちの姿をとる。単位というものに均質性が不可欠であるとする立場からすれば、単位と呼びにくいまとまりであることはたしかだが、談話における参加者同士のやりとりを追うためには、そのやりとりの実際上の区切りとしてかなり明快な手がかりになると思われる。以下、この意味での発話を手がかりにして話を進めることとする。その際、「話をする」というふつうの意味での発話という用語と、いま説明した単位としての発話という用語が同音同字であるのだが、混乱しそうな場合だけ断わることとし、どちらかに別の呼び名を与えることはしない。なお、次節2.3で杉藤が用いる「発話節」という単位は、本節で発話と呼ぶ単位と重なる場合があるが、発話節が、その発話者自身の音声ポーズ（この場合、息つぎ的な短いポーズも含む）を境界としても区切られることなど、性格に異なる点がある。

2.2.5. 発話者の交替

まず、発話の内容は考慮に入れずに、ただ外見的な発話者の交替をたどってみよう。図1、図2に記入されている数字(発話番号と呼ぶ)を、それが太字であるか細字であるかを考慮に入れずにたどることによって、発話の内容や長さを問題にしないで発話者の交替を把握することができる。

司会者をふくむ5人の参加者が、それぞれだれの発話に続いて発話しているかを見ていくと、内藤談話と米津談話とのあいだで、またそれぞれの談話の小部分同士のあいだで、発話の連続する様子に違いのあることが指摘できそうである。ひとことでいえば、発話番号の散らばり具合、つながり具合がさまざまなのである。

たとえば、発話番号がもっとも規則的につながっているのは、一見して明らかなおと、米津談話の「ことばのこと」(図2-3)や「電灯・三部制」(図2-5)であろう。前者ではYM1とYCのふたりが、後者ではYM2とYCのふたりが、それぞれ一回ずつ発話を交替しながら談話を進めていっており、ほかの参加者はまったく発話をしていないといつてよい。

これに対して、たとえば内藤談話の「町名ゆかりの名文句」(図1-2)では、NCを除いた4人が(うち、NM2が他に比べて発話回数が少なめであるが)かなり複雑な順序で、いわば入り乱れて、談話を進めている。

つまり、これらを比べてみると、5人の参加者のうち、特定のふたりの間だけで発話のやりとりの続くタイプの談話と、参加者の大部分がいくらかのかたよりは示しながらも発話を交替しながら続けるタイプの談話と、2種類の類型を区別できるのである。

この様子は図1や図2を見ていけば視覚的に把握できるのであるが、これを単純な数値でとらえる工夫をしてみた。上に示した例のうち、ふたりの参加者の発話が規則的に交互に現れる場合を見ると、発話番号は、

1 — 3 — 5 — 7 — 9 —

2 — 4 — 6 — 8 — 10 —

というふたつの数字列になり、しかもそれぞれが一定の参加者の発話番号として継続するということが、あたりまえながら、わかる。そこで、こうした状態

の最小単位として、

1-3, 2-4, 3-5, 4-6, 5-7,

という発話番号の連続（つまりひとつおきの発話のペア）を順番に見ていき、そのペアの発話の両方ともが同一の話者によるものかどうかをチェックしてみる。たとえば、米津談話の「ことばのこと」では、

1-3, 3-5, 5-7, 7-9, . . . の列はすべて YC,

2-4, 4-6, 6-8, 8-10, . . . の列はすべて YM1

であって、チェックされる発話連続の最小単位のすべてが同一参加者によるペアであることがわかる。これに対して、たとえば、内藤談話の「町内」（図 1-1）の冒頭では、

1-3, 3-5 : いずれも NF1 の発話

4-6, 14-16 : いずれも NM1 の発話

表 1 談話の小部分ごとの「発話連続指数」

談話	談話の小部分	一つおきの* 発話ペアの数	同一発話者による 発話ペアの数	発話連続 指数
内藤談話	町名	64	18	0.281
	町名ゆかりの名文句	51	11	0.216
	東本願寺周辺	107	39	0.364
	居住地の川	44	9	0.205
	御西様への道	58	13	0.224
米津談話	電車開通・巡航船	83	49	0.590
	自動車	79	57	0.722
	ことばのこと	22	22	1.000
	米相場・旗振り	52	37	0.712
	電灯・三部制	40	38	0.950
	ガス灯・街灯	49	20	0.408

*一つおきのペアの数は、談話の末尾の2発話がペアを構成しないので算入されず、したがって各談話の発話数（図1，図2を参照）より2ずつ少ない。

などをのぞけば、2-4, 5-7, 7-9, 9-11などは異なる参加者によって発せられたペアである。

このようにチェックして得られる、ひとつおきの発話ペアで同一参加者によるペア数の、その談話のすべての発話ペア数に占める比率を計算したものが、表1である。この数値を、かりに発話連続指数と呼ぶ。

この指数は、ひとりの発話を別のひとりの発話が受け、すぐにもとの人の発話に戻るというサイクルをくりかえす談話で値が高くなり（最大 1）、第3、第4の人が介入すると低くなる。ひとりがずっと語り続ける場合をのぞいて、複数の参加者による談話のなかでもっとも単純なやりとりの型はふたりが一回ごとに交替する型のやりとりだと考え、それを典型モデルに設定した。[注2]

表1を見ると、この節のはじめに述べたような、内藤談話と米津談話の進みかたの差異や、談話の小部分同士のあいだの差異が一応数量的に把握できる。

談話全体として、米津談話のほうが発話連続指数が高く、まえに見たとおり「ことばのこと」では1.000とすべての発話ペアがふたりの参加者の規則的な交替によって発せられているし、米津談話で指数のもっとも低い「ガス灯・街灯」(0.408)でも、内藤談話で指数のもっとも高い「東本願寺周辺」(0.364)より高い数値を示した。つまり、米津談話のほうが、ある限られた参加者が続けて発話するケースの多いタイプの談話であり、内藤談話のほうは、多くの参加者がつぎつぎに交替しながら進むタイプの談話であるといえることができるわけである。また、この発話連続指数の変化の幅を見ていくと、

内藤談話 最大 0.364 最小 0.216

米津談話 最大 1.000 最小 0.408

となり、内藤談話のほうがその幅が小さく、上に述べたような多くの参加者が交替しながら進むという談話の特徴が、あつかった範囲の内藤談話の全体にわたってはほぼ同じような調子で保たれている。これに対し、他方の米津談話ではたとえば「ことばのこと」(1.000)のようにふたりの参加者だけのやりとりに終始するものから、「ガス灯・街灯」(0.408)のように何人かの参加者の入り乱れが見られるものまで、談話の小部分による差異が比較的大きく、同じ米津談話

の中でも発話者の交替状況から見た談話の進展パターンは変化していることがわかるのである。

談話によって、また話題から区分した談話の小部分によって発話の交替にこのような差異がでることについては、もちろんいろいろな理由が考えられる。そのうちでも、談話のそのときの話題にどれほどの親しみを感ずるか、また提供すべき知識や情報をどれほど持っているか、その談話場面にどれほど積極的にそれを提示しようとしているかについて、それぞれの参加者のあいだに程度の差のあることは、ひとつの重要な条件になると思われる。

たとえば、米津談話の「ことばのこと」では、司会者 YC が「アノー、チョット、コレハコトバノコトナンデスケド・・・」と話題を提供する質問を発すると、それに YM1 が積極的に反応して一貫して説明を続けた。ことばの話題についてはほかのだれよりも話すべきことを多く持ち、それを発表することにもっとも積極的だったのがこの人だからなのであろう。「電灯・三部制」でも YM2 にこれと同様の事情を想定できよう。これらはその段階での話題にもっとも親しい参加者が、他の参加者の発話を待たずにつぎつぎに発話を続け、それを受けるのも、はじめに質問を発した人（この場合は司会者）がひとりで続けているのである。これに対して、発話の機会が参加者のあいだを動くタイプの談話では、その話題についてそれぞれの参加者が提供すべきことがらを多かれ少なかれ持っていて、他の発話に続いてどんどんそれを発表するという姿や、ひとりの発話に何人かの参加者が聞き入っていて何らかの反応を返している姿を想定することができる。

このほかにも、たがいの人間関係（永いつきあいのある人か、その場が初対面である人か、話しやすそうな人にみえたか、話しにくそうか、など）をはじめとして理由が考えられそうだが、ここでもっぱら外見적인観点だけから追った発話の交替状況からだけでは、推測の域を出ないことである。この点については、のちに発話の内容的な側面をあつかうときにまたふれる。

なお、図 1、図 2 のそれぞれの図の下には、参加者ごとの発話回数を示してある。上に述べてきたような動的な発話の交替状況の結果としての静的な数字であるが、もちろんこれだけを見ても、たとえば NM2 や YM3 がほかに比べて

発話の機会の少ない参加者であったことや、NCはYCに比べて非常に発話の少ない司会者であったこと（このことは、座談を企画する段階で、積極的に談話に介入するタイプの司会を依頼した米津談話と、できるだけ介入しない司会をこころがけるよう指示のあった内藤談話との差異であるが）は把握することができる。この数字については、つぎに発話の種類を考慮に入れるときに、もうすこし詳しくあつかう。

2.2.6. 発話の種類——あいづち的な発話の現れかた

つぎに、もうすこし発話の内容的な側面に目を向けて考えてみる。

まえに掲げた図1、図2では、ひとつひとつ発話番号を細字と太字の2種類で区別して示しておいた。前節ではこの区別に触れない分析を試みたのだが、こんどはこれに注目しようとするのである。

この細字と太字は、それぞれの発話がつぎのような発話の種類のいずれに属するかを示すものである。

細字：たとえば、つぎのような発話。

「ハー」「アー」「ウン」「アソーデスカ」「サヨーデゴザイマス」「アソーデスネー」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ!」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。ここではまとめて「あいづち的な発話」と呼ぶことにする。

太字：あいづち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話。

ここでは仮に「実質的な発話」と呼ぶ。

例 内藤談話「町名」の冒頭部分

- 1 NF 1 オタクサマハ 吾妻橋ムコーノ 町名ニイタシマス
ト ナントユー
- 2 NM 2 本所4丁目デス
- 3 NF 1 アー サヨーデゴザイマスカ
- 4 NM 1 モ モト 松倉町ッテイッテキタンデスヨ
- 5 NF 1 アー サヨーデゴザイマスカ
- 6 NM 1 エエー

この2種類のうち、ここでは、あいづち的な発話に注目して、それぞれの参加者が談話の小部分ごとにどんな頻度でこのあいづち的な発話を発しているかをたどることにする。

あいづち的な発話について筆者と沢木は、以前に日常的な買物での客と店員の会話を分析したときにも同様に注目し、買物の進行に積極的なイニシアチブをもたないタイプの客の発話にあいづち的な発話の頻度が高いことなどから、この種の発話が談話の内容的、実質的な進展に積極的にははたらかない性格を持つのではないかと考えたことがある(杉戸・沢木1977,同1979)。この考えは、買物という目的のはっきりした談話の場合だけでなく、ここであつかう自由談話のような場合にもあてはまると考える。このことを前提として、あいづち的な発話の多少をたどることによって、それぞれの参加者がそのつど談話にどんな態度で(能動的にか、受動的にか、具体的には、自分から話題を提供し連続させるような発話をするか、ほかの参加者の出す話題についていっているだけか)参加しているのかを知る手がかりのひとつを得ようとするわけである。

図1、図2の下欄に、それぞれの参加者の発話回数と、そのうちのあいづち的な発話の回数を示したが、これを一覧するために、表2を示す。

表2には、あいづち的な発話の回数を発話回数で割って得られる比率を列挙してある。この数値が高いほど、あいづち的な発話を多く発しており、逆に、低いほど、実質的な発話を多くして談話を積極的に進めている場合であることが示される。ただし、参加者と談話部分によっては、たとえばNCやNM2、YM3などは、発話回数(比率の分母。ひとつひとつの場合の回数は図1、図2を参照のこと)がわずかしかなり数値が不安定であるので注意を要する。

表2 あいづち的な発話の比率（参加者別・談話小部分別）

談話の小部分	参 加 者					全体
	NM1	NM2	NF1	NF2	NC	
町 名	0.571	0.800	0.677	0.450	—	0.590
町名ゆかりの名文句	0.400	1.000	0.824	0.467	0.000	0.604
東本願寺周辺	0.867	1.000	0.500	0.116	—	0.514
居住地の川	0.533	1.000	0.750	0.357	—	0.587
御酉様への道	0.650	0.571	0.444	0.200	0.889	0.533
全 体 (発話回数)	0.644 (101)	0.878 (41)	0.640 (75)	0.271 (107)	0.800 (10)	0.557 (334)

(—は発話回数が0の場合を示す。)

表2-2 米津談話

談話の小部分	参 加 者					全体
	YM1	YM2	YM3	YF1	YC	
電車開通・巡航船	0.684	0.162	0.000	0.923	—	0.505
自動車	0.875	0.056	1.000	0.892	—	0.518
ことばのこと	0.250	—	—	—	0.667	0.458
米相場・旗振り	0.091	0.000	0.000	—	0.792	0.370
電灯・三部制	—	0.083	0.000	—	0.950	0.476
ガス灯・街灯	0.500	0.105	1.000	0.500	0.846	0.451
全 体 (発話回数)	0.529 (68)	0.083 (131)	0.286 (7)	0.855 (62)	0.827 (69)	0.472 (337)

(—は発話回数が0の場合を示す。)

まず、表の下欄でそれぞれの参加者ごとの談話を通じた比率を見ると、もっとも顕著なのは、内藤談話のNF2(0.271)と米津談話のYM2(0.083)の存在であろう。このふたりはそれぞれ発話回数も100回を越えている(YM2は131回

で全参加者中の最多発話者である) から、比率は安定していると見てよい。このふたりは、それぞれ、ほとんどの談話の小部分で、ほかのどの参加者よりも小さい比率を示していて、あいづち的な発話の少ない、逆にいえば、実質的な発話の比率の高いタイプの人だといえる。とくに YM2 はこの性格がきわまっている。ほかの参加者が 6 割から 8 割以上の比率であいづち的な発話をしている中で、全体を通じれば 1 割以下、多いときでも 1 割 6 分どまりなのである。図 2-2「自動車」(比率=0.056) や図 2-5「電灯・三部制」(0.083) を見ると、YM2 がほとんどく独演会> ふうに実質的な発話をくりかえしていることがわかる。

これに対して、NM2, YF1, YC は、40~60 回以上の発話回数を持ちながらも比率はそれぞれ 0.878, 0.855, 0.827 で、談話全体を通じてあいづち的な発話を多く発するタイプの参加者である。談話の小部分によっては発話の 9 割以上があいづち的な発話であったときも見られる。まえに、YC は座談を企画する段階で談話に積極的に介入するように求めた司会者であったことを述べたが、ときに話題を提供する目的で質問のかたちの実質的な発話を出す以外は、あいづち的な発話を多くくりだす参加状況であったといえる。YF1 と NM2 はそれぞれ最後の談話部分で比率が 5 割くらいまで下がり、発話回数こそひとけたであるが、話題によっては実質的な発話を出すことはあった。ただ、その多くはまえの人の発話への補足的な内容の発話であり、収録した資料を見直すときの印象は、ふたりともおだやかな聞き役というタイプであるといえる。

これらの 5 人のほかは、発話回数の少ない NC と YM3 をのぞいて、NM1, NF1, YM1 の 3 人とも談話を通じての比率は 5~6 割強で、ふたつのタイプの発話をだいたい同じくらい発している。

参加者ごとにみれば以上のような指摘ができるのであるが、表 2 をこんどは談話の小部分ごとに(つまり横の数値の並びを)見てみよう。

まず、表の右端で談話小部分ごとの全体の比率を見ると、6 割から 4 割 5 分程度の値のとり場合がほとんどである(ひとつだけ 0.370 がある)。比率が 5 割であるという場合を、前節で発話連続指数を考えたときの典型的なやりとりにあてはめれば、あいづち的な発話と実質的な発話がちょうど交互に現れる場合を

想定できる。これを考慮すれば、表2の談話の小部分ごとの数値がだいたい5割前後にあるということは、一回ごとの交替という典型的な姿ではないにしても、2種類の発話が全体としては半々に散らばって現れていることを示しているといえよう。ひとつの興味深いことがらである。

さらに、こうした右欄の数値を少し詳しく見るとつぎのようなことも指摘できる。まず、内藤談話と米津談話とを全体として比べて見ると、わずかながらも内藤談話のほうの数値が高く、あいづち的な発話の多い談話であったことが知られる。まえに見たとおり、米津談話にはあいづちを多くうつ司会者(YC)がいて、実数としては57回のあいづち的な発話をこの人が占めている。これに対し内藤談話のほうは、比率こそ0.800と高いものの実数としては8回だけしかあいづち的な発話をしていない司会者である。このことを考慮すると、司会者以外の参加者があいづち的な発話をする度合いの差は一層ひろがり、内藤談話(0.549となる)が米津談話(0.381)をかなり上回るのである。4人の参加者同士の談話の進め方に関する、ひとつの重要な特徴であると考ええる。あいづち的な発話は、まえに述べたように談話の内容的・実質的な進展には積極的なはたらきは持たないとしても、少なくとも、相手の発話にきちんと耳を傾けているということの明示的な表現のひとつであることは動かないであろう。内藤談話にそうした性格の発話が米津談話より多く見られることは興味深い。筆者はこのことを、内藤グループが、幼な友達の男性ふたり(NM1とNM2)と、彼らとは座談の日が初対面であったところの、こちらも幼な友達の女性ふたり(NF1とNF2)とで構成されたグループであり、男性ふたりと女性ふたりの間は少なくとも談話開始当初は<疎>の関係であったことと関連させて考えたいと思う。一方の米津グループは4人とも昔からの知己であり、YM3とYF1は夫婦でもあるような親和的な人間関係が談話開始以前から存在していたグループである。前者のような場合、たがいに発話をきちんと聞いているということを表示する行動が、少なくとも後者のようなグループよりは、必要とされもし、現れやすいといえるのではないかと考える。もちろん、ひとつひとつのあいづち的な発話がだれからだれに向けられたかを丹念に追う作業が、実際には困難ではあるが、必要な問題だし、これ以外の解釈も可能であろう(たとえば、個

性としてあいづち的な発話をよくする人とそうでない人、などは十分ありうることだ)けれど、ここではひとつの仮説として上のような解釈をつけ加えておきたい。

表2の右欄の数値から指摘できるもうひとつの点は、米津談話の方が談話の小部分ごとの値の上下がやや大きいという特徴である。

つまり、米津談話のほうが発話の小部分ごとに見て、あいづち的な発話の多少に凸凹が見られるということである。まえに指摘したのと同じ理由で、司会者のあいづちを除けば、この傾向は一層顕著になる。このことの理由をどのように考えればよいかは、いまのところ筆者にはわからないが、すくなくとも、このあとにふれる、それぞれの参加者が、ひとつひとつの談話部分でどんな比率であいづち的な発話をしているかということと深い関係があるはずである。内藤談話で変動が少なく、米津談話で大きいという、前節で発話連続指数についてもそういう特徴を指摘しておいた。これらを関連づけて解釈できれば興味深いのだが、やはり今のところきちんと説明はつかない。ただし、発話連続指数と表2の比率の間に、値の大小関係の順序相関は見られないので、この説明ができる可能性は小さいものと思われる。

表2について指摘する最後の点は、談話の小部分ごとで、特定の参加者の数値が目に見えて小さくなる場合がいくつもあるという事実である。たとえば、

内藤談話	「東本願寺周辺」	NF 2 (0.116)
	「居住地の川」	NF 2 (0.357)
	「御酉様への道」	NF 2 (0.200)
米津談話	「自動車」	YM 2 (0.056)
	「米相場・旗振り」	YM 1 (0.091), YM 2 (0.000)
	「電灯・三部制」	YM 2 (0.083)

などのケースである。これらは、いうまでもなく、その談話の小部分で当該の参加者が集中して実質的な発話をくりかえした結果の数値である。この特徴は程度の差こそあれ、すべての参加者に見られるといってよいが、そのうちでも

表2の下欄について指摘した、個人として数値の低い参加者によく見られるようである。

表2からはいくつかのことがらを指摘したが、そのうちでも最後に指摘した特徴は、具体的な発話の内容には言い及ばない範囲のこととしてではあるが、それぞれの参加者がどのような種類の発話で談話に参加しているのかをある程度まで物語ることのできる特徴だと考える。

次節では、いま指摘した特徴のとくに顕著な場合について、さらにもうすこし発話の内容的な側面に触れた考察を試みる。

2.2.7. 発話の内容——初出する名詞的要素とそのうけつき

つぎに、前節で実質的な発話と呼んだ発話に注目しよう。あいづち的な発話と異なり、何らかの実質的な内容を表す言語形式を含み、ことがらの叙述、感情の表出、意思の伝達、質問・回答、説明・了解、などのいろいろなはたらきをもった発話を見ることになる。ここで「実質的な内容」という用語を用いるとき、たとえば渡辺(1953)、芳賀(1954)、林(1960)、南(1964, 1965)などで展開された、文(発話)の持つ内容や構造の＜ことがら(Dictum)的側面＞と＜陳述(Modus)的側面＞についての区別を念頭において、発話の表す内容のうち、素材とか話題と呼ばれることがらの側面的内容に注目しようとしている。

ここでは、そうした素材や話題に直接的に結びついている度合いが高いと考えられる発話の成分として、発話に現れた名詞ないし名詞的な要素に注目することにする。

1. NF1 オタクサマハ 吾妻橋ムコーノ 町名ニイタシマス
ナントユー
2. NM2 本所4丁目デス
3. NF1 アー サヨーデゴザイマスカ
4. NM1 モ モト 松倉町ッテイッテキタンデスヨ
5. NF1 アー サヨーデゴザイマスカ

6 NM1 エエー

7 NF2 アー 松倉町 イー名前デシタネー

8 NF1 ネー

9 NM1 三ツ目通りッテユーネ アノヒロイ通り

(内藤談話「町名」から)

示した例のうち、下線をつけた部分の名詞（的な要素）を取りだそうとするのである。名詞的な要素というのは、たとえば、「コッチ」「明治37, 8年」（後出。表3）のような形のうえでの代名詞や、連用修飾成分となりうる形式でも、それぞれの発話では素材・話題としてのことがらを表現していると考えられる場合を含めようとするのである。ひとことで言えば、その発話が言い及んでいることがらに目を向けようとして、こうした名詞（的な要素）を取りだすのであるが、もちろん、ひとつひとつの発話が何について言っているのか、その発話の中心的な素材はなにか、ということ、それぞれの発話を実際に構成する言語形式を手がかりにして指摘したり表現したりすることは、それほど簡単なことではない。さらに、発話に含まれる名詞を抽出するだけでそれができたことになるわけでもない。たとえば、ある花について「マー キレーッ」「コッチヨリ キレーダネ」という発話があったとして、そこでの話題は、発話には出現していない「花」（これは名詞）であるとも考えることもできるし、「花がきれいなこと」ということがらを発話の素材ととらえることもできる。どちらも発話には現れていない言語形式を用いて話題や素材を指摘しているわけである。こうした点は重要な問題として残るが、一方で、名詞（的な要素）が素材とか話題に直接結びついている程度の高いものであることも確かであると考えられるので、ここでは以上のような観点を選ぶ（こうした問題については、たとえば南1974第四章が全体的な見渡しを与えてくれる）。

表3に、内藤談話と米津談話から談話の小部分をひとつずつ選び、そこでの発話に現れた名詞（的な要素）を抽出した。その際に、その語形を談話の流れの中で初めて使った発話者ごとにまとめて掲げ、2回目以降の使用は語形のうしろの括弧に示した。たとえば、表3-1で「労働」という語形はNM1が初めて用い、その後NF1とNF2が使ったのである。

表3 話題に関わる名詞的要素とその発話者

(括弧に入れた発話者は2回目以降の使用者を示す)

3-1 内藤談話「東本願寺周辺」

初出させた発話者	初出語数	語形と2回目以降の使用
NM1	1	労働(NF1, NF2)
NM2	0	
NF1	10	捕虜(NF2, NM1, NM2, NF1)／明治37,8年／戦争(NF2)／庭／訓練／仕事／60年前(NF2)／香具師(NF1)／女親分／顔役
NF2	32	川向こう(NF2)／こっち／子供の時分(NF1, NF2)／近所(NF2)／東本願寺(NM1, NF1)／七曲り／田原町／電車通り(NF2)／仁丹通り／曲り角(NF2)／こじき／門跡様(NM2, NF2, NF2, NM1, NM1, NF2, NF2)／ロシア人(NF2)／体操(NF2)／運動／57,8年前／大正(NF2)／下町の者／お彼岸／いろんな店／六尺のイタチ(NF2)／六尺の板／血(NF1)／体／子供心／一銭／二銭銅貨(NM1)／お嬢さん／下町／暴れん坊／いじめっ子／下町
NC	0	
計	43	

42 NF1 アソコデ マイアサ アノニワデ

43 NF2 タイソーシテンノネー

44 NF1 クンレンシタリナンカ

45 NM1 ロードー ロードーラシテタワケ

3-2 米津談話 「電灯・三部制」

初出させた発話者	初出語数	語形と2回目以降の使用者
YM1	0	
YM2	26	心齋橋(YM2)／電気／明治28年(YM2)／電灯／100ボルト(YM2)／蛍光灯／裏町／明治34年／50ワット／50ボルト／白色光／電気の由来／三部制(YC, YM2)／6時(YM2)／12時／半夜灯／料理屋／飲食屋／旅館／3時灯／3時(YC)／終夜灯／病院／公園／駅／制度
YM3	1	明治(YM2, YC)
YF1	0	
YC	1	昭和(の初め)(YM2)
計	28	

46 NF1 ハー

47 NF2 イヤ タイソースルンデスヨ ウンドー ロードーナンカ
スルトコナイデスヨ48 NF1 ロードーワ シゴトワシナイ

表3について、まず参加者ごとの「初出語数」を見ると、3-1ではNF2、3-2ではYM2がそれぞれ他を圧倒して多いことがわかる。談話の小部分ごとの初出語全体の、NF2は4分の3以上、YM2は9割以上を、それぞれがひとりでくだしたことになる。その談話の流れの中でそれまでに登場していなかった初出語を発するということは、談話に新しい話題を提出することになっている場合が多いと言ってよいと思われる。もちろん、上の「労働」のように、質問の発話に提出されたものの結局は否定されて、積極的には新しい話題として展開していかないような初出語もあるが、それととも、その短いやりとりの間

だけでも話題を提供し、談話に幅を与えていることに違いはない。

ところで、表3にとりあげた内藤談話「東本願寺周辺」と米津談話「電灯・三部制」は、前節の表2で、特定の参加者があいづち的な発話を目立って少ししか発しなかった談話の小部分であった。この場合の特定の参加者とは、NF2とYM2であり、つまりは、表3で初出語を多発しているふたりである。また、これらとは逆に、表2であいづち的な発話の比率の高かった参加者(NM1, NM2, YC)は、表3で初出語を発した回数が1か0である。発話がもともと一度もなかったYM1とYF1(YM3も発話が少なかった)をのぞけば、表2と表3の数値はちょうど逆の大小関係を示しているのである。

表2であいづち的な発話が比率として少ないということは、うらがえしのこととして、実質的な発話が多いということだと言えたのだが、このことを表3の数値と重ねてみると、実質的な発話であって、しかもそれまでに出現していなかった語を初出させるような発話が多いということになる。

表4に内藤談話について、談話の小部分ごとにどの参加者がどんな比率で初出語を発したかをまとめて掲げた。表2と比べながら見ていくと、概略におい

表4 参加者別に見た、話題に関わる名詞的要素の初出

——内藤談話の場合

談話の小部分	参 加 者					全体
	NM1	NM2	NF1	NF2	NC	
町 名	51.6%	6.5	12.9	29.0	0.0	31回
町名ゆかりの名文句	55.2	0.0	24.1	20.7	0.0	29
東本願寺周辺	2.3	0.0	23.3	74.4	0.0	43
居住地の川	48.3	0.0	27.6	24.1	0.0	29
御西様への道	34.6	7.7	23.1	34.6	0.0	26
計	35.4%	2.5	22.2	39.9	0.0	100.0%
(初出の個数)	(56)	(4)	(35)	(63)	(0)	(158)

(表中の百分率は、横計への比率である。)

て上に指摘した大小関係を見ることができる。もちろん、大小の逆転関係からはずれる場合がないわけではなく、たとえば、NM1とNF2との間にはそうしたケースが目立つ。これをどう考えるかはここでは十分な答をもたないが、たとえば発話回数とか発話の長さや語数などの量と初出語の比率を見たり、一方では前節にもふれたような、あいづちの現れかたに関するもっとほかの情報を考慮に入れる必要があるであろう。

ともかく、前にもふれた日常的な買物の談話の分析でも、初出語をつぎつぎにくりだす売り手が、あいづちやオーム返しの多い客に対して、買物の進展のイニシアチブを握って渡さない様子が記述されたし（杉戸・沢木 1977, 同 1979）、少し変った談話の形態であるが漫才について、いわゆるツッコミとボケのあいだのやりとりの特徴が、あいづち、オーム返し、初出語などの記述から浮彫りにされたこともある（橋内 1983）のと並んで、ここで扱った自由な談話資料においても同様の状況が見てとれるといつてよい。このことは、NF2やYM2という参加者の、談話への参加のしかたに関しての、ひとつの重要な特徴をとらえたことになるといえると思う。

2.2.8. 話題に関わる語のうけつぎ

ここまで、発話者の外見的な交替の状況、あいづち的な発話の現れ、話題に関わる名詞的な要素の初出状況、という三つの視点を通して、目標とする、参加者の談話への参加状況を把握することを試みた。

最後に、まだ十分にまとまった考えには至っていないものではあるが、談話の内容的な側面にもう一步入った観点からの分析について、筆者なりの今後の課題を示すために述べておきたい。

前節で注目した初出語をもうすこし内容面にまで広げていくと、表3に掲げられた初出の名詞的要素は、たがいにならぬいろいろな意味的關係にたつもの同士である場合の多いことに気づく。たとえば、内藤談話「東本願寺周辺」では、

川向こう——こっち	（話題として対照される場所）
こっち——近所	（話題にする場所。言いかえ）

近所——	こどもの時分	(話題にする時と場所)
近所——	東本願寺	(話題にする場所の限定)
東本願寺——	七曲り, 田原町, 電車通り, 仁丹通り, 曲り角	(目的地への経由場所)
曲り角——	こじき	(経由場所にいた者)
東本願寺——	門跡様	(話題の場所の別称)
門跡様——	庭	(話題の場所の更なる限定)
庭——	ロシア人, 捕虜	(話題の場所にいた者)
ロシア人——	体操, 運動, 労働	(その者のしていたこと)
		

.....など

また米津談話「電気・三部制」でも,

心斎橋——	電気	(話題にする場所と話題)
電気——	明治 28 年	(話題と話題にする時)
電気——	電灯	(話題の限定)
電灯——	100 ボルト, 50 ボルト, 50 ワット	
	白色光, 蛍光灯	(話題の物の属性)
電灯——	裏町	(話題の物のあった場所)
電気——	電気の由来	(話題についてのメタ言語的な言及)
電気——	三部制	(話題の物の属性・運用制度)
三部制——	半夜灯, 3 時灯, 終夜灯	
		(制度の名前と下位区分)
半夜灯——	6 時, 12 時	(下位区分とその内容事項)
3 時灯——	3 時, 料理屋, 飲食屋, 旅館 (同上)	
終夜灯——	病院, 公園, 駅 (同上)	
		

.....など

のように, 現れた名詞の要素同士のいろいろな関係をたどることができる。もちろん, 括弧に入れて掲げた要素同士の関係の記述は, 上に示したもののほか

にもいくつかの記述の方法や観点があるだろう。しかし、その記述は、問題の要素同士のなんらかの意味的な関連性に注目したものになる場合が多いはずだと思われる（もちろん、たとえば同音異義語を聞きちがえてやりとりしたり、ダジャレでわざと同音異義語を使うなど、意味的なつながりでなく音形的なつながりでうけつがれることだってあろうけれど）。

談話構造の一面としての発話の内容的なやりとりを見ようとするとき、発話に現れる言語要素（ここでは当面、名詞的要素を見ているが）のこうした意味的、内容的な関連性は、ひとつの有力な手がかりになると思われる。筆者は以前、ここで扱っている談話資料の一部について、話題に直接的に関与すると目される言語形式の現れをたどって、ある形式とそれに続く形式との間の内容的・形態的な関連を類型化する試みをしたことがある。そこでは、限られた範囲の資料についての検討から、つぎのような類型を考えた。

1. 反復 (1) オーム返し (例は省略)

(2) 引用

単なるオーム返しとは異なり、発言の確認や聞返しの意図で、前の発話の成分を引用・反復する。

例 YC ホー アノ イマ キタハマトカ ドージマ
トオッシャイマシタネ
YM1 エー ドージマ キタハマネ

(3) 同形再使用

先行する発話の成分をそのままのかたちで、何らかの新しい情報を提供する発話の成分として取りこんで使う。

例 NM1 アー アベカワチョー
.....
NF2 アベカワチョーッタラ フルイトコデスヨ

2. 類化 (1) 一般化 (拡大化)

先行する発話の成分が個別的な事例の場合に、それをふ

くむ上位の概念を表す発話成分を提出する。

例 NF2 アー マツクラチャー イーナマエデシタ
ネー

NF1 ハーハー ミツメドーリ ゴザイマス

NF2 ドーシテ アアユー イーチャーメーヲ ナ
クシタンデショーネー

(2)具体化(詳細化)

先行する発話の成分が、なんらかの類をまとめる上位の概念を表すとき、その類に属する下位のものごとを表す発話成分を提出する。

例 NF1 オタクサマハ アヅマバシムコーノ チャー
メーニイタシマスト ナントユー

NM2 ホンジョヨシンチャーメデス

(3)類の別項化

先行する発話の成分と同じ類概念に属して同じようなレベルにある別の項目をあらわす発話成分を提出する。

例 NM2 キョツバシカラデショ

NM1 ヨツバシカラ コノ ホソイ

.....

NM2 イヤー ヨツバシニモ アレハナー ニッ
ボンバシノナー

(4)対語化

先行する発話の成分と対になったり対立するような内容を表す発話成分を提出する。

例 NF2 タイソーシテンノネ

NF1 クンレンシタリナンカ

NM1 ロードー ロードーヲシテタワケ

NF2 イヤ タイソースルンデスヨ ウンドー
ロードーナンカスルトコナイデスヨ

3. 指示詞化

例 NM2 ドージマトユータラ コメソーパヤッタン
デス

NC ソ ソレ ソレハ モー センバ センバ
デワナイノデスカ

4. 潜在化 (1)発話成分ひきとり

先行する発話の成分を、続く自分の発話の成分として取りこみ、新しい発話を展開する。

例 NM2 ミナ ゴザ モッテ スワ・・・

NF1 ヨー ミニ イキマシタナ

例 NM2 テー アゲタラ プレイキヲ コー カケ
テ

NF1 ドコデモ トメテ クレマシタナ

NM2 クレマンネン

(2) あいづち内化

あいづち的な発話で受け、先行する成分に直接対応する成分は明示的には発話に出さない。

例 NM2 ホンジョヨンチョーメデス

NF1 アー サヨーデゴザイマスカ

NM1 モ モト マツクラチョーッテ イッテキ
タンデスヨ

NF1 アー サヨーデ ゴザイマスカ

もちろん、限られた資料を土台にしたものであって、さらにいろいろな類型が補充されていくはずのものであるが、話題のうけつがれていく姿をこんな枠組みでとらえようしたのである。また、これに関連させながら、問題の成分が

構文的に見て、続く発話のどんな成分として現れていくのかについても、

1. 題目化（～ハのつく形になる場合）
2. 格要素化（主格化，場所格化，目的格化，所有格化，・・・）
3. 述部内化
4. 修飾部内化
5. 条件部内化

などに区分して考えるのが必要ではないかと述べたことがある（杉戸 1980）。そこでの考察は、さらに検討すべき点の多い不十分なものでしかないのだが、談話の構造を、とくに参加者の参加状況を鍵にして見ていこうとする本節での目標にとっては、ひとつの不可欠な検討事項であるように思われる。

まとまった日常会話にあらわれる言語形式のあいだに「百科辞書の類縁性」を見出したり（南 1972）、発話の連続をそれぞれのものつコミュニケーション上の機能や種類から分類する研究（国語研 1971，南 1972）、いろいろな種類の発話がどんな順序で連続することが多いかという観点からの記述（日向・杉戸 1980）、また、放送のニュースの文章について、時間・空間・ことがら・論理・心理という表現内容の軸の現れかたに基づいて、「事実展開型」「補足展開型」「題目詳説型」などの類型をたてた研究（林，南，菅野それぞれ 1963）など、上に述べたことと直接的に重なるのではないが、関連する問題を扱ったいくつかの研究も参照すべきであろう。

こうした分析はひとつひとつの発話を丹念に追っていく作業のつきかさねであり、少しの資料についてであってもかなりな量になる。ここでは、残念ながら具体的な分析例を呈示することができないまま、以上のようなこれまでの蓄積をふりかえり、今後の課題を掲げておくことにしたい。

とくに、ある参加者から別の参加者に発話の交替があったときに、上に述べたようなことがらがどんな様相を示したのかは、ひとりの参加者がどんどん発話を続けて行くなかでの話題の展開とは異なっており、談話の構造を把握する研究にとって大切な要素になっていると考える。さらに参加者の談話行動を追う立場に立てば、どの参加者はどんな話題のうけつぎかたをよくする人であるか、といった観点も興味深いことであるし、さらには、談話行動の性差・年齢差・

地域差という問題にもこうした観点からの考察があってしかるべきかと考える。こうした展開を先に見すえながら、分析を続けていきたいと思う。以上を、本節のまとめに替える。

なお、本節では発話のうけつきを見ていく際に、音声として表出・表現された発話だけを一貫して追う立場をとった。たとえば、あいづち的な表現行動としては、ここであつかったあいづち的な発話以外に、無言でのうなずきが重要な位置を占めていることはいうまでもない。今回の研究全体の枠組みからしてもその世界にまで視野をひろげた分析をすべきであったという反省は残るが、今回の資料のかなりな範囲で、非言語的行動についての VTR 録画が一部の参加者のものしか収録されていない（特定の参加者の様子をクローズ・アップにしている）などの制約もあり上記のような立場をとったことを断わっておきたい。うなずきやあいづちの行動については、江川 1978、杉戸 1978 などの身振りの記録方式の検討をふまえつつ、検討を深めていきたいテーマである。

〔注 1〕この場合の「社会言語学」という用語は、つぎのことを考慮にいれて用いている。学分野の名前としての「社会言語学」のもとである、sociolinguistics の socio- という前接要素は、もともとは「つきあい」「分担」「相互交渉」とか「仲間」「友人」「協同作者」などの意味をもつ造語成分であって、国家とかさまざまな社会集団のような実体をそなえたいわゆる社会をかならずしも前提としない（そのような意味は socio- の第 3、第 4 の意味であるらしいことが、たとえば歴史主義になつて語義説明をする OED や語源辞書を見る限り、指摘できる）ことばである。socio- をこの本来の意味でとらえれば、言語行動・談話行動における参加者どうしの関係という、ある意味では臨時的な、しかし確かに協同的、相互的な人間関係は、社会言語学の研究対象にとりあげてしかるべきことがらだと筆者は考える。西欧の社会言語学の分野では、以前からいわゆるディスコース研究やコミュニケーション研究が盛んであるが、こうした視点からの関心によるところが大きいと、筆者は了解する。

〔注 2〕ここで提案する「発話連続指数」が、永岡他 1979 で提案された「対話性の指数」と共通する考え方によったものであることを印刷の段階で知った。永岡他 1979 の研究は教育工学・電気工学の分野から討論という言語行動に迫ったものである。発

言者の音声の有無だけでもとづいて認定した発言単位によりながらも、この指数をはじめとしていくつもの興味深い分析の観点が示されている。今後、あらためて参考にしたいと思う。

2.3. ポーズとイントネーション

2.3.1. はじめに

談話行動の中心となるのは、複数の話者の発話であり、その発話は、人が生きるための呼吸のうち、呼気、つまり吐く息により成り立っている。したがって、吸気、つまり息を吸う間は休止時間となる。これがいわゆるポーズである。時には吸気とは関係のないごく短いポーズもあるが、大体において、発話時には、生理的な呼吸を、ことばの文法的な句切りと合わせながら行っていると言うことができる。いわゆる息の合った談話においては、各人が、それぞれ意識の上で内容を共有しつつ、呼気と吸気のタイミングを合わせていくとも言えよう。しかし、このタイミングをどのように合わせるのか、その具体的な時間関係を明らかにした例はないようである。

大体、呼気の時間は、吸気の時間よりも長く、吐く息と吸う息との時間関係は、安静時には3:2と言われるが、発話中には呼気の時間は吸気の時間よりもさらに長くなるとされている。筆者の測定したところでは、アナウンサーによる天気予報の朗読では、これがほぼ3:2であったが、ニュースの場合には3名が約3:1であった。この場合は短い時間に息を早く吸うことになる。これらは一方的な情報伝達の例であって、呼気と吸気の時間の割合は比較的安定しているが、談話においては、これが個人により場面によりさまざまであり、事情はそう簡単ではない。

それでは、自然な談話における各話者の話しことばは、一体どのような発話とポーズの時間関係によって進行するのであろうか、また、これにあいづちをうち、あるいは、話を割込ませ、話者が交代し、話題が転換する等のタイミングは何をきっかけとするのであろうか、さらに、談話の中では、話者は時には

言い淀み、あるいは不要なことばを入れたり、文脈が途中から変わったりして、話ことばは必ずしも文としてのまとまりを示してはいない。それにもかかわらず聞き手はよく理解する。

これについては、発話とポーズの時間関係、発話速度などを測定して調べるとともに、イントネーションの役割についても検討する必要がある。なぜなら、発話——ポーズ——発話——ポーズ——発話——ポーズのように発話を区切りながら進行する談話の中で、他者によるあいづちや割込みが入り、話者交代等が生じるきっかけは、発話のイントネーションに負うところが大きいと考えられるからである。

そこで、以下では、まず、話者が司会者の問いに答え、これに司会者があいづちをうつ、というような単純な形式の例を用いて上記の説明を行い、続いて、司会者が中座した後で、数名の話者が談笑する部分を材料として、自然な、生き生きとした談話の、ことばの流れと、その音響の特徴との関連を、実験資料にもとづいて明らかにしていきたい。

2.3.2. 何をどう調べるか——音声資料と実験の方法

多くの資料のうち、ここでは専ら大阪船場米津グループの音声資料を用いてのべることにする。この中には、2名の話者がそれぞれ司会者あるいは他者の問いに答える部分があり、また、さきにのべたように司会者が中座し、その間、船場の人々4名がごく自然に談笑する場面がある。これらが談話資料として上乘の材料であると判断したので、分析の対象として選んだ。

まず、問いに対して1話者が答えるという比較的単純な談話形式の1部分を2名について発話とポーズの時間関係や発話速度、聞き手の応答のタイミング、さらに、この応答とイントネーションとの関連を調べた。

次に、4名の談話の中から一場面を選んで分析して、自然な談話中の発話とポーズの時間関係、また、その時にしばしば生ずる複数の話者の音声の重なり、他の話者の割込みや、話者交代等のタイミング、イントネーションの効果等、話の音響の特徴を内容との関連において捉えてみた。

なお、米津グループの話者 M_1 , M_2 , M_3 , は、ここでは便宜上それぞれ話者 A, B, C とし、話者 F (C 氏夫人) についてはこの記号をそのまま用いることにする。

音声資料の分析には、広帯域、狭帯域のスペクトログラフとマイクロコンピュータ PC9801Vm2 の両者を用いた。前者を用いて語音の特徴により分節の区切りを行い、発話とポーズの時間を測定した。後者を用いて、基本周波数を抽出して、談話のイントネーションの特徴を調べた。また、とくに聞き手が声を挿入し、あるいは声が重なる部分については音声波形の切断実験を行い、これによって音声の重なる部分について時間の測定を行った。

談話中には音声の不明瞭な部分もあり、その上割込み、重なりにより、音声波形が不明瞭な部分があるため、分節の区切りは簡単でない。時には、広帯域で行うはずの分節の区切りに狭帯域スペクトログラムの併用が有効なこともあり、また、マイクロコンピュータを用いた切断実験により、はじめて割込みの音声は明瞭となるということもあった。以下では、その分析結果から談話の特徴を探ってみよう。

2.3.3. 話し手と聞き手 (司会者) の音声的タイミング

(a) 話し手の発話時間とポーズの時間

1 話者が他者の問いに対して説明するふたつの場面 (1) 話者 A, (2) 話者 B の発話を記述すれば次のとおりである。(ただし、読点はポーズのはいつている位置を、〈 〉印は司会者その他が挿入していることばを示す。)

(1) 船場のことば (話者 A と司会者)

司会者が大阪弁の変わり方について質問、これに A が答える部分である。

「それはな、〈ハイ〉、これねー堂島、堂島に北浜ね、〈ハイ〉、ね、〈ハイ〉、あ道修町、〈ハイ〉、こうゆうとか (所は)、ことばが汚かったんです、〈アーソーデスカ〉、おんなじ船場でも、〈アー〉、ほいで本町から、本町から久宝寺町にかけてまだよかったです。〈アー〉、しかしね、〈ハイ〉、内部にお、内部の、お

ーでは、あー、また、特別によか、ことばがよかったんでんな。」

(2) 石油の話（話者 B と、司会者及び A）

話者 B が当時の石油について説明する。

「ああ、もう石油ばかりだ、せいわたしら、じゅうにいの、こ、ちいそなっ
てから、石油を、買いにくるもね、そのー、このむこうやちょうど、あの一尼
崎のあの一、あのないや、アふのまちばし、〈フンフン〉、そこのな、な、平野
へえべえゆうとこにね、スタンダードの石油の、じょうまつ印ゆうて、〈ハイ〉、
あー、ちゃんときれーな箱、二缶入ってまんね、〈フン〉、四円十銭だ。〈ホ
ー〉、はあー。」

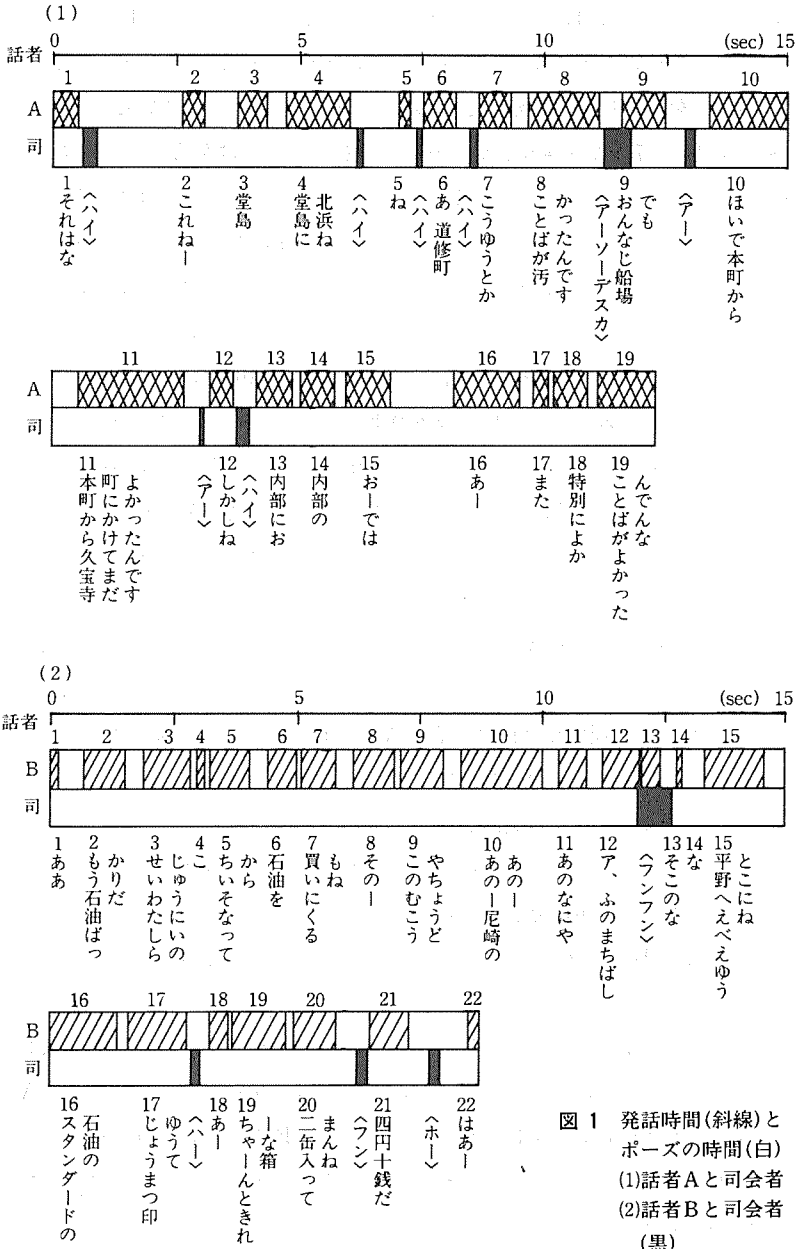
さて、他から何かを問われた時、話者は答えるために言語中枢で次のような
ことを行うであろう。まず、言うべきことがらの整理、単語の選択、その発話
のための語音の配列、単語の文法的配列、これらを何らかの発話をしながら進
めていくものと考えられる。その間には、ポーズを置き、むだな音やことばを
入れ、又は言い誤り、繰返し、あるいは倒置が行われることもある。

次には、こうして表出される発話とこれに続く休止との時間関係を、ことば
の記述とともに図示しよう。

図1は、(1)の話者 A 及び(2)話者 B の発話時間を斜線で、これに続く
ポーズの部分を残して、発話の時間的な経過を示したものである。下段は、
これに応答する司会者等（黒）の場合である。ここに見られるようなポーズに
よって区切られた発話部分を、ここでは仮に「発話節」と呼ぶことにする。各
発話節には番号を付し、そのことばを下に示した。中には、上記のように無意
味な音やことばの繰返し、語音の脱落また倒置等が見られる。

図1の(1)を見ると、発話とポーズの時間は長ささまざまであるが、発話
時間に比べてポーズの時間は概して短い。ただし、1「それはな」の後のポーズ
は長く、2「これねー」に続く休止にいたるまで、言うべき内容の準備に少々手
間どっていることを示している。

発話節がとくに長いのは、内容のある部分であり、話のまとまらない部分、



言い淀み等の発話節の時間は概して短い。

13「内部にお」以下 17 までは繰返しや無駄な音の挿入が多く、15「おーでは」の後も休止が長い。次のことばを探し、言い淀んでいる部分である。これらは話者が考えを整理しながら発話を進めていく様子をよく示している。

速い発話は、7「こうゆうとか（所は、の意）」「ことばが汚かったんです」、19「特別によかったんでんな」、11「本町から久宝寺町までにかけてまだよかったです」等である。速度が遅いのは、3「堂島」、15「おーでは」、次いで 1「それはな」、12「しかしね」、13「内部にお」である。内容の明瞭な部分は早口であるが、重複したり、言い淀んだりする部分は遅い傾向がある。

図 1 の（2）、話者 B の場合、発話は全体に短く、10「あの一尼崎のあの一」がやや長い程度である。ただしこの後のポーズはとくに長くはない。

4「こ」、5「ちいそなってから」等は無意味な挿入であるが、A の場合と異なり、その後の休止は短く、たたみかけるように次々と発話が入る。

ポーズも概して短いが、比較的最長い例が 19「四円十銭だ」の後に見られる。ここは明らかに説明の終りに近い部分である。

発話速度は概して話者 A より速い。速い発話節は 12「ふのまちばし」、20「二缶入ってまんねん」、2「もう石油ばっかりだ」、7「買いくるもね」、21「四円十銭だ」等である。遅い発話節は、話者 A と同様、言い淀みの部分であり、8「そー」は、他の場合の 8、9 拍分の長さである。

表 1 と表 2 にはこれらの実測値を示したので参照されたい。なお、（ ）内には、図 1 に示した各話者の発話節の発話速度を 1 秒間に話される拍数の値で示した。従って大きい値は発話速度が速いことを示している。

これら A と B の 2 名の話者の、発話時間とポーズの時間を比較すれば次のようになる。

図 2 は話者（1）A と（2）B の発話時間を横軸に、ポーズの時間を縦軸にとって、発話とこれに続くポーズとの時間的な分布を示したものである。A は発話時間にも休止時間にもばらつきが大きい、B の場合には発話時間はばらつきが大きく、ポーズの時間は一様に短い傾向がある。発話とポーズの時間関係は個人により、また、場面により異なることが考えられる。

表1 話者Aの発話時間及び発話速度(()内)とポーズの時間

〈船場のことば〉

話者	A	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
1	それはな	4	0.557	(7.181)	2.135
2	これねー	3	0.441	(6.803)	0.649
3	堂島	4	0.635	(6.299)	0.416
4	堂島に北浜ね	10	1.285	(7.782)	0.992
5	ね	1	0.242	(4.132)	0.285
6	あ道修町	5	0.662	(7.553)	0.463
7	こうゆうとかー	6	0.561	(10.695)	0.369
8	ことばが汚かったんです	13	1.262	(10.301)	0.631
9	おんなじ船場でも	9	0.872	(10.321)	0.924
10	ほいで本町から	9	1.058	(8.507)	0.533
11	本町から久宝寺町にかけて まだよかったんです	24	2.513	(9.550)	0.513
12	しかしね	4	0.495	(8.081)	0.487
13	同部にお	4	0.734	(5.450)	0.155
14	内部の	4	0.691	(5.789)	0.211
15	おーでは	4	0.904	(4.425)	1.362
16	あー	2	1.341	(1.491)	0.319
17	また	2	0.332	(6.024)	0.115
18	特別によか	7	0.673	(10.401)	0.210
19	ことばがよかったんでんな	12	1.220	(9.836)	
1～18の合計		115	15.258	(130.785)	10.769
平均値		6	0.848	(7.266)	0.598
標準偏差		5.403	0.524	(2.513)	0.500

表2 話者Bの発話時間及び発話速度(()内)とポーズの時間

〈石油の話〉

話者	B	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
1	ああ	2	0.140	(14.286)	0.528
2	もー石油ばかりだ	10	0.852	(11.737)	0.382
3	せいわたしらじゅうにいの	11	0.989	(11.122)	0.138
4	こ	1	0.171	(5.848)	0.090
5	ちいそなってから	8	0.805	(9.938)	0.391
6	石油を	4	0.603	(6.633)	0.091
7	買いにくるもね	7	0.677	(10.340)	0.385
8	そのー	2	0.832	(2.404)	0.120
9	このむこうやちょうど	9	0.867	(10.381)	0.377
10	あの一尾崎のあの一	10	1.675	(5.970)	0.342
11	あのかなにやな	5	0.527	(9.488)	0.339
12	あふのまちばし	7	0.788	(8.883)	0.058
13	そこのな	4	0.363	(11.019)	0.354
14	な	1	0.108	(9.259)	0.452
15	平野へえべえゆうとこにね	13	1.223	(10.630)	0.333
16	スタンダードの石油の	11	1.280	(8.594)	0.224
17	じょうまつ印ゆうて	10	1.174	(8.518)	0.496
18	あー	2	0.368	(5.435)	0.045
19	ちゃんときれーな箱	10	1.082	(9.242)	0.175
20	二缶入ってまんね	11	0.840	(13.095)	0.430
21	四円十銭だ	8	0.785	(10.191)	1.224
22	はあー	2	0.222	(9.009)	
1～21の合計		146	16.149	(193.013)	6.974
平均値		7	0.769	(9.191)	0.332
標準偏差		3.840	0.402	(2.742)	0.254

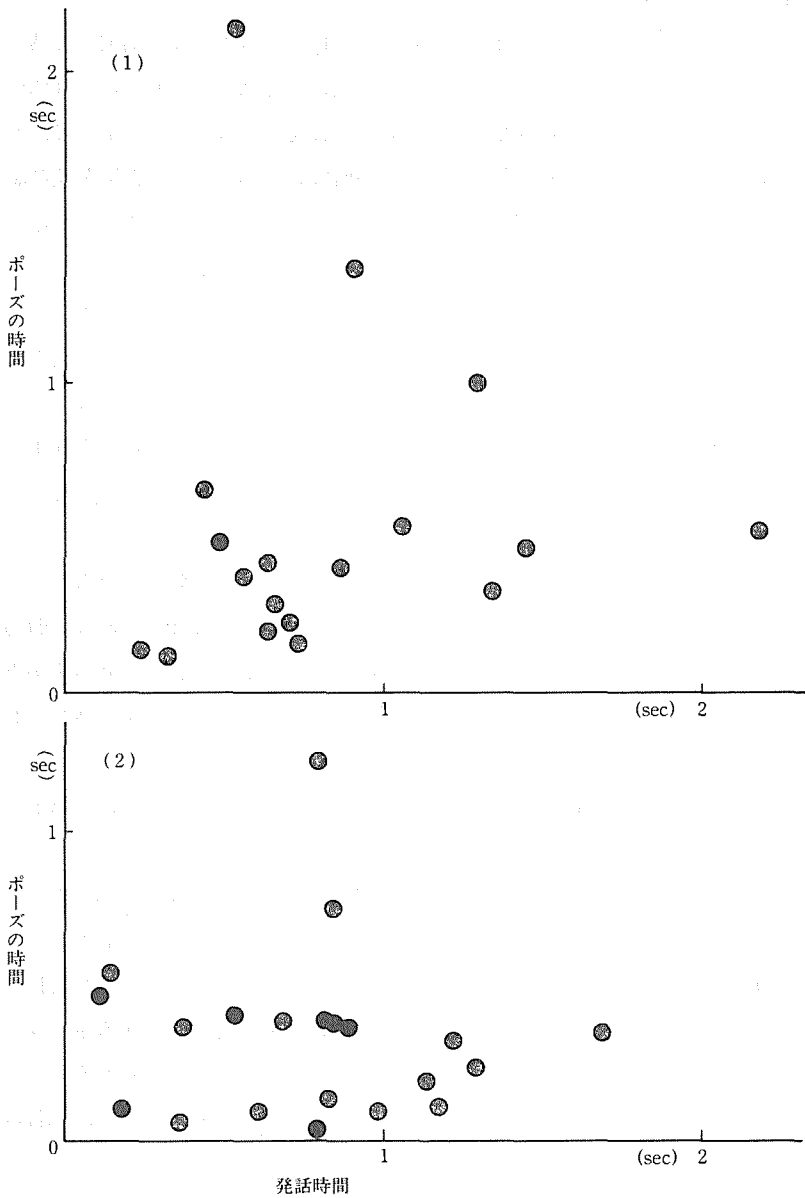


図 2 (1)話者Aと(2)話者Bの発話とポーズの時間関係

(b) 話し手の発話に対する聞き手の応答のタイミング

図3の(1)(2)はそれぞれ話者Aと話者Bがどのような時間関係で話しているかを観察するためにゼロの位置から左側には発話の、右側にはこれに続くポーズの時間をとって発話とポーズの時間的経過を縦に図示したものである。司会者等の発話は、話者Aの発話とポーズの時間帯に挿入した。話者A及び話者Bのことはそれぞれ左に示してあるのでその番号と棒グラフとを対応して観察されたい。図の右には司会者等他者のことは記入した。

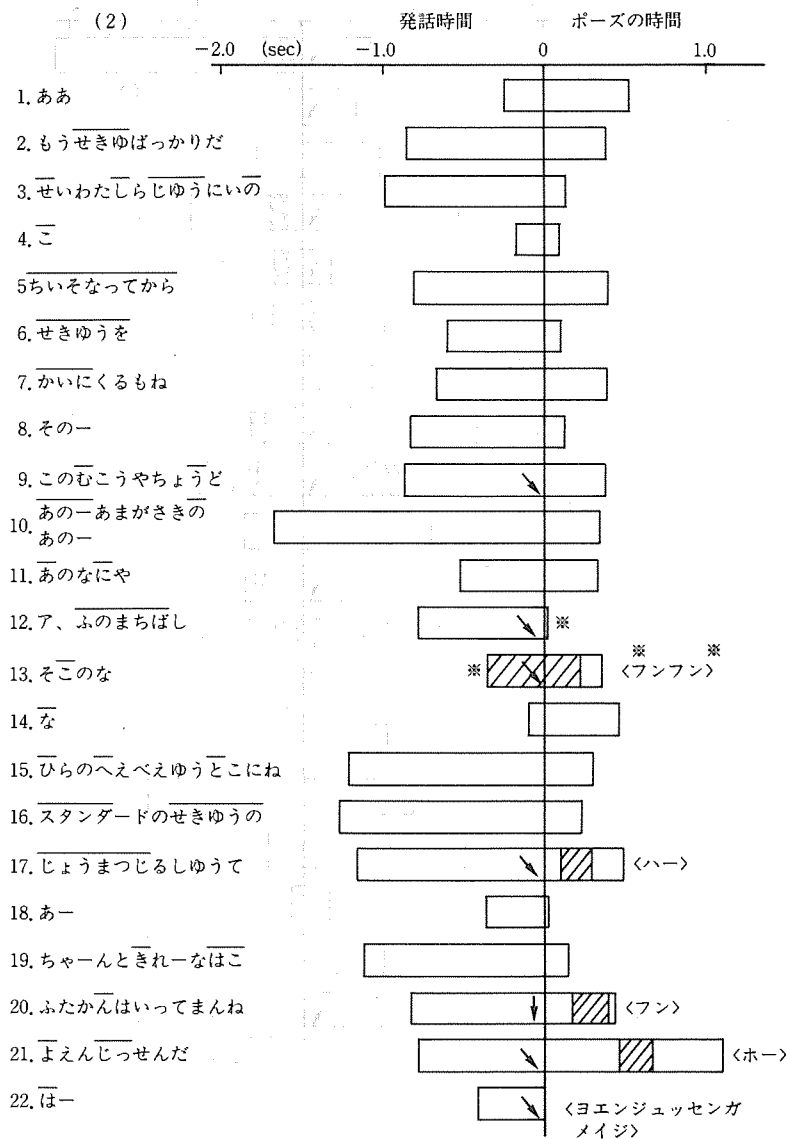
その(1)を見ると、聞き手の応答は始めの部分に多く、後半には少ない。後半にあいづちのないのは、話者の無意味な発話によるものであろう。聞き手は、話者が言い淀んでいる部分や、無意味な語又は音には反応を示さない。

応答は多くの場合、発話の直後に入るのではなくて、発話の終止から0.1ないし0.3秒後に挿入されている。これは、休止時間がごく短い場合は、応答するゆとりがないことをも示唆している。

また、末尾に声下げのある発話節の後にはあいづちの入る傾向が見られる。8「ことばが汚かったんです」に続く〈ああそうですか〉は、9「おんなじ船場でも」の発話に0.5秒ほど重なっている(*印)。司会者の応答に話者の声が重なるのは、この部分だけであるが、話し手はここで前半部分の文を完結しており、聞き手はその後に再びあいづちを挿入している。

その(2)の、話者Bに対する聞き手のあいづちは、始めの部分にはほとんど見られない。この部分は意味がわかりにくく、また、さきにのべたようにポーズが短いので応答が入りにくいということがあるかもしれない。13「そのな」の後のあいづち〈フンフン〉は話者Aによるものであり、司会者のあいづちは17「じょうまつ印ゆうて」の後から挿入される。ただし、あいづちを打つ相手は話者の視線の方向とも関係がある。また、話者の発話に対する重なりの有無又はその多少は、話者と聞き手の親疎とも関係があると考えられる。

聞き手の応答はここでも発話の終わりの時点よりやや遅れる。また、応答は(1)の場合と同様話者の声下げと対応している。



(c) 聞き手は何に応答するか——話者のイントネーションとの関連

図4には、図3に矢印を付した声下げの実際を示すために発話節の末尾の基本周波数曲線を示した。紙面の都合上、音声波形は上段のものだけを示して他の発話節については省略した。

図の(1)は話者Aの、(2)は話者Bの場合である。図(1)の、〈ハイ〉等の応答は、末尾に声下げのある場合にあらわれ、他の、例えば「どうじま」のように上昇調のアクセントの単語で区切った場合、又は、「内部にお」「おー、では」「あー」など言い淀みの場合には末尾の声の高さも中途半端であり、これに対する聞き手の応答はない。

図の(2)の場合も下降音調と、〈フンフン〉〈ハー〉〈ホー〉等の聞き手の応答とがほぼ対応している。

この声下げのイントネーションは、発話の区切りを示すものであり、これに対して聞き手はあいづちを送る。

ここで取上げた部分はいずれも1名の話者が語り、主に司会者が聞き手という比較的単純な談話であるからこのような音響的特徴をわかり易い形で提示できたと思われる。次には、上記2名の話者を含めた4名の話者の談話の特徴についてのべよう。

2.3.4. 自然な談話の発話及びポーズとイントネーション

(a) 自然な談話のことばの流れと時間の流れ

ここでは、思い出を共有する4名の話者の自由な談話中、次の部分を材料とする。(これに先行する部分での話題は、まだブレーキがついていなかった高価な自転車の話であり、道には人力車がたまに通るくらいで危険は全くなかったと語っている。)

(3) 電車開通と巡航船の話(話者A, B, C, Fの談話)

下記の「」内は主となる話者の発話であり、これに対する他者の応答は〈 〉内に小さい文字で示した。カタカナは話者Fの発話である。なお、読点はポー

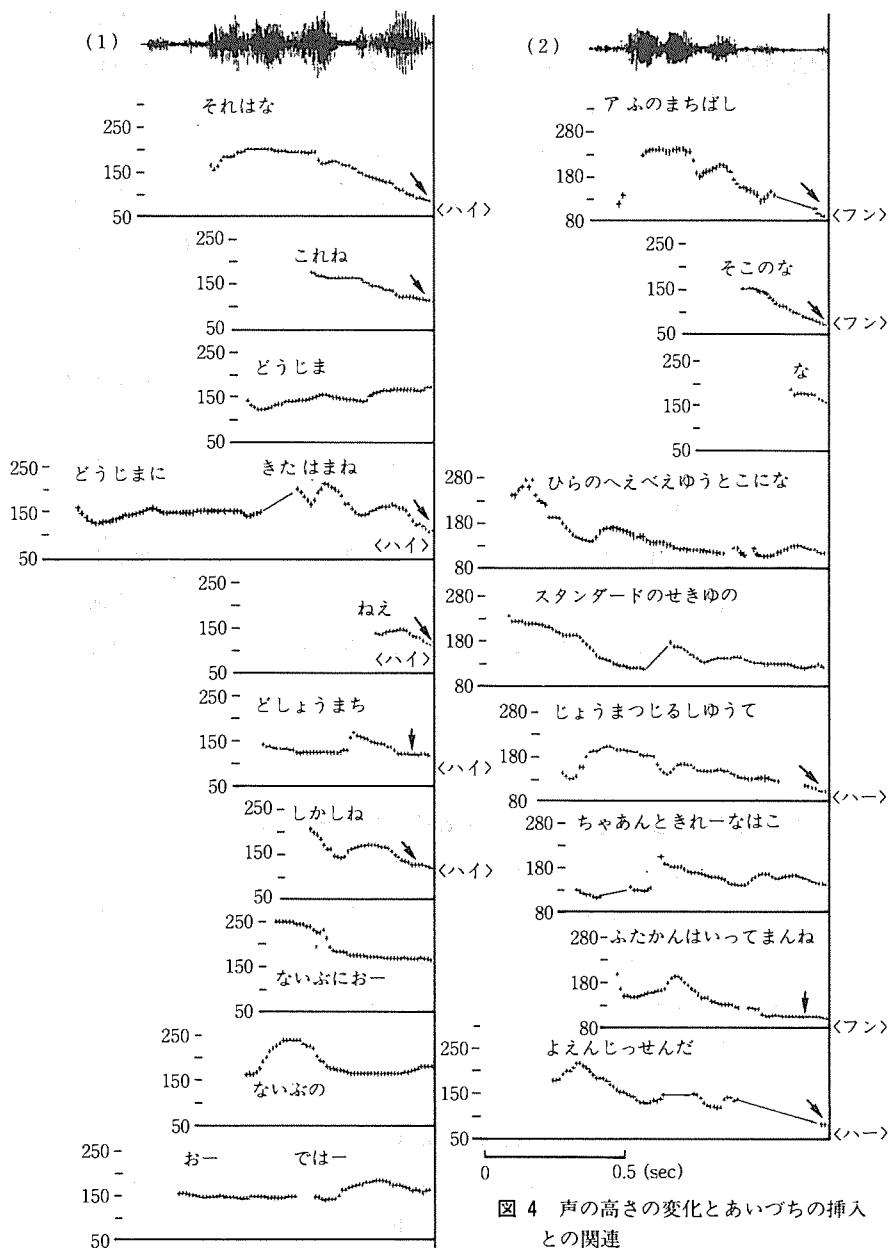


図 4 声の高さの変化とあいづちの挿入との関連
(1)話者A (2)話者B

ズの位置を示している。

話者 B 「そりゃもーそりゃそーだんがうちの近所の若いときにも、よつ、電車が明治、あの一、三十、えー七年か、〈エー〉、あ出けたんが三十六年やけど、三十七年に、四つ橋の交差点で、〈エー〉、ダイヤモンド交差点ゆうてあれゆうたんだ、〈笑声ソウユウ〉、みなごぞ持ってすわりに、〈笑声ヨウミニ〉、見に行きまんねや、〈イキマンタナ笑声〉、〈ソー〉、はー」

話者 A 「いやそれでもーあんた、四つ橋のどこ、深江橋のどこでな、〈あ〉、あの一、なにが巡航船つぶしに行きよった、〈そーそーだんが〉、車屋が、〈それはな〉」

話者 B 「〈あー〉、あれはそれは明治三十六年だ、〈笑声〉、はあ、でけたんは、〈アーソナ時分デスカヨゴソンジデンナーオ宅サン〉、あなぜかとゆうと、あの一、巡航船がでてて人力がもうわや（駄目）になった、〈エー〉、ゆうてひんごばし（肥後橋）の、北詰めから、お、もー、せん、うしろいて、あ、三角の赤旗立てた、〈ハイ〉、その車乗ったら四銭でずー（と）道頓堀行きまんねん、〈アー〉、競争だ、〈アーソーデスカ〉、あーそれで加賀の屋敷ゆうとーね、〈ふん〉、むこのとこでばーともー、いし、石ころで巡航船をな、襲撃したとゆうんだ、〈アーソウデスカ〉、まー新町橋からにっぽんばしまで、出ただけだんね、〈エー〉、そのくせ、なーわずかなきよぎ（距離）ですよってな、〈エエ笑声〉、〈あーよかったね巡航船てええ気分タッタッタッ〉、あーそうだ」

話者 A 「いやあれね、五回博覧会の時にあの、おーなんの、おー、〈清津橋でしょ〉、四つ橋からこの、細い、〈あー〉、なー」

話者 B 「いや四つ橋よりもあれはなーにっぽんばしのな一、〈ふーん〉、あの津の清のねき（近所）のな一、〈あー〉、清津橋いま高架があんななって、〈エエエ〉、それがまーちょっきり、〈その津の清からずーっと〉、しょんべん買い屋舟のきれえな舟で、〈笑声〉、赤のもうせんひいて、〈うん〉、かいでずーもー水はきれーですわ、〈そうですね〉、ひえなご橋のところで、三銭だ」

図 5 には、上記の、4 名の話者による発話とポーズを時間の経過に従って左か

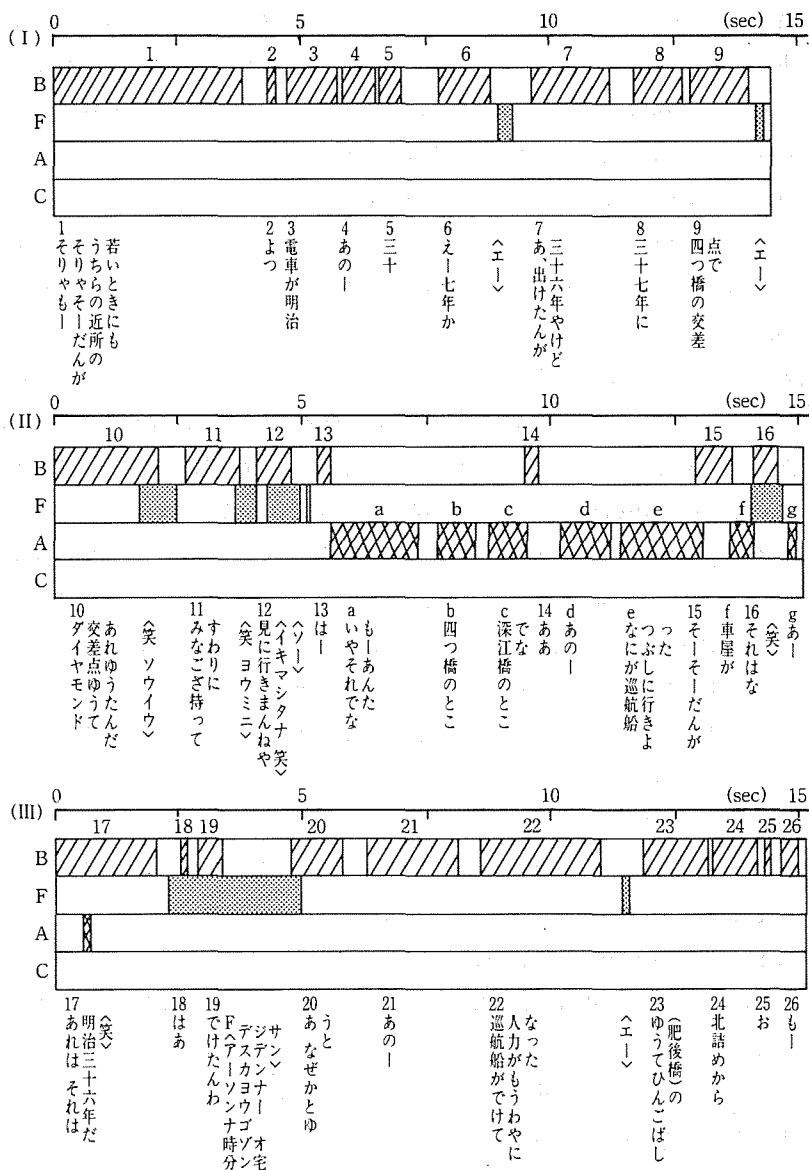


図 5 自然な談話中の発話とポーズの時間関係(次ページへ続く)

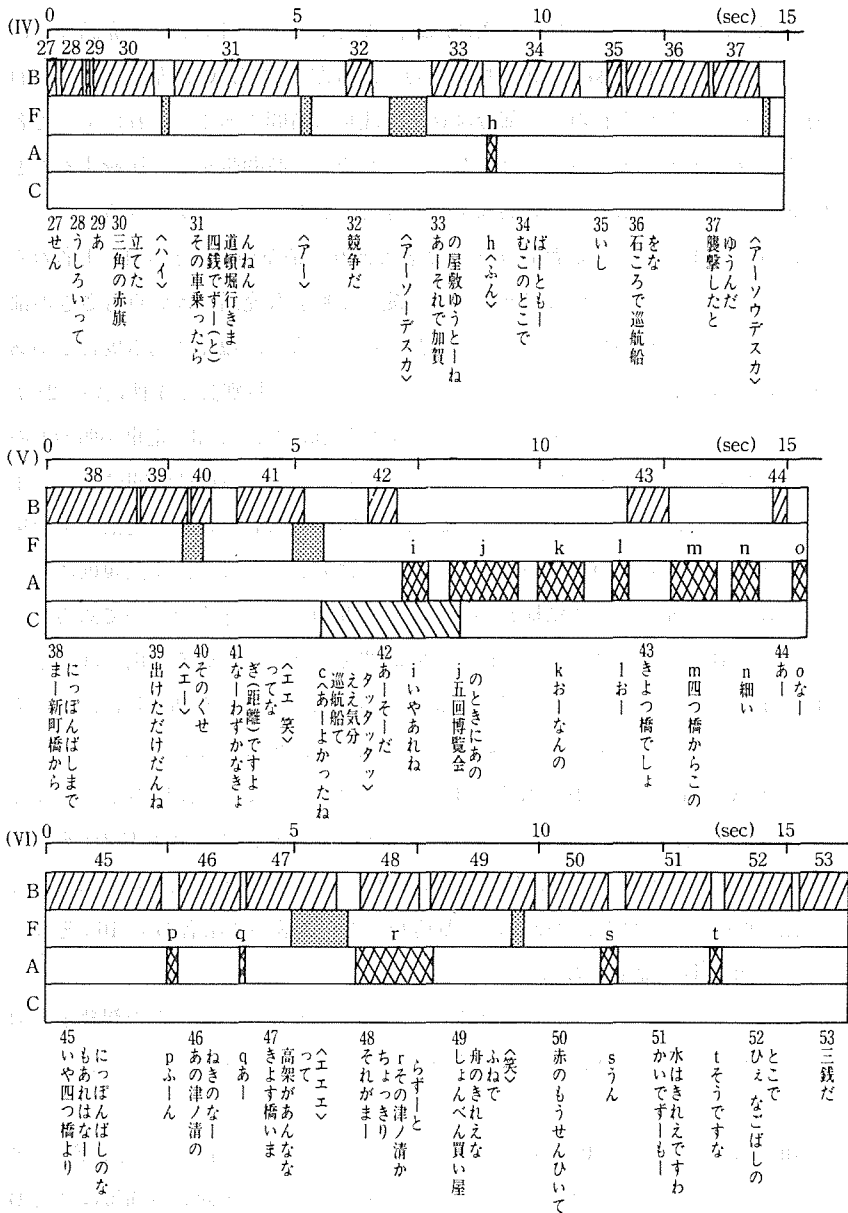


図 5 (つづき)自然な談話中の発話とポーズの時間関係

ら右へ、便宜上(I)~(IV)のように区切って示した。発話回数の多い話者Bを上段に、そのよき聞き手Fを次に、話者AとCをその下に置き、発話部分については、話者Bは斜線、Fの場合は点、Aは左右斜線、Cは左から右への斜線で示した。それぞれの白い部分は銘々の沈黙の時間である。これによって各話者の発話とポーズの時間だけでなく、それぞれの時間帯を縦に比較することによって他者の発話との時間的な重なり等をも観察することができる。

図5の(I)では、話者Bが主な話者であり、前章の場合と同様、1名のみが応答する単純な談話形式である。言い淀みや無駄な発話が多い点もさきの部分と似ている。しかし、発話とはくに長く続く場合と、短く区切る場合とがあり、例えば、1「そりゃもーそりゃそーだんが云々」は特別長く4秒近い。2「よつ」は9「四つ橋」の四つであろう。この持続時間は短く、3「電車が明治」の後、言い淀みのポーズの代りに4「あの一」が続くがこの持続時間は長い。また、この始めから6「えー七年か」まではほぼ10秒の間に「電車が明治三十七年に」という内容しかのべていない。このように冗長度は高く、文法規則に合っていないが、聞いていて結構わかる。これは問題とすべき点の一つであろう。

図の(II)の部分は各発話が複雑な時間関係で進行している。例えば、話者Bの11「ダイヤモンド交差点ゆうてあれゆうたんだ」という挿入句に、Fの笑声と〈ソウイウ〉が重なるのを始め、声の割込みが少なくない。

話者Aがa「いやそれでなもーあんた」と割込み、c「深江橋のとこでな」、e「なにが巡航船つぶしに行きよった」と新しい話題を出す。話者Bの「そーそーだんが」がこれに重なり、Fの笑声に続いて、話者Aの「なにが」に当たる主語「車屋が」がおくればせながら割込む。これに続いて話者Bの16「それはな」で再びBが話者となる。

このような重なりの多いのはさきにもものべたように互の間がらの親疎とも関連があり、これは、興に乗っている息の合った談話のパターンの一つとすることができる。

(III)の部分では話者Bの17「あれは、それは明治三十六年だ」に続くFの〈アーソソナ時分デスカヨウゴ存ジデンナーオ宅サン〉、これと同じ時間帯に話者Bの18「はあ」と、19「でけたんわ」が入り、さらに20「あなざかとゆうと」が

割込む。

以降は、車屋が巡航船をつぶしにかかった理由を話者 B が説明する部分であり、発話の持続時間がやや長くなる。

(IV)では再び B の話に F が応答する部分である。発話節の持続時間もポーズのそれも長短さまざまであるが、声の重なりもなく単純な談話形式である。

(V)の部分では、話者 B に F が重なり、さらに、C の発話に B, A が重なる。つまり、今まで沈黙していた話者 C の「あーよかったね、巡航船でええ気分タッタッタッ」の発話に、話者 B の 42「あーそーだ」及び、話者 A の i「いやあれね」が重なっている。

この部分は上記の (II) (III) と同様、談話が進展する時の発話の割込みについて説明するのに適当な部分と思われる。

(VI)でも話者 B が話し手である。今では高架ができ、すっかりさま変わりしたところ、かつては、下肥を運んだ舟と同じ形の、しかしきれいな舟を、かいでこぐ。水は美しい。その渡し代が三銭、と、いわゆる古きよき時代を語る。笑声は重なり、割込みもあり、声の重なりもあるが、話者 B はこれにかかわりなく、話し続ける。ここでも、ことばは必ずしも文法的に整っていないにもかかわらず内容が具体的でわかり易い。

表 3 と表 4 には、それぞれ話者 A と話者 B について、発話時間とポーズの時間を示し、その間の () 内に発話速度を 1 秒に入る拍数の割合で示したので参照されたい。

表 3 自然な談話中の、話者 A の発話時間及び発話速度(()内)とポーズの時間

話者	A (II)	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
a	いやそれでも一あんた	11	1.775	(6.197)	0.410
b	四つ橋のどこ	7	0.760	(9.211)	0.275
c	深江橋のどこでな	10	0.748	(13.369)	0.670
d	あの一	2	0.975	(2.051)	0.230
e	なにが巡航船つぶしに行き よった	18	1.665	(10.811)	0.627

f	車屋が	5	0.482	(10.373)	0.689
	合計	53	6.405	(52.012)	2.901
	平均値	9	1.068	(8.669)	0.484
	標準偏差	5.565	0.530	(3.995)	0.205
	発話：ポーズ		69%		31%
話者	A (V)	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
i	いやあれね	5	0.532	(9.398)	0.423
j	五回博覧会のときにあの	15	1.413	(10.616)	0.420
k	おーなんの	4	0.909	(4.400)	0.588
l	おー	1	0.332	(3.012)	0.839
m	四つ橋からこの	8	0.948	(8.439)	0.287
n	細い	3	0.538	(5.576)	0.674
o	なー	1	0.330	(3.030)	0.056
	合計	37	5.002	(44.471)	3.287
	平均値	5	0.715	(6.353)	0.470
	標準偏差	4.923	0.396	(3.120)	0.259
	発話：ポーズ		60%		40%

表4 自然な談話中の話者Bの発話時間及び発話速度(()内)とポーズの時間

		電車開通の話			
話者	B (I)	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
1	そりゃーそりゃそーだんが うちの近所の若いときにも	26	3.896	(6.674)	0.433
2	よつ	2	0.211	(9.479)	0.232
3	電車が明治	7	0.968	(7.231)	0.095
4	あの一	2	0.700	(2.857)	0.063
5	三十	4	0.520	(7.692)	0.810
6	えー七年か	6	0.970	(6.186)	0.840
7	あ出けたんが三十六年やけど	17	1.554	(10.940)	0.507
8	三十七年に	9	0.870	(10.345)	0.275
9	四つ橋の交差点で	11	1.172	(9.386)	0.368

合計	58	6.965	(64.116)	3.190
平均値	7	0.871	(8.015)	0.399
標準偏差	5.064	0.408	(2.637)	0.299
発話：ポーズ		69%		31%

話者	B (IV)	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
27	せん	2	0.160	(12.500)	0.092
28	うしろいて	6	0.430	(13.953)	0.077
29	(あ)	(1)	0.055		0.056)
30	三角の赤旗立てた	12	1.282	(9.360)	0.408
31	その車乗ったら四銭で ずー(と)道頓堀行きまんねん	28	2.532	(11.058)	1.012
32	競争だ	5	0.530	(9.434)	1.228
33	あーそれで加賀の屋敷ゆう とーね	15	2.049	(7.321)	0.379
34	むこのとこでばーともー	10	1.591	(6.285)	0.581
35	いし	2	0.288	(6.944)	0.105
36	石ころで巡航船をな	13	1.670	(7.784)	0.085
37	襲撃したとゆうんだ	11	0.927	(11.867)	0.492

合計	104	11.459	(96.506)	4.459
平均値	10	1.146	(9.651)	0.446
標準偏差	7.677	0.808	(2.608)	0.404
発話：ポーズ		72%		28%

話者	B (VI)	拍数	発話時間	(速度)	ポーズ
45	いや四つ橋よりもあれはなー にっぽんばしのな	21	2.294	(9.154)	0.427
46	あの津の清のねきのなー	10	1.268	(7.428)	0.110
47	きよつ橋いま高架があんななて	17	1.587	(10.712)	0.371
48	それがまーちょっさり	10	1.195	(8.368)	0.236
49	しょんべん買い屋舟のきれえ なふねで	16	2.154	(7.428)	0.510
50	赤のもうせんひいて	10	1.202	(8.319)	0.343

51	かいでずーも一水はきれいで すわ	16	1.720	(9.302)	0.280
52	ひえなごばしのとこで	9	1.372	(6.560)	0.159
53	三銭だ	5	1.036	(4.326)	
45～52の合計		109	12.792	(67.729)	2.436
平均値		14	1.599	(8.466)	0.305
標準偏差		4.438	0.429	(1.270)	0.135
発話：ポーズ			84%		16%

次には、まず、このようなごく自然な会話中の、発話とポーズの時間関係を、A, B 両者についてまとめて見よう。

(b) 発話とポーズの時間関係

主な話者 B については、図 5 に示した (I) (IV) と (VI) の、発話とポーズの時間関係を扱う。(I) では、無駄の多い語り口であるが (IV) と (VI) では情報量が多くなり、話がなめらかに進む。話者 A の発話は、(II) と (V) の中にあり、これらの発話とポーズの時間関係を話者 B との比較の材料とする。

図 6 には、さきの図 2 と同様の手法によって、話者 A の場合を (1) に、B の場合を (2) に、発話とポーズの時間関係を示した。つまり、発話時間を横軸に、これに続くポーズの時間を縦軸に取って両者の時間的分布を示したものである。話の進展によって生ずる変化を見易くするために、図 5 の (I) の発話とこれに後続するポーズの時間を○印、(IV) のそれを△印、(VI) のそれを●印で示し、さらにそれぞれの分布のおおよその範囲を曲線で囲んだ。

さきの図 2 では、発話とポーズの時間関係が話者 A と B とでは異なることを示したが、図 6 では、話者による相違点よりもむしろ話者 B の場面による相違が目立っている。つまり話者 B の、(I) においては発話節 1 を除いて発話時間が短く、左にかたよっており、話者 A と類似の傾向がある。(IV) の発話は、極端に短いものと長いものがあるが、(VI) では発話時間が比較的長く、ばらつきが少ない。これは、言い淀みの多い (I) の場合と、興にのって語る (IV) あるいは (VI) の場合ではそれぞれ発話とポーズの時間関係が異なることを示

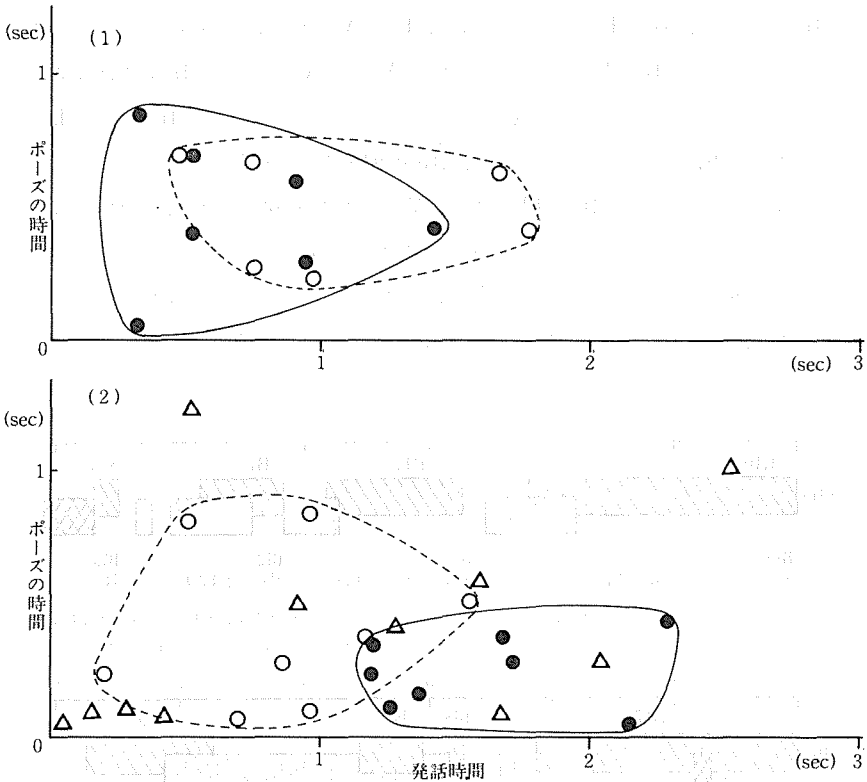


図 6 自然な談話中の(1)話者Aと(2)話者Bの発話とポーズの時間関係
(場面(I)は○印, (IV)は△印, (VI)は●印, ただし話者Bの発話節1は省略)

している。

発話とポーズとの割合はAの場合, (II)では69:31, (V)では60:40であった。話者Bの場合は(I)では69:31, (IV)では72:28, (VI)では84:16となり, 話者Bの場合平均すればほぼ75:25つまり3:1の関係にある。(表3, 4参照)上記は, 話上手な話者Bの場合は発話とポーズの時間関係が単純でなく変化に富むことを示している。

(c) 発話の重なり, 割込みと話者交代

さきの図5の(Ⅰ)(Ⅳ)の場合は比較的単純な談話形式であった。しかし、(Ⅱ)では、話者BとFの音声を重ね、BとAとのそれが重なる。また、(Ⅲ)ではFの発話にBの割り込みが見られた。(Ⅴ)ではCの発話にB及びAが割り込み、それらはCの発話に全く重なっていた。そこで、これら(Ⅱ)及び(Ⅲ)と(Ⅴ)の例を用いて割り込みの時間関係を再検討してみよう。

図7は上記図5の(Ⅱ)(Ⅲ)及び(Ⅴ)のうち問題となる箇所を取り出して、割り込みにより声を重ねる部分を示したものである。

これらを見ると、1人の話者の発話に応答しあるいはこれに加わる他者の発話の時間関係は、次の3種類の型に分類することができる。

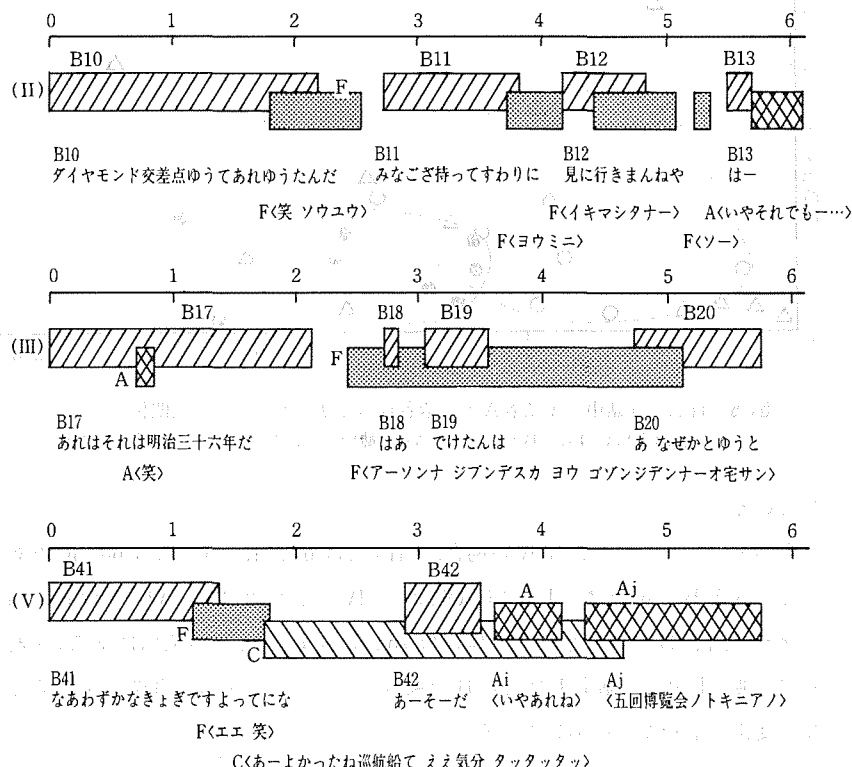


図7 他者の声の割り込み、重ね割り込みの実例

- ① 主となる発話者のポーズ内に納まるもの
- ② 割込み——発話の末尾に他者の発話が割込んで一部に音声の重なりを生ずるもの
- ③ 重ね割込み——発話内に他者が割込み、これがその発話内に完全に重なってしまうもの

上記①の例は、第3章でのべた単純な談話形式の中で見られ、また、図5の(I)(IV)(VI)等にも少なくない。

②の例は図7の(II)にいくつか見られる。さきのにべたように例えばBの発話にFの笑声等が重なり、またBの発話「みなごさ持ってすわりに」に続いて、Fが「ヨウ見ニ」と言う。これを受けて、Bが「見に行きまんねや」この「行きまんねや」の部分にFの「イキマシタナ」が重なる。Bの発話「はー」には、さらにAの発話が割込み、こうして話者交代が行われる。

③の重ね割込みの例は(III)及び(V)に見られる。(III)では、Bの「あれはそれは明治三十六年だ」に重ねてA「アー」が割込み、Fの「アーソナ時分デスカヨウゴゾンジデンナオ宅サン」と言うことばに重ねて、Bは、先行する自分のことばを自ら納得するように「はあ」と言い、その後で倒置法により主語「でけたんは」を割込ませる。(V)の例では、話者Cに対するBの応答が重ね割込みであり、つづいて、Aが「いやあれね」と話を切り出すが、これも同様の重ね割込みである。こうしてCの発話に割込んだAが交代して次の話者となる。

③のように他者の発話の中に完全に重ね割込みとなる例は、もとの話者FあるいはCの話の内容が、話題の進展に関わりのうすい独白的なものであり、これが無視され重ねて割込まれる理由であると思われる。にもかかわらずこれらの発話は、話者Bに影響を与え、例えば、Fの「ヨウゴゾンジデンナオ宅サン」はBの語りを活発にさせ、Cの「巡航船でよかったね、タッタッタ」は、Bが後に、巡航船が水のきれいな川を漕いで進んでいくさまを語るきっかけとなる。

ここでは図を省略したが(VI)にも割込み、重ね割込み等が見られ、ここからBの話題はさきの話者Aのことば「五回博覧会」へと移行するのである。つ

まり、複雑な割込みはいずれも活発な談話部分にあらわれ、そこに話者交代も生じ、新たな話の展開を見ることになる。

(d) 談話のイントネーションが示す発話段落

このような自由な談話の中では、さきにものべたように、必ずしも文法規則に合致してはいない。これらは、ポーズによりポツポツと切れた発話節の連続にすぎず、文としてのまとまりをなさない場合が少なくない。しかし、聞き手はそれを聞いて意味内容を十分理解し、これに対して違和感を持たない。これは発話文法が文字で表記されたことばを対象としてのべられる一般的な文法と異なる特徴を持っていることを示唆している。つまり、文法規則の上からはたとえ非文と言われるものの連続のようであっても発話文または発話段落ともいふべきまとまりがあって、それが聞き手の理解を助け、文法的には不備なものであっても許容されることが考えられる。さきに引用した談話の初めの部分(図5の話者Bの発話節1及び発話節2~13)と、終わりの部分(発話節48~53)とを例として、この問題を考えてみよう。

まず、(1)発話節1「そりゃもーそりゃそーだんがうちのきんじょのわかいときにも」(加線は普通に発話された場合のアクセント位置を示す)はさきのブレーキのない自転車の話からその時代を説明する次の話へと話題を転ずるきっかけとなる部分である。この部分は特にイントネーションの果す役割が大きいと考えられる。

(2)発話節2—13について不要な部分と挿入部分とを括弧でくくって示すと次のようであり、文としてのまとまりがない。ここを次に問題にしてみよう。

2 (よつ)

3 でんしゃがめえじ (4 あの, 5 さんじゅう, 6 ええひちねんか)

7 (あでけたんがさんじゅうろくねんやけど)

8 さんじゅうひちねんに

9 よつばしのこうさてんで

10 (ダイヤモンドこうさてんゆうてあれゆうたんだ)

11 みなござもってすわりに

12 みにいきまんねや13 はー

(3) 発話節 48—53 については、そのすこし前から示すことにする。これもまた非文と言わねばならない。

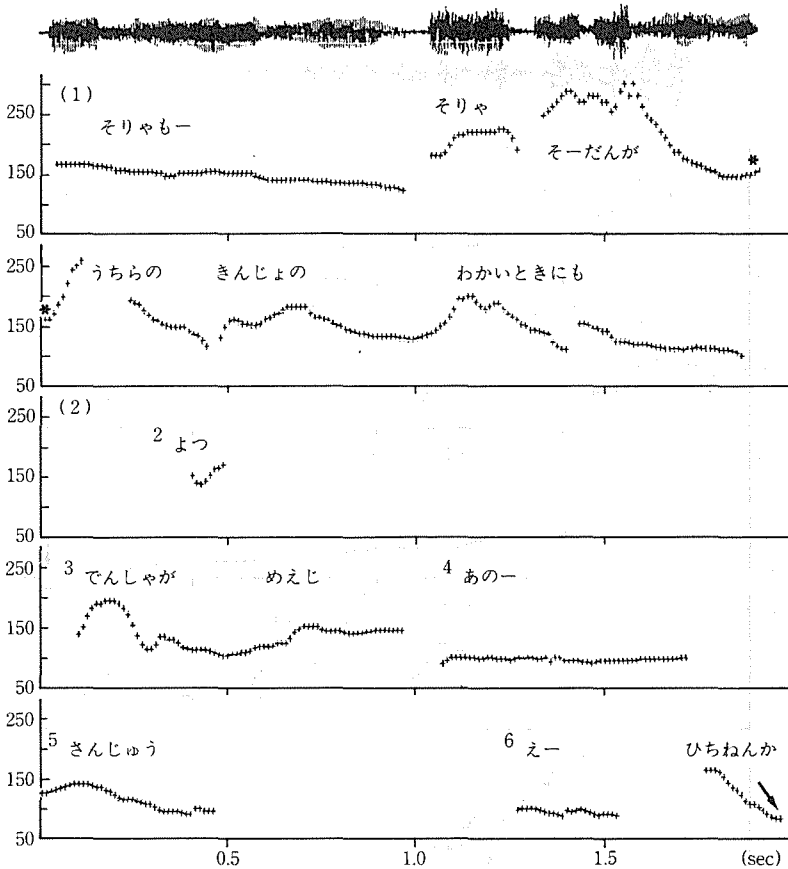
46 あのつのせのねき (近所) のな47 きよつばし (—いまこうかがあんなな—)48 それがまー ちょっつきり

図 8 自然な談話中における話者Bの声の高さの変化(1)(2)

49 しょんべんかいやふねのきれえなふねで

50 あかのもうせんひいて

51 かいでずーもーみずはきれえですわ

52 ひえなごばしのとこで

53 さんせんだ

図8と図9は、それぞれ上記の(1)(2)と(3)の、声の高さの変化の動態を基本周波数曲線により示したものである。

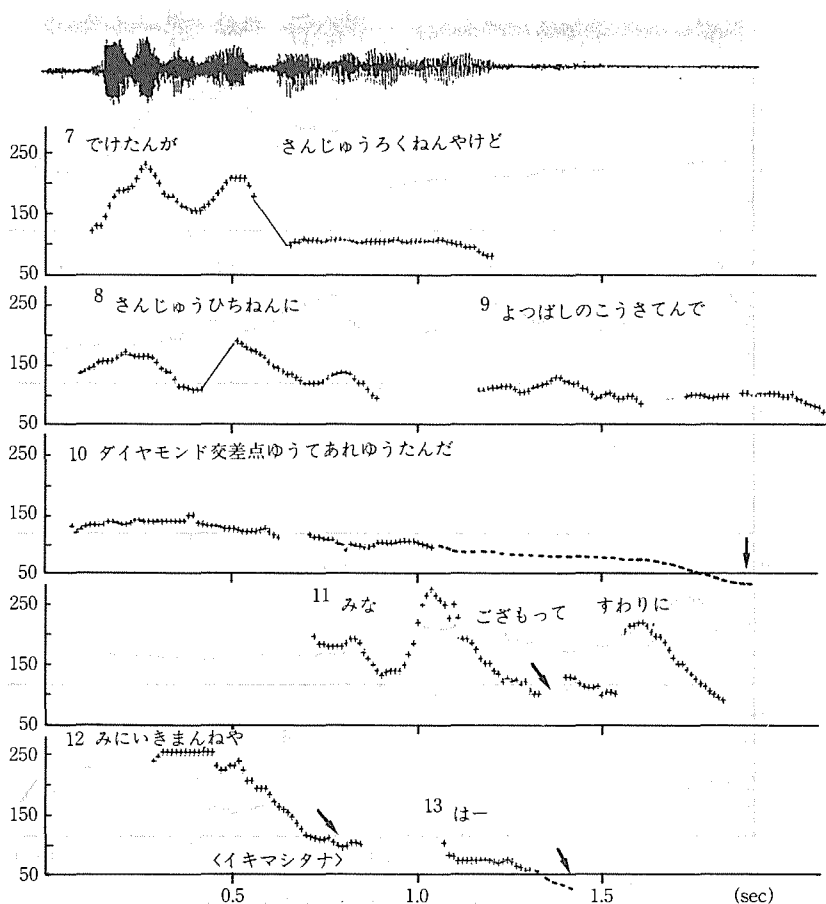


図8 つづき(2) 自然な談話中における話者Bの声の高さの変化

図8(1)の曲線を見ると、始めは低く平らに言い、次を強調して「そりゃもー そりゃ そーだんが」のように後の「そりゃ」を高く、「そーだん」の部分をさらに高く言い、その後、「が」の音調は下降している。この末尾は下り切ることなく、次の「うちら」の「う」へと連続している。アクセントのある部分以外には全体に次第に低くなり、末尾はさらに低く、この部分が音調の上で発話句とでも言うべきまとまりをなしている。このイントネーションは、ことばが何であれ次の話題に注意を集める効果的な役割を果すものと考えられる。

次の(2)では、2~5の発話節の末尾の高さはそれぞれ低くならず中途半端である。この不安定な音調により、この部分が連続体の一部であることを示している。6の「ひちねんか」の末尾は、高から低へと下降しており、音調の上では2~6が発話句をなしていることがわかる。その後にはFの〈エエ〉が挿入されている。これに続く部分においても、9「四つ橋の交差点で」の「で」が、発話句の末尾であることを示している。この後で話者Fが、〈エエ〉と応答している。これらの発話句は、文としてのまとまりを見ないまま先へ先へと連続していく。この間、強調がときに入り、その部分が高くなる。例えば「みなごもって」「みにいきまんねや」の加線部分がそれである。末尾の「まんねや」の後半で下降音調となり、これに続く「はー」でさらに低くなって、ここで発話文が完結する。

図9は(3)発話節49~53の部分の基本周波数曲線である。

「しょんべんかいやぶねの」の始めの部分は高く平らに続き、近畿アクセントの特徴を見せている。「きれえなふねで」さらに「あかのもうせんひいて」で幾分音調が下るがこの末尾には話者Aの応答が重なっている。「かいですー」は低く、「みずはき」の部分は高く強調され、一方「きれえですわ」の末尾は急に低くなる。

「ひえなごぼしのとこで」に続く、「さんせんた」のところで150 Hzから50 Hz近くまで音調が下がる。

しかもこの部分には高さの変化だけでなく次に示すように発話速度の変化も見られる。つまり、

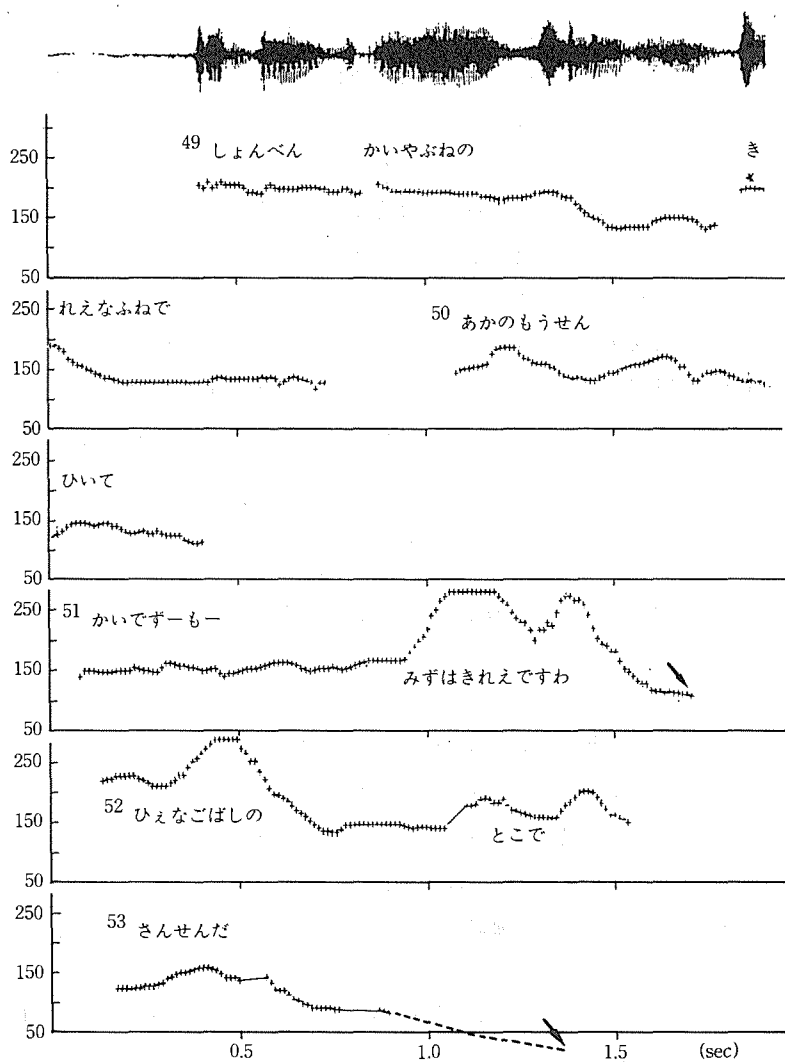


図 9 自然な談話中における話者Bの声の高さの変化(3)

発話	速度
「かいでずーもー水はきれーですわ」	9.302
	↓
「ひえなご橋のところで」	6.560
	↓
「三銭だ」	4.326

のように、高さの変化に応じて速度も次第に遅くなる。高さと速度の変化が相まってここが発話文の末尾であるとともに、発話の大段落としての区切りの位置であることを示している。

始めにのべたように、発話は吐く息で作られており、従って話は発話節とポーズ、発話節とポーズのように区切りながら進められる。その間に言い淀み、まちがいあるいは挿入があり、こうしてぶつ切れで進行する談話のことは必ずしも文としてのまとまりをつけてはいない。しかし、聞き手はそれを許容し、発話節のうち意味上の重要な情報を受取ってそれらを接続して理解するのであろう。

このとき、発話文あるいは発話段落としてのまとまりが、ポーズとイントネーション、また、発話速度等の音響的な変化によって示され、これが意味を理解する上で重要な手がかりを与えるものと考えられる。

2.3.5. 結び

一連の談話のうち、やや改まった発話部分と、自由な生き生きとした談話の部分とを材料として、発話とポーズの時間関係および区切りのイントネーションの特徴についてのべた。

なんらかの問いに答える場合に、発話が整ってくるまでの言い淀みや、無意味な発話では、発話節が短くなる傾向があった。発話とポーズの時間の割合は、この談話の主な話者の場合、平均値が約3:1であり、ニュースの場合と同様の値を示していた。しかし、場面によって変動が大きいことが明らかとなった。

話者の発話に対する聞き手の応答は、話者のポーズ内にあるもの、割込み、

重ね割込みとここで呼んだ3種の場合があり、重ね割込みは話の進展と関係の少ない言葉に重ねられる傾向があった。自由な談話の中では、話が盛り上がる時音声の重なりや割込みが盛んに行われ、これに続いて話者交代が行われる傾向が見られた。

談話は、発話とポーズの繰返しからなり、そのことばは必ずしも文として整っていない。しかし、基本周波数が示すイントネーションから見れば、発話句、発話文としてのまとまりが明瞭に観察される場合があり、そこには聞き手の応答が挿入される傾向があった。大きな発話段落においては、声の顕著な下げとともに、発話速度が遅くなる場合があり、これに続いて話題が大きく転換し、それが段落の区切りであることを示していた。

談話の文法においては、従来考えられている文の規則と異なり、非文が多いが、これに対する聞き手の許容度が高く、聞き手は話者の音声のポーズやイントネーションさらに身体的な動作を含めた全体から情報を受取り、総合して理解するものと考えられる。

2.4. 声の使い方・調音など

2.4.1. 言語のパロール的部分

談話はラング的な要素が中心になって成立していることについては疑いがない。何かちょっとこみ入ったことを説明したりするときにはどうしてもラングとしての言語にたよらざるを得ない。「きのう、会社に行った。」という文は、聞き手がそのようなものとして聞き取るかぎり、どのような速度で話しても、またどのような声で話してもそのまま伝わる。ラング的な部分が不変であれば、パロール的な部分がどのように変化しても、発話内容の論理的意味は変わらないのである。

イントネーションはラング的な部分とパロール的な部分の両方の性質をあわせ持っている。いまの例で言えば、「行った」の部分を疑問のイントネーションで言うか、肯定のイントネーションで言うかで論理的意味が変わってしまう。しかし、つまらなそうな「調子」で言っても、うれしそうな「調子」で言っても、論理的意味は同じである。我々は、ふだんこのようなときに「調子」ということばを使って了解しているつもりでいるが、この「調子」のなかにイントネーションが含まれていることは間違いない。

言語のパロール的な側面は談話全体とどのようにかかわっているのだろうか。論理的意味をになっていないとすれば、どのような機能があるのだろうか。筆者は、それは「気分」の表出だと考える。「気分」、「感情」というのは、とらえどころのないことばだが、談話の場がある感情に支配されることは我々がよく経験することである。談話の参加者の一人の感情がその場にいる全員に伝染することも普通にあることである。談話の目的が情報の交換でなく、ひと同士の接触にある場合、気分ないし感情を相手に伝えることのほうが、言語による情

報のやりとりよりも重要な意味をもつことがしばしばある。また、こうした感情的要素が談話の構成そのものに大きな影響を与えることもある。談話の参加者がお互いに気づまりな思いをしていれば、よけい話がはずまなくなるであろうし、その逆に全員がリラックスしていれば、自然に話をすることができ、その結果、さらに打ちとけるということも考えられる。

それでは談話の参加者の感情はどのような形で表現されるのであろうか、またどのようにして他の参加者に伝わるのであろうか。ここで、ちょっと突飛だが筆者には類似しているように思われる例をとりあげたい。筆者はときどき車の運転をすることがあるが、同時に同じ道を走っている運転者たちの感情を感じることがある。それは道路が渋滞しているときに限るのだが、そのようなときには運転者がイライラしているのがよくわかり、自分もその感情にひきこまれそうになる。ちょうど、談話に参加している人たちが共通の感情に支配されるのと同じである。このようなとき、運転者がイライラしているのは運転そのものから分るのである。イライラしているときは、ちょっとでも前があくと、猛然とダッシュしたり、唐突にハンドルを切って他の車の前に割り込んだりするものが特徴である。

これと同じことが談話についても言える。談話に参加している人たちの感情は、その人たちの使っている言語そのものによって表現されるのである。しかも、それは言語のラング的部分よりはパロール的部分によって表現されることが多い。もっと言えば、ラング的な部分によって伝達された論理的意味そのものが感情の表現を行うことはあまりない。（「私はうれしい。」「この話はつまらない」などと直接ことばで言うことはあまりない。）のに対し、話すスピード、イントネーションなどによって代表される言語のパロール的部分が、談話に参加している人の感情を代弁することがむしろ普通であるということである。

筆者の回りにいる人のなかには、次のような人がいる。Aさんは、興奮してくると早口になり、ややドモリがちになる。また、単語または音節を発音しかけてやめる。発話の最初の部分以外の音節の発音が不完全になる。一つの発話のなかでスピードが急に変化する。そうかと思うとひと息で発話を行おうとする。声が甲高くなることも特徴である。

Bさんは「そういうこともありますね」などと言うときに最後の部分を[arimannne]と発音する癖があるが、これは出るときと出ないときがある。緊張したときにむしろ出るようである。また、笑いながら話をするときに[m]の音が[m̥]（上歯と下唇で閉鎖を作る m 音）になるというのも我々のよく経験することである。

このように考えてくると、言語そのものによる話し手の感情の表現の仕方は次のように分類されることになる。

- 1) ラング的・・・話されている内容
- 2) パロール的
 - a) イントネーション
 - b) スピード（ポーズも含まれる）
 - c) 調音の仕方（「ドモる」ことも含む）
 - d) 声の強さ・高さ

ここで注目したいのは、最後にあげた「声の強さ・高さ」である。実は筆者は、このなかに「声の音色」も含めたいのである。「声の音色」とは聞きなれないことばだが、日本語には「猫なで声」「鼻を鳴らす」「ささやく」「声色」などの表現があり、それらは「声の音色」の一部を表していると考えられる。

ただし、「音色」は「高さ」「強さ」とともに声を形作っている要素であるが、後の二つと「音色」を分離するのが難しい場合があることも認めなければならない。たとえば「甲高い声」というのは発声器官の緊張をともなった声であり、そのために特有の音色を帯びるが、そのような声はピッチが高いことも特徴である。

また、音色を表す語彙が日本語に乏しく、客観的に音色を記述することが困難なことも問題である。

高さということばについても説明を加える必要がある。これはピッチのことであって、強さとは対立する概念である。また、一つの文のなかでのピッチの上がり下がり（イントネーション）のことを言っているのではない。そうではなくて、むしろひとつの発話全体のピッチと考えたほうが近い。これにイント

ネーションがかぶさって実際の発話中の声の音高ができるのである。

音声言語のパロールの部分にもスタイルというものがあるとすれば、もっともフォーマルなスタイルでは音色・高さ・強さのいずれもがあまり変化しないということになる。放送のニュースの読み上げはそのひとつの例だろう。

反対にフォーマルでないスタイルでは、これらは豊かなバラエティーを持つ。

以上、感情の表出ということばを用いてきたが、こうしたパロールの側面の場合、感情は意図して表現されるのではなく、期せずして外に出てしまうという面があることを見逃してはならない。この点でも、先ほどアナロジーとしてあげた渋滞路上の運転者の例と共通したところがある。もちろん、その一方で「間（これもパロールの部分に関係している）のとり方」などによって意図的に表出されることもあるのだが。

また、「声の使い方」や「調音の仕方」のバラエティーに個人差が大きいということも指摘しておかなければならない。同じことが人によって正反対の意味になるということも往々に起りそうである。

それでは、実際の談話のなかで音声言語のパロールの部分がどのような現れかたをしているかをみることにしたい。とりあげるのは内藤グループである。このグループはお互い知らない同士の男女4名（男性2人、女性2人はそれぞれ友人）からなるが、緊張して会話を始め、途中ですっかり打ちとけてくる様子が、録音からだけでもわかるのがおもしろい。どうして、このような雰囲気の変化を感じとれるのか、その理由をさぐりたい。

2.4.2. 声の使い方

声の使い方については、内藤グループのF2（原田さん）のものを集中的に調査した。まず、はじめにざっと聞いたところでは、声の出し方が東京の下町的であることと、声の表情が多彩であることが感じられた。

下町的な声の出し方というのは全く主観的な表現であるが、筆者の経験では東京の下町生まれの女性によく見られるようである。ただし、それが本当に声の使い方だけから生まれる印象なのか、むしろ、その人のもっている雰囲気か

ら来ているものなのかは今後はっきりさせる必要がある。また、もし下町的な声の使い方というものがあったとして、それがどのようなものであるか客観的に記述するべきであろう。

声の表情については、これも今のところ、やはり主観的であるが、もう少し突っこんだ分析が可能のように思える。また、この報告全体の主題である談話とも関係づけたいのである。

F2には最も普通に使う声があって、そのほかに、ほんの一時だけ使う声がある。前者を仮に地声と呼ぶことにするが後者には適当な呼び名がない。最初の30分間に次のような変種があらわれた。

- 1) 急に声を小さくする。
- 2) 喉を締めて、ガラガラというような振動音を発しつつ声を出す。感きわまった感じで言うときに多い。
- 3) 不満そうに言う。
- 4) きっぱりと言う。
- 5) バカにしたように言う。
- 6) とがめるように言う。
- 7) 司会に向って他の出演者に対するのとは違う調子で言う。

1), 2) はいいとしても, 3) ~6) は記述として客観性に乏しい。しかし, テープを聞いてみるとそのように聞こえることはたしかである。こうした印象が声の使い方によるのか, それともイントネーション, ポーズなどから来るのか, もうひとつははっきりしない。

7) は, 最初の30分間に2回聞かれた。1回は, 「談話行動の総合テキスト」(国語研, 1980)の98ページにもある「アンペラッテユーノワネ ヒジョーニハバキカセタンデスヨ」である。もう1回は, その10分ほどあとの「シャミセンポリワ アタシタチガイタトコロ」である。どちらも司会が発した質問に対して答えたという形をとっている。声の音色は明らかに, それまでの談話の参加者に対してしゃべっていたときのものとは異なる。声の大きさも違う(小さ

くなる)が、これは司会のほうを向いたために指向性の強いマイクがF2の声を捕らえることができなくなったせいだとも考えられる。

我々が複数で話をしているとき、話の相手を代えるために声を変えるということがある。ちょっと離れた相手とすぐ隣にいる相手に話すときとでは声が違う。見方を変えると、声の大きさが、誰を相手に話しているかを示す信号になるということがある。

この場合、司会者はすこし離れたところにいるので、普通ならばF2は声を大きくして、話しかけるところだが、そうはなっていない。それは前述したようにマイクのせいかも知れない。声の大きさになく、声の質を変えたということかも知れない。司会者に話しかるときはグループの他のメンバーに対してのときより活気のない声である。単に声が小さいだけでなく、そう聞こえるのだが、これも今後考察の対象にしたい。

ところで、今までとりあげなかった声の使い方として裏声がある。これは話している途中で声が裏返ったりするもので、意図的ではないと思われる。

話しているときの裏声は女性に多く見られる。テープを付けて公刊されたものの例では、国語研 1986 の中の衣笠トラ氏の発声がそうである。

内藤グループのF2も裏声をよく使う。ただ同じ談話のなかでも、よく出るときとそうでないときがあるようである。

また、ひとつの発話のなかでも裏声になりやすい部分とそうでない部分とがある。たとえば、

3.3.の211ページ、シオバラタスケッテ（裏声の部分をアンダーラインで示した。以下同じ。）

3.3.の212ページ、ナナマガリッテマシテネ

アクセントの関係で高く発音される拍で裏声になっている。また、一度裏声になるとそのまましばらく裏声になっていることがある。裏声になるのには声の高さが関係していることがほぼ確実なので裏声が多いときは声の高さが高いし、そうでないときは低いということが言えそうである。ただし、裏声は声の高さと完全に相関しているわけでもなさそうである。

前述したように内藤グループでは、最初のうちはかたい雰囲気だったのが、

時間の経過とともにメンバー同士が打ち解けていくのが録音からも聞きとれる。そこで、裏声の発話（発話のなかで一度でも裏声はいっているもの）からつぎの裏声の発話までの間にどれだけの発話をはさまっているかを数えて表にしたのが次の表である。発話という単位をどのように認定するかなどの問題はあるが、裏声の出現のしかたにムラがあることがこの表からも読みとれる。

まず、最初のうちは2発話に1回ぐらいの割合で裏声が出現する。そのあとで裏声あまり出てこなくなる区間がある。これは「資料編」3.3.の213ページ3行から217ページ25行あたりまでである。話題としては「ロシア人」「見せ物小屋」「同じところに何代も住んでいること」などであり、昔話が多い。

これ以後は、本書に文字化が収録されていないので、参考までに記すが、つぎに裏声が少なくなるのは、すこしあとの「川向こうの土地が低いこと」「牛島神社」である。この区間の後半は、F2にとって「川向こう」にある牛島神社の話であり、F2は受け身の立場で会話をおこなっている。そのつぎは「隅田川が汚れていたこと」を話題にしている部分である。

このあとも談話は続くが、裏声を使うことが少ない。

大きく見ると裏声が談話のはじめの部分では多く使われ、波はあるが時間の経過とともに使用頻度が減ってくるといえそうである。内藤グループの談話が、少なくとも最初の30分は全然ダレないで和やかに進んでいることを考えると、F2に限って言えば、裏声の使用は話に熱中して興奮していることよりも初対面の人と話すときの緊張と関係が深いといえそうである。

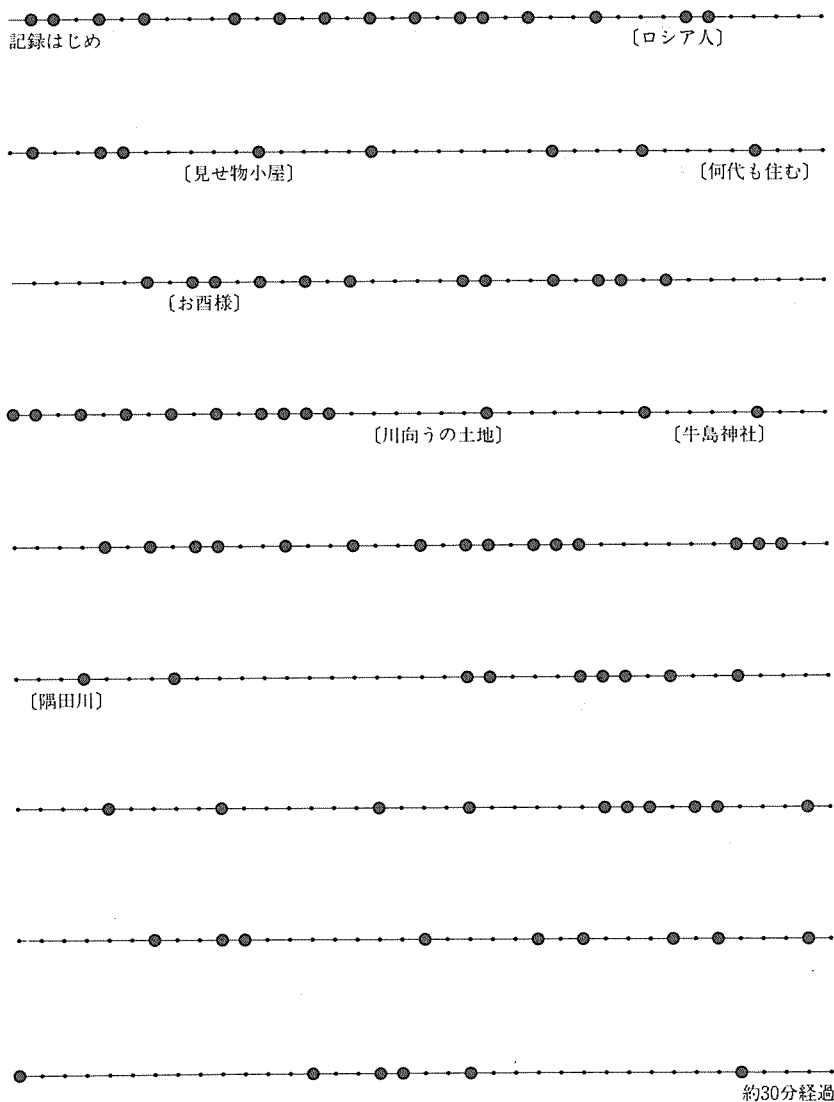
2.4.3. 調音上の特色

散発的に現れる臨時的な調音についてもふれておこう。

F1はF2に比べるとずっと丁寧なことばづかいをするが、調音からみると母音を鼻母音化させる傾向が著しい。3.3.の209ページ「ムカシワコマガタナシテモーシマストネ」の「モーシマストネ」が[moː̃ĩmasutone]のような発音になる。また、209ページの「ナリマスネー」の「マスネー」は実際には[mann̥neː]のような発音である。「資料編」3.3.の採録部分よりあとになるが、

裏声のまじった発話とそうでない発話

- 裏声発話
- ・ 裏声のまじっていない発話



この約 15 分後にも「ジョーチャーガアラワレテマスネ」の最後の部分を [mann_one] のように発音している。これが実際の談話の進行とどのような関係があるのかは不明である。

また、これは参加者全員について言えることだが、談話のあとの方に行けば行くほど調音が丁寧でなくなる傾向が見られた。ただ、同じ文ないし文節がたびたび出てくるわけではないので厳密な意味での比較はできず、これも印象的なものととどまる。あるいは発話のスピードとも関係してくる問題かもしれない。

2.4.4. 終わりに

ところで最初に録音を聞いたときの印象（談話の進行とともに全員が打ち解けてくる）がなぜ生じたのかは結局よくわからなかった。筆者は声の質の問題が大きいと思うが、客観的に声の質を記述する方法が問題である。

今後の課題としたい。

2.5. コミュニケーション ネットワーク

2.5.1. はじめに

コミュニケーションネットワークという概念は、心理学や社会学などの領域で古くから研究されているもので、研究の範囲は理論面からみても、実用面からみてもたいへん広いものである。また、小集団についての実験室での研究、組織（学校や企業など）のコミュニケーション研究といった具合に、扱われる集団の大きさや質、あるいは研究の目的などにさまざまな違いがみられる。一方、この語は電話網、郵便網、道路網などの表現の一般的な用語として用いられることもある。最近では電子計算機の大規模なオンライン化に伴って、計算機間の接続網についての用語として使われることもある。このように、コミュニケーションネットワークという語は多くの分野で使われている用語であり、その指し示す内容もさまざまである。しかし、本稿で扱おうとするコミュニケーションネットワークは、社会心理学などで対象とされるもののごく限られた意味でのネットワークであり、むしろコミュニケーション過程の分析と言ったほうが適切かも知れないと思われる性質のものである。具体的にいうと、5人の発話者によって構成された座談場面において、各成員間で行われるメッセージのやりとりを計量的に考察することである。このことにより、談話行動の（総合的）研究に何らかの手助けをすることがこの研究の主たる目的である。つまりコミュニケーションネットワークの分析は、談話行動の研究において、言語行動（Verbal communication）の分析、非言語行動（Nonverbal communication）の分析などと相補的な関係にあるものといえるのではなかろうか。このような考えに基づいての一稿である。

2.5.2. コミュニケーションネットワーク研究の概観

座談場面におけるコミュニケーションネットワークについて述べる前に、コミュニケーションネットワークについて今までに行われてきた研究を概観してみよう。社会心理学の領域では、1950年代、60年代に、コミュニケーションネットワークの実験的研究が盛んに行われた。その中で、この種の研究の先駆けとなったバベラス (Bavelas, A. 1950), リービット (Leavitt, H. J. 1951) らによる研究を見てみよう。

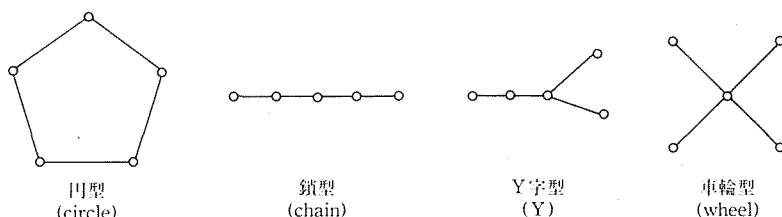


図 1 コミュニケーション・ネットワークの型

これは、5人の被験者に与えられた種々の問題に対して、問題解決の能率性や各被験者が集団から受ける満足の程度などと、コミュニケーションネットワークの型(図1.)との関係を調べたものである。一例をあげれば、中央集中度の高い車輪型のネットワークは、決まり切った仕事に適し、円型のような拡散型のネットワークは、順応性や革新性を必要とする仕事によく適しているといったような結論が得られている。

言語学や国語学の領域では、コミュニケーションネットワークに言及した研究はそう多くは見当たらない。社会言語学に属する研究に若干見られる程度であろうか。南不二男(1974)では、国立国語研究所が松江市で行った調査データをもとに、言語行動の型とコミュニケーションネットワークの関係について述べている。また、林四郎(1978)では「人の死をめぐる言語行動」と題する論文の中で、コミュニケーションネットワークの問題を考察している。ともに、小さな社会の中で、その社会の構成要員の間にどのようなネットワーク構造が現れるかを問題にしたものである。

2.5.3. 座談場面におけるコミュニケーションネットワーク

以下で実際の資料に基づいてコミュニケーションネットワークの問題を考えてみることにしよう。考察の対象としたのは、構成メンバー5人から成る座談収録資料である。構成メンバーは東京下町に生まれ、そこで育った男女各2名(全員明治生まれ)と司会者(戦後生まれの国語研職員)である。男性同士、女性同士は共に古くからの友人であるが、男性グループと女性グループは初対面であり、司会者にとっても他の4人は初対面であった。座談は司会者が口火を切るにより始められたが、4人の下町出身者が自主的に話し合うことを優先とし、司会者は出来るだけ司会をしないという方針で行った。

このようにして行われた座談を、3本のマイクロフォンと1台のVTRで録画・録音して談話資料を得た訳であるが、その際の5人のメンバーおよび収録機材などの配置は2.1.の図(66ページ)の通りであった。

座談が始まって3番目の話題から7番目までの各場面については、「談話行動の総合テキスト」という資料が作成されている。既に他章でも述べられていることと思うが、このテキストは言語形式の文字化資料に非言語的行動などの付加情報を添えたものである(テキストの実際の記載例については、本書「資料編3.4.」を参照されたい)。

総合テキストに記載された話題の内容、合計の所要時間は次の通りである。

話題番号 3	町名	所要時間	1 分 58 秒
〃 4	町名ゆかりの名文句		1 分 46 秒
〃 5	東本願寺周辺		2 分 57 秒
〃 6	居住地の川		1 分 27 秒
〃 7	御西様への道		1 分 52 秒
合計所要時間			10 分

談話には多くの話題が含まれている。また、話題の変化とともに、談話場面が変化すると考えることが出来る。そこでこれからは、ある話題を含む場面を話題番号に対応させて示すことにする。つまり、場面5とは話題番号5を含む

場面ということにする。ところで、座談開始から場面3までは、カメラ設定の都合でズーミングやパンニングを繰り返しているなど、安定した映像が残されていないので、本稿では場面4から場面7まで（所要時間8分2秒）を分析の対象とすることにした。

座談構成メンバーの発話回数及び受信回数をマトリックスに示してみよう。行（縦）は発信者を、列（横）は受信者を表している。ただし、この表は、ある発信者がどの受信者に向けてメッセージを送ったかを集計したのではなく、ある発信者の発話を誰が（あるいはどの人たちが）受信したかという観点で観察し集計したものである。ネットワークにとって、そのベクトルの要素は言語形式の意味内容、また、視線、体の向きなどの非言語的行動によりある程度は推察可能である。しかし、それが事実であるという保証は得られそうにない。あるいは、発話者自身の中でも確固たるものではないかも知れない。そこで、今回の作業では、より客観的なデータが得られ、また、観察が容易な後者の観点到に立って集計を行った訳である。このようにして誰が受信したかを判断する際に決め手となったものが言語形式か非言語行動かということで割合をみると次のようになった。ちなみに、ここで示した非言語行動は、ほとんどが“うなずき”であった。個人によって発話に対する反応の仕方がかなり違うことがわかる。

	M 1	M 2	F 1	F 2	全体
言語形式	36%	1%	18%	36%	22%
非言語行動	4%	58%	31%	30%	30%
言語形式と非言語行動の共起	59%	33%	46%	32%	43%
笑い・その他	1%	8%	5%	2%	5%

表1. は、先に示した4場面すべてを集計したものである。M1, M2は男性, F1, F2は女性, Cは司会者の略号である。集団とあるのは、ある発信者のメッセージを複数の人間が受信したことを表している。つまり、「M1・M2」は男性2人が受信し、「F1・F2」は女性2人が受信したことを示している。ま

表 1. 全場面（場面 4～場面 7）における発信・受信の関係

		受 信 者								
		F 2	M 1	F 1	M 2	C	集 団			合 計
							M1M2	F1F2	その他	
発 信 者	F 2		27	11	12	7	20		14	91(44.0)
	M 1	10		13	2	8		23	4	60(29.0)
	F 1	9	13		4	4	8		6	44(21.3)
	M 2	3	-	1		3		1	-	8(3.9)
	C	1	1	-	-	-	-	1	1	4(1.9)
	合計	23	41	25	18	22	28	25	25	207(100.0)

た、「その他」は「M1・M2」「F1・F2」以外または全員が受信したことを示している。マトリックスは発信数の多い順に並べてみた。なお、表中（ ）内の小数点のついた数値は全発信数に対するパーセントを示している（表 2. 以降も同様である）。

フランスの心理学者、フラマン（Flament, C. 1963）は、表 1. と同じようにして作った発信・受信のマトリックスについて、バイルズの実験結果を引用して次のように述べている。

発信者としての順位 i の被験者から発信者としての順位 j の

被験者に向けて発信されるコミュニケーションの数を $n(i, j)$

とすると、 $i > j$ ならば $n(i, j) > n(j, i)$ となる傾向が強い。

これは、2 人の被験者同士の間についてみると、発信総数の少ないほうの被験者は、その総数の多い相手から受信する以上に多くのメッセージをその相手に向かって送信しているということであるが、我々の収録した座談場面ではこの傾向は現れていない。話し合いによって何かを解決していこうとする場合によく見いだされる構造とのことであるが、雑談に近い話し合いであるこの座談場面とは構造が違うのであろう。

次に、集団が受信したメッセージをそれぞれの話者に振り分けて、表を作り直してみる（Cについては省略する）。つまり、集団「M1・M2」の場合、その回数をそれぞれM1とM2加えるという手続きをする（他の集団についても同様の処理をする）と表2. のようになる。

表1. から、F2, M1, F1の発信数の比は、おおよそ9:6:4となっているが、これらに比べてM2の発信数は極めて少ないことがわかる。司会者の発信が少ないのは前に述べた理由、つまり発言を控えたことによる。

表2. 全場面における受信数

		受 信 者				
		F 2	M 1	F 1	M 2	合 計
発 信 者	F 2		55[67.9]	25[37.9]	43[65.2]	123(46.2)
	M 1	34[64.2]		39[59.1]	5[7.6]	78(29.3)
	F 1	15[28.3]	26[32.1]		18[27.3]	59(22.2)
	M 2	4[7.5]	-	2[3.0]		6(2.3)
	合計	53(19.9)	81(30.5)	66(24.8)	66(24.8)	266(100.0)

注 [] は各受信者の合計受信数に対するパーセントを表す。

表2. を見ると、受信数の一番多いのはM1であり、一番発信数の多かったF2の受信数は4人中最少である。このグループの場合、発信数と受信数の間に特徴的な関係をみいだすことは出来ない。

ここで、受信数を発信数で単純に割った値を計算してみよう。仮に、「受信傾向指数」とでも名付けることにする。この指数は、各人ごとの受信数と発信数の比率を示す訳で、この値が大きければ受信傾向大、小さければ発信傾向大と一応解釈してもよいであろう。M1の受信傾向指数は $81/60 = 1.35$ となる。同様にして、M2, F1, F2のそれは、8.25, 1.50, 0.58となる。従って、F2はよく発言するが他人の話はあまり聞かない「発信傾向の強い人」、M2はほと

んど発言しないが人の話はよく聞く「受信傾向の強い人」ということになるだろう。

M1, F1は、それらの中間的なところに位置している。表2. はまた、各人が誰の発言をよく受信しているかといった情報も含んでいる。F2の発話はM1, M2にはよく受信されているのであるが、F1にはさほどでもない。また、M1の発話はF1, F2によく受信され、M2にはあまり受信されていない。つまり、男性は女性の発話をよく受けとめ、女性は男性の発話をよく受けとめているのである。このことは、各個人の中でもいえる傾向である。

この座談場面では、初対面の男性グループと女性グループは、非常によく打ち解けて、旧来の友であるかのように和やかに会話を楽しんでいるように見える。しかし、初対面の人の発話の方をよりよく受信し、友人の発話を控えめに受けとっていることが、数字の上にはっきりと現れている。これには、話題に対する知識の多寡ということも関係しようが、親疎関係からくる待遇表現の現れと見ることもできよう。

表3. は、東京・下町グループと同じようにして行った大阪・船場における座談の一部についての発信・受信のマトリックスである。参加者は船場のはえぬ

表3. 発信・受信の関係（大阪・船場）

		受 信 者						
		M2	C	M1	M3	F	集团	合 計
発 信 者	M2		62	8	4	2	3	79(40.1)
	C	49		15	1	1	6	72(36.5)
	M1	9	21		1	-	1	32(16.2)
	M3	3	3	1		-	-	7(3.6)
者	F	4	1	1	-		1	7(3.6)
	合計	65	87	25	6	3	11	197(100.0)

きの老人で、男性3名、女性1名から成り、司会者は国語研の職員がたった。偶然、東京、大阪とも司会者は名古屋出身者であったが、大阪担当のそのほうが若干年配であった。司会者と座談構成メンバーとは初対面であり、メンバーはM3の友人2人とM3の妻という関係であった。話題は、「ことばのこと」、「米相場」、「電灯」、「ガス灯」、「ランプそうじ」などで、所要時間6分8秒であった（本書「資料編3. 2.」に掲載したものの後半部分である）。座談進行上、東京と違うのは、司会者が積極的に座談に加わっている点である。その結果、発話量が極端に多くなっている。座談はM2とCが中心になって進み、M1が時々参加する程度で、M3とFはもっぱら聞き役に終始していた。発信数は東京、大阪とも大差ないが、ネットワークの構造はかなり違っている。しかし、こちらのマトリックスにも、先のフラマンのいう傾向は現れていない。

コミュニケーションネットワークは座談の始めから終わりまで、同じような状態で続くとは限らない。むしろ時々刻々変化していくと考えられる。その様子を見るため、場面ごとに発信・受信のマトリックスを作ってみた。表4. から表7. まだがそれである。ただし、表4. から表6. では、司会者の発話が無かったので表からは除いてある。

表4. 場面4（町名ゆかりの名文句）

所要時間：1分46秒

		受 信 者							
		M 1	M 2	F 1	F 2	集 団			合 計
						M1M2	F1F2	その他	
発 信 者	M 1		1	9	3		7	2	22(46.8)
	M 2	-		1	1		-	-	2(4.3)
	F 1	6	-		-	1		3	10(21.3)
	F 2	5	1	2		2		3	13(27.7)
	合計	11	2	12	4	3	7	8	47(100.0)

所要時間：2 分 57 秒

		受 信 者							
		M 1	M 2	F 1	F 2	集 団			合 計
						M1M2	F1F2	その他	
発 信 者	M 1		1	-	3		4	1	9(14.8)
	M 2	-		-	2		-	-	2(3.3)
	F 1	2	1		7	2		2	14(23.0)
	F 2	10	3	6		10		7	36(59.0)
	合計	12	5	6	12	12	4	10	61(100.0)

所要時間：1 分 27 秒

		受 信 者							
		M 1	M 2	F 1	F 2	集 団			合 計
						M1M2	F1F2	その他	
発 信 者	M 1		-	3	1		11	-	15(34.1)
	M 2	-		-	-		-	-	0(0.0)
	F 1	5	1		1	3		1	11(25.0)
	F 2	8	5	1		2		2	18(40.9)
	合計	13	6	4	2	5	11	3	44(100.0)

場面 5. を見てみよう(表 5.)。今度は場面 4. とは逆に、F1, F2 の居住地近辺が話題にのぼっている。場面 4. で発話量の多かった M1 は、ここでは聞き役に回っている。話しの中心は F2 で、約 6 割もの発話量を占めている。この場面では、F1 と F2 の間のチャンネルがかなり開かれている(話のやりとりが盛んに行われている)。

場面 6. では墨田川とその支流が話題となり、そこで「しじみ」が取れた話が登場する(表 6.)。M にも F にも共通の話題であり、M1 と F2 の発話量が拮抗している。M2 は腕を組んで、ただ聞いているだけであった。

表 7. 場面 7 (御酉様への道)

所要時間：1 分 52 秒

		受信者							
		M1	M2	F1	F2	C	集団		
							M1M2	F1F2	その他
発信者	M1		-	1	3	8		1	1
	M2	-		-	-	3		1	-
	F1	-	2		1	4	2		-
	F2	4	3	2		7	6		2
	C	1	-	-	1		-	1	1
	合計	5	5	3	5	22	8	3	4
		合計							
		55(100.0)							

場面 7. は、F1, F2 の氏神様である鳥越神社への道が、昔はぬかるみでひどかったということが話題となっている(表 7.)。再び、F2 の発話量が増えているのはこのためである。ここで、「アンペラ」という言葉について C が全員に向かって質問したのをきっかけに、C への発話が急激に多くなっている。今までの場面とは全く違ったネットワークの構造である。

座談場面においては、コミュニケーションネットワークの型は「総チャンネル型」(図2.)が基本となるように思われる。しかし、以上で見てきたように、成員間のチャンネルはベクトルの(方向性をもつ)なものであり、送り出したり受け取ったりする情報の量も時々刻々と変化している。これらを規定する種々の要

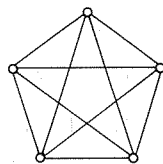


図2 総チャンネル型

因としては、親疎関係、ソシオメトリックな関係(好き嫌い)、話題に対する知識の多寡、座る位置、性、年齢、社会的な地位など多くのものが考えられよう。これらの要因とコミュニケーションネットワークの関係、さらには言語形式との関係などの分析がこれからの課題として残っている。また、今回は取り上げなかったが、発話時間との関係も見えていく必要がある。

2.5.4. おわりに

冒頭で、コミュニケーションネットワークの分析は言語行動や非言語行動の分析などと相補的な関係にあると述べた。しかし、コミュニケーションネットワークの分析は、座談場面一つを取ってみても、まだまだ多くの研究の積み重ねが必要である。ましてや、談話行動のコミュニケーションネットワーク研究となればなおさらである。本稿はやっとその入口に立ちかかったばかりの段階のものである。他章でも述べられたことと思うが、種々の社会言語学的属性(親疎、性、年齢、出身地など)や座談構成人数などを考慮した多くの座談場面に関する資料が手元にある(本研究が「談話行動の実験社会言語学的研究」と名付けられた所以はここにある)。ネットワーク構造解明の糸口とすべく、これらの資料の分析を進めていかねばならない。

談話行動の研究にあって、コミュニケーションネットワークの分析は種々の事情により長い間中断していた。我々が研究を開始した当初から、それ程分析は進んでいない。従ってこの種の問題について無知な点が多々ある。多くの御教示、御助言をいただければ幸いである。このような状態で敢えて拙稿を記した目的の一部はそこにある。

2.6. 身振り・動作の現れ方

2.6.1. はじめに

談話行動は言語・非言語の両面の総合行動として捉える必要があるが、ここでは非言語行動の側面について考えることとする。

非言語的コミュニケーションの手段にはいろいろのものがみられる。これには、身体接触、対人的空間・距離、向き、姿勢、ジェスチュア、うなずき、顔の表情、眼の動き、外見・服装、会話の非言語的側面（音調、声質、沈黙など）などさまざまな要素が指摘されている（Knapp,1972;Argyle,1973; 木戸,1976; 南,1977 など）。

ここでは、以下で述べる資料をもとに、姿勢・視線・身振り・動作の面を中心に、それらが実際の談話行動の中でどのように出現したかを計量的にみていくことにする。

2.6.2. 分析の対象とした資料

この稿では、ことばと身振りとを対照的に記載した『談話行動の総合テキスト——東京・下町・資料(1)』（国立国語研究所 1980）を基本資料とし、それに一部の修正を加えて、上記の観点からの分析を行った。この資料の具体的な内容は以下のとおりである。なお、このテキストの実際の記述形式については、「資料編」の3.4.を参照されたい。

（1）座談メンバー

この座談に参加したのは、東京の下町で生まれ育った男女各2名であり、こ

れに司会者(C)として国立国語研究所の研究員が加わっている。司会者を除く他の4名のメンバーはすべて明治40年前後の生まれである。また、メンバー間の関係は、男性同士(M1とM2)は友人、また女性同士(F1とF2)も友人であるが、男性ペアと女性ペアとの間は初対面の関係である。

なお、本資料での身振り・動作の記述には司会者のそれは含まれていない。これは、撮影当時ビデオカメラが1台しか使用できなかったことなど機器・技術上の制約から、司会者を除いた他の4名のメンバーが同一画面に収まるようにしたためである。

座談メンバーの一部の行動観察記録を欠くということは、談話行動の分析を考える上で問題になる面もないではない。しかし、さいわい、本稿での分析対象部分においては、司会者を除く他の4名のメンバー間のやりとりがほとんどを占めていたので、さほど大きな問題とはなっていないと考えられる。

(2) 談話の流れ(話題)

資料としたテキストには、座談開始後約5分経過した辺りから始まる、およそ10分間の談話行動が記載されている。その間の談話の流れを話題の展開としてみれば下記の5つの場面に分けられる。

話題名(場面)	所要時間
③ 町名	1分58秒
④ 町名ゆかりの名文句	1分46秒
⑤ 東本願寺	2分57秒
⑥ 居住地の川	1分27秒
⑦ 御酉様への道	1分52秒

ただし、上記の話題場面のうち、場面③「町名」においては、座談参加メンバーをそれぞれアップで撮るなどカメラ移動が行われたため、その間のひとりひとりの身振り・動作の観察記録が出来なかった部分が少なくない。したがって、本稿では、場面③を除いた残りの4場面、8分2秒間の言語行動を分析対象とした。

(3) 身振りの記録

身振り・動作の『総合テキスト』での記述の基準は、原則として、以下のようにした。

1)座談メンバーが行った身振り・動作は、たとえそれがコミュニケーションの意図を含まないと思われるような種類のものであっても、観察可能な限りテキストにはできるだけ広く記載することにした。

2)顔の表情や視線の方向・移動など微妙な動作の中には、ビデオ収録上また画像精度などの面から、はっきりした形では観察しえない動きが少なくはない。それらのうちには、画面上の他者の動作または音声資料と突き合わせることで、動作の推測が可能なものもかなりの程度みられるが、テキストには明確に観察しえた身振り・動作だけを記述対象とした。

3)「腕組み」しながら「うなずく」といったように、身体部位の異なる二つ以上の身振り・動作が継続的または同時に生じることがある。この場合は、それぞれの部位ごとの動作を各1単位として記述した。ただし、テキストには、それらが同時的行動であることを明記するための記号「+」を付加して示した。

4)指折り数えるような行動では、これ全体がひとまとまりの単位の行動とみなすことができる。しかし、別の観点からみると、1指ずつ順に折っていく行動の一つ一つもまたそれぞれ1単位の行動とみることにもできる。そこでテキストでは、大小2種類の単位の行動をともに示すこととした。

2.6.3. 身振りの種類

身振りや動作の分類の仕方については、従来からいろいろのものがみられる(Ekman & Friesen, 1969; Morris, 1977 など)が、本稿では、先に述べたような資料上の制約も考慮して、第1表のような便宜的な区分を取ることにした。

それぞれの一般的な意味と本資料に現れた具体的な動作形象の例は以下のとおりである。ただし、ここで示す動作形象とは、身体部位とそれが形作る姿のことであって、個々の形象の指す具体的な意味内容には立ち入らないこととす

第1表 個人別の身振り出現数

		身 振 り							総計	%
		偶発	視線	前傾	後傾	表出	指示	模倣		
メ ン バ ー	M1	15	12	81	16	35	15	7	181	24.8
	M2	1	3	71	6	5	-	-	86	11.8
	F1	7	40	84	8	24	4	4	171	23.5
	F2	28	48	113	19	53	20	10	291	39.9
総 計		51	103	349	49	117	39	21	729	
%		7.0	14.1	47.9	6.7	16.0	5.3	2.9		

る。したがって、同じ名称でまとめた動作であっても、その意味・機能が異なるものもみられる。なお、本稿で行った身振りの種別と「資料編」の3.4.での分類とは内容において若干の差異があることを断っておく。

(1) 偶発的・生理的動作

談話中に姿勢を変えたり、移動したり、また咳やあくびをするなど生理的・機械的な動作である。この動作は、基本的には、コミュニケーション意図とは無縁のものではあるが、つぎのような場合には一定の伝達機能をもつことが指摘されている。

その一つは、元来偶発的な動作であるものでも、発信者がそれを意図的に使用することで一定のメッセージを伝達しうる、という点である。例えば、意識的に「あくび」をして見せることで「お前の話はきわめて退屈だ」ということを相手に示すような場合である。

もう一つは、無意図的に行われた偶発的動作であっても、その動作の観察者からは動作者の心理的また社会的状態などさまざまな事柄が読み取られてしまう、といったことがある。例えば、先の「あくび」で言えば「不作法なやつ」

だと思われるなどである。

本資料で観察された偶発的動作は、18種類、延べ51例である。そのうち頻度2以上の動作を上げるとつぎのようになる。

上体乗り出し……14	上体起こし……9	上体戻し……5
上体後引き……4	両手組み……3	体向き変え……3
上体突き出し……2	上体斜傾……2	

これらの他に「足の組み替え」「顔横向け」「肘つき」「口元撫で」その他の動作が見られるが、偶発的動作の大部分は、姿勢、特に上体の移動に関するものとなっている。したがって、「偶発的動作」と呼ぶものは「姿勢」と読み替えて考えるほうがよいともいえよう。

ちなみに、このデータにおいて上体の移動に関するものに集中したのは、資料の採り方の問題が大きく関係しているといえる。すなわち、われわれのデータは、ビデオ採録の都合上、座談のメンバーの前に机を置き、椅子に掛けて話をしてもらうようにしたからである。

なお、この他に「ジュースを飲む」などの動作も見られている。この種の動作の中にも意味を読み取ることが出来ないものもあろうが、現時点ではこれらは談話と直接関係のない動作と考え分析の対象外とした。ただし、今後、分析方法をより進展させることにより、この種の動作の意味を正確に扱えるようになると思われる。

(2) 視線移動

話し手また聞き手が、他者あるいは物・空間に対して視線を向けたり、そこから視線を移動させる動作。ただし、視線だけの移動というのは少なく、通常は顔の動きを伴う。その意味で、前項で挙げた「偶発的動作」の中の「顔横向け」と重なるところが大きい、その動作の極端に大きいもの以外をここに含めることとした。

なお、これは Schefflen 流にみると、視線の位置・移動の問題は上記(1)の姿勢(posture)に含めて考えられる問題であるともいえる。これについては後

に検討することにした。

(3) 首または頭部の前傾動作

発話中また相手の発話に対して首を前(下)に振る動作、つまり、一般に「うなずき」と呼ばれるような動作。これには、「ハーハー」と言いながら首を小刻みに数回振るように、同一動作が複数回反復されることも少なくない。この資料では、時間間隔の短い連続的動作とみなされる場合は1動作とし、そうでない場合はそれぞれの動作を各1単位としてカウントすることにした。ただし、その境目の判定には多少恣意的な面がみられる。

(4) 首または頭部の後傾動作

発話中また相手の発話に対して首を後に倒す(引く)動作。上と同じような場面で出現することが多いが、多少違った機能をもつこともあるので、ここでは一応別扱いにしておいた。

(5) 表出的動作

感情や態度を伝達する動作。「微笑」「冷笑」などの顔の表情や「肩をすくめる」ような動作など。また、話のポイントを強調して無意識のうちに行われる手や首などによる動作もここに含まれる。後者は、Moris あるいは Ekman などがいう「強調動作(バトン)」や「リズム動作」に当たるものである。

なお、(3)～(4)の「うなずき」、あるいは(2)の「視線向け」などの一部もある意味では「表出的動作」ともみられるが、頻度その他の理由から別扱いにした。

本資料で観察された表出的動作は、27種類、延べ117例である。そのうち頻度4以上の動作(形象)を上げるとつぎのようになる。

微笑……20	手上げ……13	首(頭)横振り……12
机叩き……10	手縦振り……8	手先振り……7
首(顔)突き出し……7	手前出し……6	手横振り……5

首かしげ……5 手振り下げ……4

また、「微笑」を除く表出的動作を機能的な面からみると、その主なものはつぎのとおりである。

リズム的動作……62 強調的動作……10

打ち消し・否定を表す動作……9

なお、「机叩き」や「手横振り」のように同一動作が反復して1動作となるような動作であっても、全体で1単位とみなした。

(6) 指示(例示)的動作

方向や数量などを具体的に指し示す動作。例えば、「こんな大きな」と言いながら手で大きさを示すように、ことばに随伴し、それを補う形で現れることが多いが、黙って方向を指差すだけの動作として出現することもある。ちなみに、この動作で使用される身体部位は手または腕が大部分を占めるが、ときには上体や首(顔)など他の部位で代用されることもある。

本資料で観察された指示的動作は、19種類、延べ39例である。そのうち頻度2以上の動作(形象)を上げるとつぎのようになる。

手横振り……6 手縦振り……4 手引き……3
 手差し……3 手首くねらし……3 手区切り……3
 空書(宙で文字を描く動作)……3 指折り数え上げ……2
 指差し……2

なお、「第1に……」と言いながら「第1指を折り」、「次に……」と「第2指を折り」曲げるような動作(「指折り数え上げ」)では、それぞれを1動作とみなすことができるが、本稿ではそれが同一発話内にあって連続して現れたときは全体を1単位の動作として数えることにした。これはつぎの「模倣・象徴的動作」の場合も同様である。

(7) 模倣(模写)的動作／象徴的動作

模倣的・模写的動作というのは、「指で輪を作った形象」で「お金」を表したり、「手綱を取る格好」で「馬」を示すなど、物の全体または部分をまねることでその物を示すような動作のことを指す。また、象徴的動作は、「角を出すような格好」で「怒り」を表すなど、抽象的な事象を表す動作である。本来、この両者の動作は別項とすべきであるが、その境界の認定困難なものが多いことや頻度の面から、便宜的にここに含めたことを断っておく。

なお、本資料で現れた実際の動作は、全体で 21 例と少なく、しかも動作の形象も個々バラバラであるので、ここでは略すこととする。

2.6.4. 身振りの量と発話量

身振り・動作の現れ方についていろいろみていく前に、分析対象とした資料で観察された、身振りの量と発話量との関係を各座談メンバーごとにごく簡単にみておこう。

身振りおよび発話のそれぞれの量の測定には種々の方法が考えられるが、ここでは便宜的につぎの測度をとることにした。

まず、身振りの量であるが、これは 2.6.2. の(3)で述べた基準で記録された出現回数を測定量とした。また、発話量は、ひとまとまりの音声言語が連続して現れたものを 1 発話単位とした。しかし、この単位には文を超える非常に長いものがある一方、笑いや短い応答のようなものも含まれており長さが一定しない(詳しくは「資料編」3.1.を参照されたい)ので、もう一つの測度としてモーラ数を用いることとする。

第 2 表はその結果である。この表からわかることを箇条書で示すとつぎのようになる。

①身振り数、発話回数、モーラ数の各量のすべてにおいて、M2, F1, M1, F2 の順に多くなっている。このことから、少なくとも座談のような場面においては、身振りの量と発話の量とには正の相関関係があるといえる。

②そこで、身振り量と二つの発話量との相関係数を算出してみると、

第2表 身振り数・発話回数・モーラ数

		身振り数	発話回数	モーラ数
メ ン バ ー	M1	181(24.8)	81(31.2)	1112(28.0)
	M2	86(11.8)	31(11.9)	149(3.7)
	F1	171(23.5)	59(22.7)	716(18.0)
	F2	291(39.9)	89(34.2)	2000(50.3)
総 計		729	260	3977

(注) 括弧内の数値は全体を100としたときの%

身振り量と発話回数 .905 身振り量とモーラ数 .986

となっており、発話回数よりもモーラ数との間の相関のほうがやや高い。これはモーラ数のほうは1単位の長さがほぼ一定であるのに対して、発話回数のほうは長短さまざまな長さの発話が混在しているという、二つの測度の性格の違いによっていると考えられる。

③二つの発話量の関係を、1発話当たりの平均モーラ数でみてみると、

$F2 = 22.47$ $M1 = 13.73$ $F1 = 12.14$ $M2 = 4.81$

と発言回数の多い者ほど1発話当たりのモーラ数が多いという結果になっている(ちなみに、発話回数とモーラ数との相関は.930)。つまり、よく発言する人は1回当たりの話も長いのに対して、あまり発言しない人はしゃべっても1回当たりの発言量も短い、傾向があるといえる。

身振り数と発言量との相関は、上で述べたように、かなり高い。しかし、第2表に示した身振りの数の中には、ことばと共起するものばかりではなく、ことばを伴わない身振り・動作も含まれている。そこで、身振りを、ことばと共起したものと、そうでないものとに分けてみると、第3表のようになる。

④第3表の「有発話身振り」、つまり発話と共起する身振りの相対比率(各セル内の下段の括弧内の数値)と第2表の相対比率を付き合わせてみると、つぎ

第3表 身振り出現時のことばの有無

		有発話身振り	無発話身振り	総計
メ ン バ ー	M1	176(97.2) (28.8)	5(2.8) (4.3)	181
	M2	34(39.5) (5.6)	52(60.5) (44.4)	86
	F1	132(77.2) (21.6)	39(22.8) (33.3)	171
	F2	270(92.8) (44.1)	21(7.2) (17.9)	291
総 計		612(84.0)	117(16.0)	729

(注) 括弧内の上段の数値は横計を100、下段の数値は縦計を100としたときの%

のことがいえそうに思われる。すなわち、モーラ数の多いよく話す人々においては、ことばを伴う身振り回数とモーラ数との関連が強く、そうでない人々では全体の身振り回数と発話回数との相関が高いようである。このことをさらに言い換えると、ことば的人間(F2とM1)の身振りは自己の発言中に多く現れるのに対して、ことばの少ない人(M2とF1)は他者の発言に向けて多くの身振りを発することで座談場面に参加するということになろう。これは、第3表の上段の比率の項に端的に現れているともいえよう。ちなみに、有発話身振り数と無発話身振り数との間の相関は -0.733 と逆相関を示している。

なお、この座談グループにおけることばを伴う身振りと伴わない身振りの出現率を話題場面ごとにみてみたが、場面における各人の比率はほとんど変化がみられなかった。

2.6.5. 個人による身振りの現れ方

次に、座談メンバーごとの身振り・動作の違いについてごく簡単にみてみよう。第4表は、第1表を作り直したものであり、表内の上段に観察度数、下段

第4表 座談メンバーごとの身振り・動作の現れ方

		身 振 り							総計
		偶発	視線	前傾	後傾	表出	指示	模倣	
メンバー	M1	15	12	81	16	35	15	7	181
		12.7	25.6	86.7	12.2	29.0	9.7	5.2	
	M2	1	3	71	6	5	-	-	86
		6.0	12.2	41.2	5.8	13.8	4.6	2.5	
	F1	7	40	84	8	24	4	4	171
		12.0	24.2	81.9	11.5	27.4	9.1	4.9	
	F2	28	48	113	19	53	20	10	291
		20.4	41.1	139.9	19.6	46.7	15.6	8.4	
総 計		51	103	349	49	117	39	21	729

(注) セル内の数値は、上段が観察度数、下段は期待度数

に期待度数を添えてある。

第4表を観察度数（実際の出現度数）と周辺分布を基とした期待度数との差に着目してみるとつぎのような結果が読み取られる。

①偶発的身振り，すなわち姿勢の変化においては各人とも期待値からの隔たりはほとんど認められない。しかし，絶対数でみると，発話量の多いものほどこれを多く用いるという傾向がうかがわれるようにもみえる。これについては後に検討することとしたい。なお，この動作が僅か1例であったM2の具体的な動作の内容は「座り直し」であった。

②視線移動では，男性の2人が期待値を下回る量の動きしか行っていないのに対して，女性の1人であるF1は期待値よりかなりの程度多く行っている。また，もう1人の女性F2は期待値をやや上回る程度の視線移動であるが，絶対数

では4人の中で最も多いことを考えると、女性のほうが男性よりも他者に注意をよく払っている傾向があるといえよう。

③頭部の前傾動作では、最もことば少なく専ら聞き役に徹していたM2が期待値を大幅に超える量の動作を行っている。これに対して、一番発話量の多いF2では、前傾動作の絶対数は他者よりも多いものの、期待値をかなり下回っている。

前傾動作の大部分は、いわゆる「あいづち」に属するものであり、これは「あなたの話をちゃんと聞いていますよ」として、また、より積極的には「話を続けてください」と話の進行を促すサインとして多用されることから、このような結果となったと考えられる。ただし、この動作形象は自己の発話中にも数多く出現するので、別の機能があるといえる。この点については後で再びみることにする。

④頭部の後傾動作では、偶発的動作と同様、各メンバーとも期待値とほとんど変わらない程度にこれを用いているようである。

⑤表出的動作から模倣的動作に関しても、偶発的動作とよく似た傾向になっているといえる。ちなみに、指示的動作と模倣・象徴的動作がともに皆無であったM2における表出的行動の5例のすべては「微笑」であった。

第5表 身振りが向けられた相手

		相 手							総計
		M1	M2	F1	F2	司会	場所	不明	
メンバー	M1		0.5	11.4	27.7	0.5	2.2	57.6	184
	M2	5.7		20.7	56.3	1.1	-	16.1	87
	F1	37.4	11.0		15.4	4.4	2.7	29.1	182
	F2	23.2	6.2	10.8		5.2	0.3	54.2	306
総 計		19.0	5.3	9.5	16.9	3.4	1.3	44.7	759

(注) 複数の相手に対する動作が含まれるので、総計は729を超える

次に、各人の身振りが主にどの相手に向けて発せられたかについてみてみよう。結果は第5表のとおりである。なお、この表の相手のうち「場所」とあるのは、座談メンバー以外の特定の場所（例えば、自分の前の机の上）に視線や顔を向けた動作を意味している。

⑥全体（総計）の比率でみると、「不明」が半数近くを占めており、身振り量の多い者ほど（先にみたように発話量も多い）その比率が高くなっている。

「不明」の中には、その動作が誰に向けて発せられたかの識別がつけ難いものの他に、「自己完結型動作」だといえるようなものが多く含まれている。筆者が観察したところ、後者と目される動作が大半を占めるように思われる——とりわけ、発話率の高いF2とM1とにおいて。しかし、両者の識別の困難なものが多いので、ここではあえて分けることはせずに一緒にしておいた。

⑦この座談グループでは、録画の都合上、司会者和其他のメンバーは対面する形で座っていた。しかし、それにもかかわらず、各メンバーからの司会者対象の動作はきわめて少ないといえる。座談の流れをみると、本稿で分析対象とした区間はメンバー同士での話がはずんでいたこともあって、司会者は聞き役に徹していた。これが、メンバーから司会者対象の動作があまり行われなかった原因であるといえよう。事実、司会者が質問の形で話に参加した⑦の話題場面にいたって、司会者対象の動作が多くなっていることが、これを裏付けている。

⑧また、第5表で、ほとんど発言しなかったM2を対象とする動作量の少ないことも、司会者の場合と同じような理由からと考えられる。

次に、4人のメンバー間の動作の発信・受信状況をみるために、第5表を再構成した第6表をみてみよう。

この表から、さらに、つぎのことが付け加えられる。

⑨身振り・動作の発信の面からいえば、他者への発信量は男性よりも女性のほうが多い。これは②で視線の移動だけでみた結果と一致している。したがって、このデータからみた限り、女性のほうが他のメンバーに対してより多く何らかの配慮を図ろうとする傾向が強いといえよう。

第6表 身振りの相手別発信・受信率

		受 信 者				総計
		M 1	M 2	F 1	F 2	
発 信 者	M1		1. 4	28. 8	69. 9	73
			2. 5	29. 2	39. 8	
	M2	6. 9		25. 0	68. 1	72
		3. 5		25. 0	38. 3	
	F1	58. 6	17. 2		24. 1	116
		47. 2	50. 0		21. 9	
	F2	50. 7	13. 6	23. 6		123
		49. 3	47. 5	45. 8		
総 計		144	40	72	128	384

(注) 表中の上段の数値は発信総数に対する%、下
段は受信総数に対する%

⑩各メンバーごとに、受信／発信の割合を算出してみると、

$$M1 = 1.97 \quad M2 = 0.56 \quad F1 = 0.62 \quad F2 = 1.04$$

となっている(数値が大きいほど受信型となる)。このことから、発話量の少ない者(M2とF1)は身振り・動作の面では相対的に発信傾向にあり、発話量の多い者は受信傾向にあることがわかる。つまり、身振り・動作は発話量の多い相手に多く向けて発信される(つまり、発話者に対する返信の意で)のがよくわかる。

2.6.6. 発話位置による身振りの現れ

身振りの現れ方について、いくつかの側面からみてきた。ここでは、各種の身振りが発話のどの位置であられるかについて検討してみよう。

第7表は、一続きの発話の中のどの位置で、どの種の身振りが行われたかを

示したものである。結果について述べる前に、ここでいう発話種別の意味について簡単にふれておく。

ここでは発話と身振りの共起関係をつぎの5種類に大別した。

(1) 無言……身振り・動作だけで、言語音声が発せられなかったもの。つまり、第3表でみた「無発話身振り」に相当するもの。

(2) 応答……「ウン」「イヤ」などの応答詞だけの発話に共起して現れる身振り。なお、相手の発話の一部を引き取って繰り返す「おうむ返し」などごく短い発話や笑いなどだけを伴ったものもここに含めた。

(3) 開始……ひとまとまりの長い発話の開始時または開始直前に始まった身振りで、その継続時間の長さは問わない。なお、ここでいう「発話」は先にみたものよりも大きな単位とした。つまり、途中で他者の応答などが生じたとしても、発話者が自分の話をとぎらすことなく続けた場合は、その全体を1発話とみなした。

(4) 途中……上でいうひとまとまりの発話のうち、開始と終了時を除くすべての時点。したがって、狭義の発話位置また文や句などの位置との対応関係はこの欄では明らかでない。なお、ここに記録された身振りが実際に現れた箇所については後掲の第9表で示される。

(5) 終了……ひとまとまりの発話の終了時また終了のごく直前に生じた身振り。これには、発話者の意図による自然な終了の他に、他者からの割り込み発言によって中断されてしまったものも含んでいる。

第7表の結果を、第6表の場合と同様にみると、つぎのようなことを指摘しうる。

①偶発的動作においては、観察値と期待値との間で際立って違いのあるものはみられないが、「無言」において期待値より下回り、「開始」において上回るような傾向がみて取られる。ただし、「無言」で実度数がゼロになったのは、集計に当たってコミュニケーションとは直接関係しないと考えられた動作を事前に省いてしまったからである。これを含めて考えると結果は若干異なるわけであるが、大勢には影響することはなかろう。

②視線の移動は、「無言」と「開始」との場合に期待値よりやや多く、「応答」

第7表 発話種別 身振り出現率

		身 振 り							総計	%
		偶発	視線	前傾	後傾	表出	指示	模倣		
発 話 種 別	無言	-	25	86	3	3	-	-	117	16.0
		8.2	16.5	56.0	7.9	18.8	6.3	3.4		
	応答	3	2	81	9	14	-	-	109	15.0
		7.6	15.4	52.2	7.3	17.5	5.8	3.1		
	開始	13	20	14	15	27	5	3	97	13.3
種 別	途中	6.8	13.7	46.4	6.5	15.6	5.2	2.8		
		23	36	106	16	68	32	18	299	41.0
	終了	20.9	42.2	143.1	20.1	48.0	16.0	8.6		
		12	20	62	6	5	2	-	107	14.7
	終了	7.5	15.1	51.1	7.2	17.2	5.7	3.1		
総 計		51	103	349	49	117	39	21	729	
%		7.0	14.1	47.9	6.7	16.0	5.3	2.9		

(注) セル内の数値は、上段が観察度数、下段は期待度数

で低くなっている。なお、「応答」における2例はともに応答発言の終了時に行われたものである。

③頭部の前傾では、「無言」および「応答」において観察度数が期待値よりも有意に多く現れていることがわかる。この動作の主な機能は、先にも述べたように、「あいづち」「うなずき」にあることがここでもみられている。

一方、この動作は発話の「開始」時および「途中」時には期待値を有意なレベルで下回る量しかみられない。また、この動作は「終了」時でも期待値をやや下回っているところからみて、前傾動作はやはり「応答」的役割の強い動作ということができよう。

④頭部の後傾動作は、あまりはっきりした傾向は認められないようであるが、あえて言えば「開始」時にやや多く出現するということもできよう。ちなみに、

「無言」時の後傾動作はすべて男性に、「終了」時のそれは女性に集中している。これらは性差あるいは個人差に起因する動作と考えられようか。

⑤表出的動作は、「無言」と「終了」とで期待値を下回った数しかみられていない。なお、「無言」時の3例の内訳は、2例が「微笑」で、もう1例は何らかの発言をしようとして「両手上移動」させたが、タイミングが外れたか、そのまま黙ってしまったというケースである。また、「終了」時の5例の内訳は、「微笑」が2例、「否定的表現」「強調的表現」の動作が各1例であり、他に他者からの「割り込み」による中断時の動作が1例みられている。

⑥指示的動作と模倣・象徴的動作とはよく似た現れ方をしている。すなわち、これらの身振り・動作は、発話の「途中」では期待値以上に現れるが、当然ながら「無言」や「応答」の場合には出現することはない。また、発話の「終了」時にもほとんど現れることはないといえる。ちなみに、「指示」動作における2例は、他者からの割り込みによる「終了」であり、発話者自らの意図によるものではない。

以上は身振り・動作の面から、それが現れた発話位置の関係をみたものであるが、逆に発話位置のほうを中心にとみると、つぎのようにいえる。

⑦「無言」つまり発話を伴わずに単独で出現しやすい身振り・動作としては頭部の前傾と視線移動とが頻発されるが、他はほとんどみられない。

⑧「応答」と同時に生ずるものは前傾動作だけであるといっても過言ではない。

⑨発話の「開始」では、表出、視線移動、偶発的動作の3者が多用されるが、その他のものはあまりみられない。

⑩一方、発話の終わりでは、前傾がやや多く、視線移動と偶発的動作がこれに続いているが、発話の終了を明確に特徴づけるものとはなっていない。

発話末の指標としては、ここでみた各種の身振り・動作よりも、言語形式そのものの、あるいは本稿で分析の対象外とした音調（イントネーション）のようなバラリンガルなものの方がより有効であると思われる。

なお、発話「途中」の身振り・動作については、ここではふれない。

第8表 話者×発話種別 身振り出現率

		発 話 種 別					総計	%
		無言	応答	開始	途中	終了		
メ ン バ ー	M1	5	41	22	90	23	181	24.8
		29.0	27.1	24.1	74.2	26.6		
	M2	52	25	5	1	3	86	11.8
		13.8	12.9	11.4	35.3	12.6		
	F1	39	34	26	43	29	171	23.5
		27.4	25.6	22.8	70.1	25.1		
	F2	21	9	44	165	52	291	39.9
		46.7	43.5	38.7	119.4	42.7		
総 計		117	109	97	299	107	729	
%		16.0	15.0	13.3	41.0	14.7		

(注) セル内の数値は、上段が観察度数、下段は期待度数

次に、各人ごとの身振り・動作が発話のどの時点に多く現れたかをみてみよう。第8表がその結果である。

M1は「応答」が多く、「無言」の身振り・動作（前傾1，後傾・視線向け各2例）が極端に少ない。また，M2は口数が少ないことを反映して「無言」と「応答」に集中している。彼がほとんどしゃべらなかったことは，発話「途中」の動作がわずか1例（これは「視線向け」）しかなかったことから，よくわかる。

女性では，F1が，「無言」と「応答」にやや傾いているが，M2ほど極端ではない。最も発話量の多かったF2は，「無言」や「応答」の動作は期待値のみならず実数でも非常に稀であり，発話「途中」の身振り・動作の占める割合が圧倒的に多く，「終了」時のものも期待値よりやや多くなっていることがわかる。

大きな単位としての発話の中で占める身振り・動作の問題はこれくらいにして、もう少し細かい単位でみてみよう。ここで扱うのは、文や句レベルのものである。第9表がそれである。

表中の「不定」とあるのは、動作と発話部分との出現位置関係の対応がうまくつかないようなものである。つまり、発話中の文や句の開始・終了または全体といった箇所以外のところで身振り・動作が起こったことを表している。なお、「文頭」「句頭」というカテゴリには、文あるいは句全体にわたって持続し

第9表 文位置別 身振り出現率(「無言」「応答」を除く)

		身 振 り							総計	%
		偶発	視線	前傾	後傾	表出	指示	模倣		
文 位 置	文頭	19 13.6	23 21.5	18 51.4	17 10.4	46 28.2	12 11.0	7 5.9	142	28.2
	文末	13 15.9	26 25.2	112 60.4	8 12.3	7 33.2	1 12.9	- 7.0	167	33.2
	句頭	8 8.1	6 12.8	- 30.8	2 6.3	33 16.9	22 6.6	14 3.5	85	16.9
	句末	5 8.2	18 13.0	48 31.1	9 6.3	5 17.1	1 6.7	- 3.6	86	17.1
	不定	3 2.2	3 3.5	4 8.3	1 1.7	9 4.6	3 1.8	- 1.0	23	4.6
	総 計	48	76	182	37	100	39	21	503	
%		9.5	15.1	36.2	7.4	19.9	7.8	4.2		

(注) セル内の数値は、上段が観察度数、下段は期待度数

た動作の類も含まれている。

この表からいえることを列挙すれば、つぎのようになろう。

①偶発的動作においては、実現度数と期待度数との隔たりはほとんどみられない。また、視線移動と頭部の後傾動作も、偶発的動作とよく似た関係になっ

ている。つまり、これらの動作は発話中の文あるいは句の位置とはあまり関係がないといえる。

⑫頭部の前傾動作の出現度数は、文頭・句頭において期待値より有意に少なく、逆に文末・句末では有意に多くなっている。つまり、前傾動作は、「無言」や「応答」時以外では、文や句の終わりを示すサインとして使用される傾向が強いといえよう。

⑬これと逆の関係にあるのが表出的動作である。つまり、表出的動作は文や句の終わりには現れにくく、文頭・句頭あるいは語句全体と呼応して用いられるといえよう。

⑭指示的動作と模倣・象徴的動作は、主として句頭（というよりは、句全体）に関係して現れるようである。一方、これらは文や句などの終わりでは、指示的動作における各1例を除くと、まったく現れていない。しかも、その例外の内容は、「言いさし」と「割り込まれによる中断」であったことを考えると、これらも動作は発話の終わりを示すサインとして使用されることはまったくないといってもよいといえよう。

なお、発話位置のほうを中心にとみると、つぎのようにいえる。

⑮文や句の初めの部分と対応して現れやすい身振り・動作は表出だけである。したがって、文頭・句頭を明瞭に示唆するような身振り・動作としては表出的動作が関与しているといえる。

⑯また、句頭だけに有意に多くみられる動作に指示および模倣・象徴的動作がある。ただし、これらの動作は文や句の始まりを示すものというよりは、ひとまとまりの発言全体に対応する動作として多く現れている。

⑰一方、文や句の終わりには、頭部の前傾動作が顕著に現れているが、他は期待値並かそれ以下の頻度でしか現れていない。したがって、ひとまとまりの発話の区切りを明示するサインとしては頭部の前傾動作が関与しているといえる。

2.6.7. おわりに

会話における身振り・動作の果たす役割については、従来から諸種の事柄が指摘されてきたが、具体的なデータに基づくものは少なかった。そこで、本稿では、実際の談話データを対象に、身振り・動作を実証的に研究するための方法の検討を図り、計量的分析を試みてみたわけである。

この分析から、上記で述べたような、いくつかのことが明らかになった。しかし、ここで取り扱ったものは、1座談場面であり、しかも談話の量は非常に少ない。また、データの整理・分析の方法にもいろいろの問題がふくまれている。そのため、本稿で述べた結果のうち、どこまでが一般的なのか、また場面差あるいは地域差・属性差がどこに生じているのか、さらに話題やコミュニケーション意図による差異の現れ方、などはっきりとは分からない点も少なくない。

談話行動を研究するには、次節の「今後の課題」で一部触れた事項を含め、事前に解決しておかねばならない問題点が数多くある。今後、分析方法をより進展させるとともに、対象データを拡大して行こうと考えている。読者各位からの指導・助言を得られれば幸いである。

2.7. 今後の課題

この節では主として、第II編・分析編の各節でとりあげたいいくつかの個別的な分析について振りかえり、それらに共通する問題点を、今後のこの種の研究の課題として指摘しておきたい。なお、この節は江川との討論をふまえて、杉戸がその責任において執筆した。

今回の研究が目的とするところを、あらためて一言でまとめれば、コミュニケーションというものを、その言語的な要素と非言語的な要素との両方の範囲にわたって視野に入れ、全体的・総合的な観点から分析しようとするものである。その目的のためには、研究の具体的な手順として一気に全体をとらえるような方法がすくなくとも当面はあるべくもなく、本報告の構成がそうであるように、コミュニケーション行動のいろいろな側面をひとつずつ部分的に記述・分析する作業を積み重ねることが必要であることはいうまでもない。そうした作業や手順のひとつひとつにおいて問題になることがらや、今回の分析で困難を生じた点は、前節までのそれぞれの該当部分に、多かれ少なかれ、述べられている。ここでそれらを繰り返してまとめることは避け、より基本的な問題点、ないしいくつかの分析に共通して関係すると考えられる問題点を、簡条にまとめて掲げることにする。換言すれば今回の研究の反省という内容になるはずのことがらであろうけれど、ここでは、より積極的に今後の課題を示すという態度で述べる。この種の研究が多く蓄積をいまだ持たない分野のものであってみれば、それもあるいは許されよう。

(1) テキストを確保する方法の確立

一般的に言って、言語行動を分析しようとする場合、直接の分析対象として

のテキストを何らかの形で手元に用意する必要がある。今回の研究では言語的な要素と非言語的な要素とを同時に、つまりそれらの相互関係を視野に入れつつ参照できるようなテキストについて、基本的な考えとひとつの具体案を示した(1.3. および 3.4. を参照)。ただ、われわれとしては、ここに示したところは当面の出発点であるにすぎないと考えている。

分析すべきテキストを作成するためには、研究作業の手順として、いくつものステップを進んでいく必要がある。そもそも談話行動を構成する要素にどのような範囲を考えるとかが、それらをどのような関連性のもとにとらえるかなどの基本的なことがらの検討や、これをカバーしうるような具体的な録音資料や録画資料をどのように準備するのか、さらには、収集した資料をどのような枠組みやデザインのテキストとして実現していくのか、などのステップがあろうけれど、そのひとつひとつにおいて考えられるはずのいろいろな可能性を今回のわれわれが十分に検討したわけではない。

比喩的な言い方をすれば、ある研究のためにのぞましいテキストは、その研究が収束する段階に至ってはじめてその全貌を現すものだというものであるのかもしれない。つまり、分析を深めていくにつれてテキストに記載されていない情報範囲が変化し、テキストの項目の要・不要が検討されていくことは当然のことであるだろう。

このことをもふまえて言えば、テキストを十分な形と内容で準備することは今回のような研究にとって、つねに課題として追及すべき作業であり問題点であるといわなければならない。とりわけ、従来、書きことばについての研究分野にくらべれば立ち遅れているというべき、話しことば研究の分野でのテキスト作成の方法論は、もっとも基本的な今後の課題だと考える。以下に列挙する箇条も、それぞれ、結局のところは、このテキスト作成に関わる問題点としてとらえることができる場合が多い。

(2) 分析の対象として設定すべき言語行動の単位の検討

いろいろな言語研究は、ふつう研究対象とする言語事象を、言語事象としての量や質に関してなんらかの均一性や共通性をもったまとまりとしてとらえた

うえで、つまりは一定の単位としてとらえたうえで研究を進めていると言えよう。このことは、語彙量についての統計的な研究のように言語事象の数をかぞえる作業を前提とする場合にあってはまるばかりでなく、言語研究のさまざまな分野に共通することである。そして、単位が不確かなものであり、その認定にユレがあるような場合には、得られる結果自体も、混質的で不確かなものになってしまうという意味で、単位の問題は研究の基礎に関わる重要なことがらであるといわなければならない。

今回のわれわれのいくつかの分析も、それぞれに単位とよぶべき言語事象を切りとって進めていると言えるのであるけれども、なお、そのひとつひとつについてさらに検討が加えられなければならないと思われる。たとえば、南の提案する「談話」「会話」(1.1.)、杉藤の言う「発話節」(2.3.)、杉戸の言う「発話」(2.2.)などは、用語としては似ているものの、言語行動の単位としては量的にも質的にもたがいに異なるものであるというべきである。それらがたがいにどのような関係にたつ単位同士であるのか、とか、それぞれの単位を認定する際の基準にどのような異同があるのかなどは、必要な検討事項であらうし、それ以前に、たとえば杉戸の言う「発話」はいろいろな種類の談話資料にわたって均質的に抽出できる安定した性質の単位であるのかどうかというような、もっと基本的な検討も不可欠である。

このことは、言語的な要素についてあてはまるだけでなく、非言語的な要素についても同様である。江川(2.6.)も指摘するように、具体的な身振りのどこからどこまでをひとつの単位として、前後の身振りから切り離してとらえるかは、多くの場合、客観的な指標によりにくい作業である。身体的な動きが基本的に連続的なものであることに由来する困難なのであろう。もちろん、音声や発話行動も連続的なものであり、そちらには従来いろいろな単位が設定されていることを考えれば、非言語的な要素についても今後さまざまな観点からの単位が提案されてしかるべきであらう。今回のわれわれの研究でも、江川1978、杉戸1978で身振りの記述方法を考える際に、それぞれに単位というものを考えることが作業の重要な部分を占めた。

なお、言語、非言語の両側面についてあてはまることだが、単位というもの

を、いろいろな観点からの分析に利用できるような汎用性の高いものとして考える方向と、ある個別的な分析のためだけの単一目的的なものとして考える方向との両方の姿勢が必要であるということも指摘しておきたい。

(3) 研究対象の客観的な把握と記述の手段の確保

言語的要素・非言語的要素ともにあてはまることだが、音声であれ、身振りであれ、分析の対象とする事象をできるだけ客観的な方法を通じて手にする必要がある。この場合の客観性とは、換言すれば、同じ資料からなら別の機会にでも別の分析者によっても同じ分析が可能である、という追試可能性である。このことは、今回の研究についてことさらに言いたてるまでもなく、ひろく研究一般に言われることである。ただ、今回の研究で対象にしようとした言語行動の事象のうちには、沢木(2.4.)のあつかった音声のパロル的な側面や、江川のあつかった身振りのように、これまで研究対象として真正面から取り上げられることの少なかったものごとがある。これらについては、具体的な資料から研究対象を取り出す手段自体が摸索されなくてはならない段階であると言ふべきであり、この段階では、その手段や見方によって対象とすべき事象それ自体がゆれ動くことのないよう、研究過程の初期から、上に述べた意味での客観性を確保することに努める必要がとくにあると言わなければならない。

この客観性は、ひとつには、杉藤の進めた実験音声学的な分析のように、機械という手段によって支えられる場合がある。自然の音声のさまざまな側面をとらえるハードウェアの進歩は、近年、飛躍的とは言えないまでも着実であるので、そうした手段の導入は不可欠なことだと思われる。

客観性というものが機械によってだけ保証されるのでないことは言うまでもない。前項で単位について述べたような、作業上のいろいろな手順や基準の確立ということも、研究の客観性にとって重要な要因である。具体的な音声や身振りを、どのように区切り、どのように区別し、どんな分類をほどこし、どんな意味づけをするか、など、研究のそれぞれの段階ごとに設定すべき基準や手順はあろうけれども、そこをきちんと整備することにより、上述の、いつでもだれでもという客観性が期待されるはずである。今回の研究過程で痛感した今

後の課題である。

(4) 資料における一般性と個別性を区別する視点の摸索

報告書の冒頭にも述べたように、今回の研究は、談話行動についてのより一般的な知見を帰納するために、まずは、いくつかの座談場面資料を事例的に検討する作業を積み重ねることを目標にしている。いろいろなタイプの座談資料を見渡すために、資料収録の段階では、座談への参加者に性別・年齢・親疎などの観点からの多様性や、東京（山の手・下町）、関西（船場・河内など）の地域性を持たせたり、座談の進め方にも司会者が積極的に話題をコントロールするタイプと、ほとんど介入しないタイプとを収録計画として企画するなどの配慮を加えた。今回の報告書の段階では、こうした要素を考慮に入れた分析はほとんどできていないが、今後は所期の目標を追求したいと思う。

その際に、あつかうデータのなかに観察されるいろいろな事象が、そのつどの座談資料のもつ個別的な特徴の現れたものであるのか、何らかの意味での一般性が姿を現したものであるのか、という点についての判断は、分析の進め方や結果の解釈の段階でかなり困難で重大な問題点になるように思われる。たとえば、「ここであいづちが多く出るのは、この参加者の個人的な特徴なのか、話題や座談の進み方に由来する必然なのか」「身振りが非常に多いグループであるが、座談が白熱しているからなのか、個人的な特徴の集積なのか、地域的な特徴なのか」など、ひとつの事象についての考え方がひとすじなわでいきそうもない場合が非常に多いことが予想される。

こうした点を克服していくための、個別的なことと一般的なことを区別するためのいろいろな方法論や観点、一般性を引き出しやすいタイプのデータの収集法などは、今回の報告書では深く入りこむに至らなかったとは言え、今後の重大な課題として垣間見えた問題であると言える。

以上に掲げたところは、いずれも、研究の全体にわたる大きな問題点であり今後の課題である。そしていずれも、さまざまな試行錯誤をふくんだ研究の蓄積を求める困難な課題であるといつてよい。

もちろん、このほかにも、たとえば、言語的な要素と非言語的な要素との、データとしての時間的・内容的な対応づけをどのようにしていくのか、という多分に技術的な問題点をはじめ、言語・非言語の両面にわたって「意味」という問題をどう取り込み、どう処理していくのかという、もっとも基本的な問題に至るまで、今後の課題とすべきことがらは、幅ひろく、深い。

このように、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくという課題は、非常に複雑で、多岐にわたる。しかし、この課題をクリアすることで、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。

このように、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくという課題は、非常に複雑で、多岐にわたる。しかし、この課題をクリアすることで、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。

このように、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくという課題は、非常に複雑で、多岐にわたる。しかし、この課題をクリアすることで、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。

このように、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくという課題は、非常に複雑で、多岐にわたる。しかし、この課題をクリアすることで、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。

このように、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくという課題は、非常に複雑で、多岐にわたる。しかし、この課題をクリアすることで、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。これは、言語・非言語の両面を、時間・空間・内容の三つの次元で捉え、対応づけ、処理していくことが可能になる。

参 考 文 献

- Argyle, M. 1973 *The Psychology of Interpersonal Behaviour* (Penguin Books)
- Bavelas, A. 1950 Communication patterns in task-oriented groups
(*Journal of Acoustical Society of America*, 22, 725-730)
- Bühler, K. 1965 *Sprachtheorie* (第2版, Gustav Fischer, 初版は1934)
- 江川清 1978 「談話行動の実験社会言語学的研究」(『研究報告集 1』 国立国語研究所報告 62)
- 江川清 1978 「身ぶりの記述について」(『研究報告集 1』 国立国語研究所報告 62)
- 江川清 1983 「言語行動の記述法」(『言語の標準化の基礎』 特定研究・情報化社会における言語の標準化・総括班)
- 江川清・青木隆・平田嘉男 1985 『記号の事典』(三省堂)
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1969 The Repertoire of Nonverbal Behaviour: Categories, Origins, Usage and Coding (*Semiotica* 1)
- 芳賀綏 1954 「“陳述” とは何もの?」(『国語国文』 23-4 京都大学)
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. 1976 *Cohesion in English* (Longman)
- 橋内武 1983 「漫才という言語行動」(ノートルダム清心女子大紀要『国語国文』 7-1)
- 林四郎 1960 『基本文型の研究』(明治図書)
- 林四郎 1963 「文章研究の観点」(「放送のことばの研究——ラジオの文と文章について(4)」『文研月報』 1月号)
- 林四郎 1973 『文の姿勢の研究』(明治書院)
- 林四郎 1973 「表現行動のモデル」(『国語学』 92) [『言語表現の構造』 収録 1974 (明治書院)]
- 林四郎 1974 「人の死をめぐる言語行動」(『年報社会心理学』 15) [『言語行動の諸相』 収録 1978 (明治書院)]

- 林四郎 1974 「言語の諸相」(『言語』3-1~3-3) [『言語行動の諸相』収録
「言語表現の外側と内側」 1978 (明治書院)]
- 林四郎 1978 「文章の伝達」(『言語』7-5)
- 林四郎 1979 「言語行動概観」(講座言語第3巻『言語と行動』大修館書店)
- 林四郎 1984 「シンポジウム記録 文章論の開拓」(『国語学』139)
- 林四郎・石綿敏雄・南不二男 1983 「人・ことば・記号」(『言語生活』379)
- 日向茂男・杉戸清樹 1981 「『場面』について」(『日本人の知識階層にお
ける話しことばの実態』科学研究費報告書 国立国語研究所編)
- Hutchinson, A. 1977 (3rd ed.) *Labanotation—The System of Analyzing
and Recording Movement* (Theatre Art Books, New York)
- Hymes, D. 1968 *The Ethnography of Speaking* (*Readings in the Sociolo-
gy of Language*, Fishman, J.A. ed., Mouton)
- 市川孝 1978 『国語教育のための文章論概説』(教育出版)
- 岩淵悦太郎 1965 『現代の言葉』(講談社)
- 岩淵悦太郎 1970 『現代日本語』(筑摩書房)
- Jakobson, R. 1960 *Linguistics and Poetics* (*Style in Language*, T.A.
Sebeok ed., M.I.T. Press)
- 菅野謙 1963 「ニュース解説の文章構造」(「放送のことばの研究——ラジオ
の文と文章について(6)」『文研月報』3月号)
- 木戸幸聖 1976 『面接入門——コミュニケーションの精神医学——』(創元
社)
- Knapp, M.L. 1972 *Nonverbal Communication in Human Interaction*
(Holt, Rinehart & Winstone, Inc.) [牧野誠一・牧野泰子訳 1979
『人間関係における非言語情報伝達』(東海大学出版会)]
- 国立国語研究所 1971 『待遇表現の実態——松江 24 時間調査資料から——』
(国立国語研究所報告 41, 秀英出版)
- 国立国語研究所 1980 『談話行動の総合テキスト——東京・下町・資料(1) —
—』(科学研究費研究資料)
- 国立国語研究所 1984 『言語行動における日独比較』(国立国語研究所報告

- 80, 三省堂)
- 国立国語研究所 1987 『方言談話資料(9)——場面設定の対話——』(国立国語研究所資料集 10-9, 秀英出版)
- Leavitt, H. J. 1951 Some effects of certain communication patterns on group performance (*Journal of Abnormal and Social Psychology* 46, 38-50)
- 南不二男 1963 「ニュースの文章構造」(『放送のことばの研究——ラジオの文と文章について(5)』『文研月報』2月号)
- 南不二男 1964 「述語文の構造」(『国語研究』18, 國學院大学)
- 南不二男 1965 「名詞的表現の構造」(『国語学』63)
- 南不二男 1972 「日常会話の構造——とくにその単位について——」(『言語』1-2)
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』(大修館書店)
- 南不二男 1978 「言語表現における『空間的構造』と『時間的構造』」(『国語学』115)
- 南不二男 1979 「言語行動研究の問題点」(講座言語第3巻『言語と行動』大修館書店)
- 南不二男 1980 「フリの研究」(『言語』9-6)
- 南不二男 1984 「理解のモデルについてのおぼえがき」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂)
- 森田良行 1958 「文章論と文章法」(『国語学』32)
- Morris, D. 1977 *Manwatching* (Lausanne and Jonathan Cape Ltd.)
[藤田統訳 1980 『マンウォッチング』(小学館)]
- 永野賢 1972 『文章論詳説』(朝倉書店)
- 永野賢 1985 「文法論的文章論における主語の連鎖という観点について」(『学芸 国語国文学』) [『国語教育における文章論』収録(共文社)]
- 永岡慶三・吉田宏・藤田廣一 1979 「討論の発言者遷移に関する分析」(『行動計量学』7-1 日本行動計量学会)
- 長田久男 1984 『国語連文論』(和泉書院)

- ネウストアップニー, J. V. 1979 「言語行動のモデル」 (講座言語第3巻『言語と行動』 大修館書店)
- Praisse, P et Piaget, J. 1963 *Traite de Psychologi* [波多野完治・南博監修 1972 『現代心理——集団と個人——』 (白水社)]
- Rogers, E. M. & Rogers, R. A. [宇野善康・浜田とも子訳 1985 『組織コミュニケーション学入門——心理学的アプローチからシステム論的アプローチへ——』 (ブレーン出版)]
- 杉戸清樹 1978 「身振りを記録する——『変位』の記録表試案」 (『研究報告集 1』 国立国語研究所報告 62)
- 杉戸清樹 1980 「談話における話材の承前類型」 (特定研究・渡辺班研究発表会・口頭発表資料)
- 杉戸清樹 1983 「待遇表現としての言語行動——注釈という視点」 (『国語学』 2-7)
- 杉戸清樹・沢木幹栄 1977 「衣服を買う時の言語行動——その諸側面の観察——」 (『言語生活』 314)
- 杉戸清樹・沢木幹栄 1979 「言語行動の記述——買い物行動における話しことの諸側面」 (講座言語第3巻『言語と行動』 大修館書店)
- 時枝誠記 1941 『国語学原論』 (岩波書店)
- 時枝誠記 1955 『国語学原論続篇』 (岩波書店)
- 時枝誠記 1960 『文章研究序説』 (明治書院)
- 築島謙三監修 1979 『人間探求の社会心理学』 (朝倉書店)
- van Dijk, T. A. (ed.) 1985 *Handbook of Discourse Analysis* vol.1~4 (Academic Press)
- 渡辺実 1953 「叙述と陳述——述語文節の構造」 (『国語学』 13/14)
- 山口仲美 1979 『論集日本語研究 8 文章・文体』の解説 (有精堂)
- 米田正人 1978 「談話行動の計量的研究について」 (『研究報告集 1』 国立国語研究所報告 62)
- 米田正人 1980 「談話行動の分析」 (『国立国語研究所研究発表会資料』)

III 資料編

3.1. 資料について

3.1.1. かかげる資料

ここには、この研究の過程で得た談話資料のうち、今回のいくつかの研究報告が共通して分析対象とした、つぎのふたつの談話の文字化資料をかかげる。

(1) 大阪・船場・米津グループ

(2) 東京・下町・内藤グループ

これに加えて、内藤グループの該当部分についてすでに作成・刊行した

『談話行動の総合テキスト——東京・下町・資料(1)』

(昭和54年度文部省科学研究費補助金・特定研究「言語」渡辺班。

1980年3月。非売品。)

の一部を、サンプルとしてかかげる。

3.1.2. 分析の対象とした談話の文字化資料について

米津グループ、内藤グループとも座談はそれぞれ1時間以上にわたって収録されているが、ここにかかげるのはそのうちの一部分だけで、時間にして米津グループが10分58秒間、内藤グループが10分2秒間の談話部分である。座談会の企画・進行や録音・録画の収録状況、あるいは各グループの構成メンバーの諸属性や相互関係(既知・未知、親・疎などの関係)などについては、2.1.に述べてある。

ここには、収録した資料のうち録音され文字化された音声資料だけをかけ

るにとどめ、録画された映像とその観察記録の資料はかかげない。2.5.1で分析の対象となった非言語的な行動の側面についての資料を提示できないわけであるが、技術上また紙幅の制約から残念ながら割愛する。

以下に、かかげる音声談話資料を見るうえでの留意事項を列挙する。資料 A の資料は、話題のまとまりごとに標題を付けて示す。

例 「電車開通の頃」「巡航船」「町名」「東本願寺周辺」など。

イ. ひとりの参加者の一回ごとの発言のまとまり（短かいあいづちや笑い声など、多くの非分節的な音声連続も含む）を「発話」と呼ぶ音声言語面の単位と考慮し、そのひとつひとつに発話番号を付ける。単位としての発話に区切ることはかならずしも機械的に進まない作業であるが、ここでは、つぎのふたつの基準で区切った。

a. 参加者 A の発言のあとにはっきりしたポーズ（その人自身の沈黙時間）がある場合、そこで A の発話が一回終わったと見て区切る。

b. 参加者 A の発言に対して、別の参加者の発言（あいづちや笑い声も含む）が割り込んだり、同時に並行したりした場合で、かつ A の発言にいくらかでもポーズがある場合、内容的には中途の言いさしであっても、A の発話が一回終わったと見て区切る。

ただし、この発話の単位の認定についてはより幅広い観点からの基準の設定と厳密な作業が今後の課題として残っていることを断っておく。

ウ. 上記の発話番号は、米津グループの資料と内藤グループの資料とで、別の与え方を試みてある。研究の過程で試行したものである。

米津グループでは、それぞれの時点での談話の流れの中で量的にも内容的にも中心的だと考えられる発話を軸にして、3けたの発話番号をまず設定し（かつ、それに枝番号 0 を与える）、この発話に対して付随的なあいづちや笑い声には、枝番号（1, 2, 3・・・）を与えた。

例 001-0 ソリャ モー ソリャ ソーダンガー・・・

-1 エー

内藤グループの資料では、枝番号は用いず一段階の 3 けたの発話番号を連続的に与えた。

- なお、発話番号は上記アの話題のまとまりごとに更新した。
- エ. 同時に発話が並行している場合を、発話同士の時間的な前後関係もわかるように示すため、実線で区切って同時発話のたばのまとまりを示した。
- オ. 資料での改行は、原則として発話ごとに行ってあるが、紙幅を節約するために1行にふたつ以上の発話を記した場合もある。内藤グループの資料ではこの場合、&マークを行頭に添えて目印とした。
- カ. ここに示した資料の文字化の内容は、研究の過程のある段階でのものであり、最終的なものではないことを断っておきたい。何度も聞き返して分析を進める過程で細部の修正が必要になっているが、了解されたい。第II部の各論文で示された文字化の内容と異なる場合がまれにあるが、こうした事情のもとで各執筆分担者の判断で修正されたものである。

収録ののち、研究分担者がそれぞれ聞き返したところを集成して印刷原稿にまとめるまでの具体的作業は蔵部よし子が進めた。

なお、サンプルとして示す「談話行動の総合テキスト」の見本については、3.4. に説明を付す。

3.2. 大阪・船場グループ談話テキスト

船場 米津グループ

【電車開通の頃】

001-0 M2 ソリャ モー ソリャ ソーダンガー ウチラノ キンジョノ ワカイ ト

キニモ ヨツ デンシャガ メイジ アノー サンジュー エー ヒチネンカ

-1 F エー

002-0 M2 デケタンガ サンジュウロクネンヤケド サンジュウヒチネンニ ヨツパン

ノ コウサテンデ ダイヤモンドコウサテン ユウテ アレ ユータンダ

-1 F エー

M2 ミナ ゴザ モッテ スワリニ ミニ イキマンネ パー

-2 F アハハ ソウデスカ ヨウ ミニ イキマシタナ

【巡航船】

003-0 M1 イヤ ソレデナ モー アンタ ヨツパンノ ト フカパンノ トコデナー

M1 アノー ナニガ ジュンコウセン ツブシニ イキヨッタ クルマヤガ

-1 M2 ハー ソーダーガアソ

004-0 M2 ソレワナ アノー ソレワ メイジ サンジュウロクネンダ ア デケタン

-1 M1 アー

-2 F ソー

005-0 F アー ソンナ ジブンデスカ ヨク ゴゾンジデンナー タクサン

M2ワ

006-0 M2 ア ナゼカト ユウト アノー ジュンコーセンガ デケテ ジンリキガ

M2 モウ ワヤニ ナッタ ユーテ ヒンゴバシノ ア キタヅメカラ モー セ

-1 F エーエ ウン

-2 M1 ウン

M2 ソ ウシロ イッテ サンカクノ アカハタ タテタ ソノ クルマ ノッタ

-3 F ハイ

-4 M1 ソー

M2 ラ ヨンセンデ ズート ドウトンポリニ イキマンネン キョウソウダ

-5 F アー ア

F ソウデシタカ

007-0 M2 フーン ソレデ カガノ ヤシキ ユートネ ムコウノ トコデ

-1 F エー

M2 パート モウ ヒッ イシコロデ ジュンコウセンオナ シュウゲキ シタ

M2 ト ユーンダ マア シンマチバシカラ ニッポンバシマデ

-2 F アー ソーデスカ

M2 デケタ ダケダンネ ソノクセ ナー ワズカナ キョリデスケド

-3 F エー エエ

008-0 M3 アー ヨカッタネ ジュンコウセンテ エエ キブソ タッタ タッタ ユ

-1 M2 ソ ソソソ

009-0 M1 イヤー アレネ ゴガイハクランカ

M3 ウテ

M1 イノ トキニ アノ オー ナンノ オー

010-0 M2 キョツバシカラデショ

011-0 M1 ヨツバシカラ コノ ホソイ ナー

-1 M2 ウーン

012-0 M2 イヤー ヨツバシニモ アレワナー ニッポンバシノナー

-1 M1 フン

013-0 M2 アノ ツノセノ ネキノナ キョツバシ イマ ココワ ナンナンノテ

-2 M1	ソーネ	アーソーソ	
014-0 F		アー アン	エエ
M1	ン ……		
015-0 M2	ソレガ マァ ヒチ チョッケイ ……	ノ キレイナ	フネデ
-1 F			ハ
M2	アカノ モウフ ヒイテ カイデ ズー モー ミズワ	キレイデスワ	
-2 F	ハハ	エー	ソウ
-3 M1		ソー	ソー
F	デスナ		
016-0 M2	ソレデ ナガオバシノ トコデ	サーンセンジャ	
-1 M1		ソー	
-2 F		アー	
017-0 M1	ソレワ ナガオバシヤナ	ソー	
-1 M2		ナガオバシヤ	
018-0 M2	ウン ソレデ ワタシラ ダイゴカイ	ハクランカイデネ	ニジュッカイ
-1 F		エー	
M2	イキマシタ	デ ゴセンダ ナッ	ソイデ ニチヨウト サイジツ
-2 F	ハー	ヘー	
M2	ニナルト ニマイ キップ	イリマンネン	パンニ ……
-3 F		アー ソーデスカ	
M2	イッタラ ダイゴカイ ナイクー	カイヨウハクランカイデ	デンキガ コー
M2		デンキガナー ジー カキヨルッテ	デモ ビックリシタんだ
-4 F			ハハハ
-5 M3	イルミネーション ……	カッキョル	
M2	デンキガ	ビー カク	ンナー

【自動車】

019-0 F	ハハハ ナー	ナンデモ ヨウ	ビックリ シタモンデンナー	カワッタモ
020-0 M2			アーラ	モウ

F シ デキタラ

	M2	ソノ	トキニ	アノー	アンドルジョウジュショウカイト	ユウ	ガイコウ	
	M2	カンガ	アツテネ	アノー	メイジヘイカニナ	キハッタトキ	ジドウシャ	
-1	F		ウーン					
	M2	オ	ウンテンシテ	ミセタンダ	ソレガ	ニホンニ	トライシタ	ハジメ
-2	F				ハイ			
	M2	テダンネ	アノ	ビジュツカンノ	ウエ	アガッター	オリタリナ	
-3	F		アー					
021-0	M1		アラ	ドヤ		ウーン	ウーン	
022-0	M1	シャ	シャカイスジニネ	サカイスジニ	アレ	………		
023-0	M2		エッ					
024-0	M2	エッ	ア	アレワナ	ノリアイジドーシャダ	スミヨシマデ	ク	ウーン
-1	M1				ノリ			ナン
	M2	ワタシワ	シ	クニンノリデネ	アー	アレデモダー	ニッポンパンノ	
	M2	キタノ	ツジノ	カドニ	チューシャジョー	アツテ	ソレカラ	ム
-2	M1					アア	アノー	
	M2	イマノ	クロモンイチバツテウ	ウラテ	アルケド	アノー	オモテドー	
-3	F					エエ		
-4	M1					ノー		
	M2	リガ	アレ	クロモンダシテ		ヤケテカラ	アツチニ	
-5	M1			エエ				
-6	F			アー	ソウデスカ			
	M2	ナッタンダガ		オモテドオリ	ソレデ	アブノーテ	ショーガ	オマヘ
-7	F		ハ	ハン				
-8	M1		ノー					
	M2	ンヤロー	デ	ソレデ	デンシャミタイニナ	カン	カン	カン
-9	F		エ			エー		
	M2	シデ	ウンテンシュ	オ	ナランテ	ゼンクテ	ユーテネ	ジュウサングラ

-10 F

エエ

M2 イ コドモガナ ハイ ハイ ハイ サキバシ サキバシリダ アー ヨウ
-11 F ソー へへ

M2 …… ジドウシャノ サキバシリッテ アプナイヨッテ
-12 F へー ソーデ

【電車の先走り】

025-0 M2 イヤ キョート キョートガ ソレ ヤッタ アノ デンシャノ デン
-1 M1 ウーン ソーダ

M2 シャノ サキバシリダ
-2 F ハハハ
026-0 M2 ソーダ アレワナー キョウトワ デケ ニジュウハチ
-1 M1 ハハ

M2 ネンニ デケタケド フシマデナ トママデ イケタンダ アレガ アレガ
-2 F へー へー アア
-3 M1 エー

M2 ソレデ オオサカデモ イッショダッセ アノー ワタシ マァ シャシン
M2 ウツシタン オマッケドナ ニカイヅキノ サンジュウヒチネンニ デケ
-4 F エー エエ エー

M2 タンワ サンジュウロクネンヤ カイツウシタンガ ア クガツニ カイ
-5 F エー フーン

M2 ツウ シタケド アノー ナンダガ ア ナニダッチャ アノー タンセンダ
M2 ンネ チッコウマデ イック イッセンダ ヨンセンデ ソイデ
-5 F エエ エエ ハーハ

M2 テー アゲタラ ブレイキオ コウ カケテ クレマンネン
027-0 F ドコデモ トメテ クレマンシタナ
-1 M3 ウー

028-0 M2 アーア テイリュウショア オマンネヤデ サー テー ビン ビン
-1 F エエ

029-0 M1

ウ ウワギ ヌギハッタラ ドウ

M1 ヤネン

【室内の暑さ】<司会者着席>

030-0 C ドウモ シツレイシマンタ ドウモ エー シツレイシテ サシテイタダキ

-1 M2

ウン

C マス アツイデスネェ

031-0 M2 ココ レイボウ キイテナイナー

-1 M3

ホントダ

-2 C

ホホホホ

032-0 M3 キイテマ アソコ オマンノヤデ

033-0 M2 オマンノカ

034-0 M3 ウン アル アル ナカッタラ アツ モウ スコシ アツー

-1 F

アハハハ

035-0 M2 ワ ワタシ センス トッテコンニヤ アツウテ カナワンワ アセカキ

-1 M3

アハハハハ

-2 F

アハハハ

-3 C

ハハハ

M2 ヤサカイ ワタシモー アトノ ホーエ

036-0 F ハイ ドーゾ トーリ

037-0 M3 トーレマッカ トーレマッカ トーレマッカ トーレマッカ

038-0 M2

イヤ イヤ イヤ イヤ セ

M2 ンス トレマス イヤ オオキニ

039-0 F

ヨイショ

ワタシ スワラント

040-0 C アッ イマ デンジャノ オハナシ ダッタンデスカ アー

-1 M1

エエ

041-0 M2

-1 F アーハー

042-0 M1 ツマリネ ソリャ ソノジブンニ ナンヤ カーマンチェラー ヨウ チュ

-1 C エ

M1 ウノガ アッタナ ハハハ

-2 F ハッハ

-3 M3 ソー ソー

-4 C カーマン

【蓄音器】

043-0 M1 ソレカラ チクオンキガ アノ ムム ハジメテナ

-1 F ソウデシタナ

-2 C ハー

M1 アノ エンバンノ コー マルイ ヤツダンナ ソリャ ダイブ ソノ

-3 C ハイ

M1 ハ克蘭カイデ アタラシイ ニンゲンニ ナッタンヤ

-4 C フン アー

044-0 M3 ウチラー オヤジモ スキデネ モー チクオンキ ハヨー コータナ

-1 M1 ウン ウン

M3デ チイサイトキ ヤッテトナ エライ ヒトダカリヤ

-2 M1 ウン アー アン

-3 F ヘッ

M3メズラシカッタンヤナ アリャ

【ことばのこと】

045-0 C アノー チョット コレワ コトバノ コト ナンデスケレド ドーナンデ

C ショー タトエバ ソーユー ジダイノデスネ アノー マ センバッテ イ

C イマスカ アノー コノアタリノ コトバト イマノ ソノコトバデスネ ア

-1 M1 エー

C ノ オーサカベント イイマスカ ソノ カワリカタッテノワ ドーデスカ

	C	ドー	オカンジニ	ナリマスカ						
046-0	M1	ソレワナ	コレネエ	ドージマ	ドージマニ	キタハマネエ	ネエ	ド		
-1	C		ハイ				ハイ	ハイ		
	M1	ショーマチ	コーユ	トコロワ	コトバガ	キタナカッタンデス		オン		
-2	C							アー	ソー	
	M1	ナジ	センバデモ	ホイデ	ホンマチカラ	ホンマチカラ	キューホージマ			
	C	デスカ		アー						
	M1	チニカケテ	マダ	ヨカッタンデス	シカシネ	ナイブニ	ナイブノデワ	ア		
-3	C				ア	ハイ				
	M1	ー	マダ	トクベツニ	ヨカッ	コトバガ	ヨカッタンデナ			
047-0	C	ソノ	センバデモ	イクツカニ	ワカレル	ワケデスカ				
048-0	M1	ソー	ソー	ソー	モーネー	ショーバイニン	ショーバイスル	スルノニ		
-1	C				エー					
	M1	ワ	コトバガ	ワルインデス						
049-0	C	ホー	アノ	イマ	キタハマトカ	ドウ	ドージマト	オッシャイマシタネ		
050-0	M1	エー	ドージマ	キタハマネ						

【米相場】

051-0	M2	ドージマト	ユータラ	コメソーバヤッタンデス		ムカシカラ				
-1	M1					コメソーバダ				
052-0	C	ソ	ソレ	ソレワ	モウ	センバ	センバデワ	ナイノデスカ		
053-0	M2	エー	オマヘンノヤケドネ	ソレネ	コメソーバニ	デタヨッテネエ	ムカ			
-1	C							ハイ		
	M2	シ	デンワト	イウモノガ	ナカッタンダー					
-2	C						ハイ			

【旗振り】

054-0 M1 ソレデ ウエガ

055-0 M2 ソイデ アノ ドージマノ イマ オーエバシオ ワタッテ チョット イ

M2 ッタ ハスイチガ オマンネエデ デ ソコノ ウエデ モー イマデ ユー
-1 C ハイ

M2 タラ ニカイ サンガイ ヨンカイグライノ タカイ タカミノ ウエデ ア

M2 ガッテ シロイ ハタ モッテネー コウ ソーパオ アノ
-2 C ハイ ハイ

056-0 M1 ソレネ イマ ナニオ ショーケンガイシャ ユータラネ ムコニ カイテ

-1 C エー ハイ

M1 マンナ

057-0 C アー テデ ヤリマスネ

058-0 M1 ウン ソレデ ムコニ カイテマンナ ソレオネ アノー エンボーカラナァ

-1 C エー ハイ エー

M1 ハタデ シンゴースルンデス

059-0 C テバタシンゴードスネ コレワ

060-0 M2 ソレデネ ハタ フッテテネ ソレオ マーユータラ ジュシンドンナー

-1 C ハイ ハー

M2 ウケトルンノガ コノ シタデラマチノナァ クジラザカノ ウエデ ウケト

M2 ンノ クジラザカノ

061-0 C ソレ ドノクライ ハナレテイルンデスカ

062-0 M2 エ ダ ダイブ アリマンナ

063-0 C イチリグライ

064-0 M1 ソレ イチリグライ イジョーアル

065-0 M2 エー モー ゴキロ ヨンキロ ソ ソ ボーエンデッセ ミテンノワ

066-0 C ボーエンデ

067-0 M2 ソ ボーエンキョーデ ミテンノワ ミテテ ソレカラ マタネ イコマハ

-1 C	ホー	エー
M2	ンノ ヤマゴシデ ウケマンネエ	
-2 C	ヤマゴシデネ	
068-0 C	マ マタ テパタ アノ テト ハタデ	
069-0 M2	アー ハタデ ミーンナ モ デンワ オマヘンノヤ	
-1 C	ホー	
070-0 M2	コノ エライ	
071-0 M3	テパタヤナイ オオキナ ハタ オオキナ ハタ イッポン	
-1 C	イッポンデ	ホー
072-0 M1	シカシ アレワー ワ ソノ	

【電灯】

073-0 M2	コノ コノ シンサイバシガナァ ソモソモ デンキ デキエタンガ メイ	
-1 C	ハイ	
M2	ジ ジュウ ア アノ ニジュウハチネンダ マ ヨーシナモンヤ ニジュ	
-2 C	ハー	
M2	ウハチネンニ デントー ソレモ ヒャクボルトトイウ イマ ケイコートー	
-3 C	ハイ	
M2	デワ オマヘンデ ガ デキタンタ ワタラノ ウラマチノ トコワ メイジ	
-4 C	ハイ ハー	
M2	サンジュウヨネンダ デケタンガ オソイ ソレガ ゴジュウワットダ アレ	
M2	アノ ナニヤ ゴジュウボルトダ シンサイバシワ ヒャクボルトデ ソレ	
-5 C	ハー	ハイ
M2	デ ワタシラガ モウケタンガ ハクショクコウ イッコダシテ	
-6 C	ハイ	ハイ

【三部制】

074-0 M2	ネー イマノ デンキノ ユライテノワ エー オソラク シラハリマヘン	
----------	------------------------------------	--

M2	デ	サンブセー	ナッタンダ	サンブセーデネ	ロクジニナッタラ	ブウー
-1	C		サンブセー	ヘー		
M2	ット	トボッテキマンネ	ロクジニナッタラ	デ	ジュウニジニ	モー ケエ
-2	C		ハー	ハイ		
M2	ルゾ	ユータラ	ズウーット	ケエルノガ	コノ	ハンヤトーダ デ リョウ
-3	C					ハー
M2	リヤトカ	インショクヤトカ	リョカントユーノワ	サンジトーナンデ	サン	
-4	C		ハイ		ハー	
M2	ジニ	キエマンネ				
075-0	C	サンジデスカ				
076-0	M2	ヘ	シューヤトート	ユート	ビョーイント	コーエント エキダケダモン
M2	ネ	モ	ソウユー	セイド	ナッテタン	ソンナ オソラク サンブセーテノ
-1	C	ハー			エー	
M2	ワ	シッテルシト	オソラク	オマヘンワ	イマ	
077-0	C	ソレハ	ショーワノ	ハジメニワ	モー	ナイワケデスネ
078-0	M2	ショーワヤ	オマヘンワー	メイジダワ		
-1	M3			メイジモ		
079-0	C	ア	メイジモ	メイジ		

【ガス灯】

080-0	M1	アレワ	ガストーノ	ホーガ	ハヤカッテンナ	デントーヨリ ガストーノ
-1	M2				エーッ	
M1	ホーガ	ハヤカッタナ				
081-0	M2	イイエ	ガストーワナ	マントルデネ	ア	シンサイバシニ ニホンアッテ
-1	M3			ガストーワナ		
-2	M1				マントルヤ	
082-0	M1	エーエー	コウヤッテネ			

083-0 M2 イマノ ガストーユーノワネ ネンリョーガ シュタイデショ ソノジブ

-1 C エー エー

M2 ソワ デントーガ シュタイダンネン マントルトユーテネ キヌノナァ ホ

-2 C ハー

-3 M1 マントルヤナ

M2 ソナガイ ヤツオ パット モヤスト ズーット カッコ ナリヨンネ アレ

-4 C エー

M2 ガ アオイ アカイヒ アノ アカルイ デントウト タチウチ デキンホド

M2 アカルイノヤ

-5 C ホー

【街灯】

084-0 M1 アイツワ ナンデスナァ アノー コウ コウ ツケ ツケル ヤツガナァ

M1 クチエ マッチ クワエテ

-1 C ホォ

085-0 M2 イヤ アリャー ガイトーダンガ ヨツカドノ ガイトーダ アリャ アサ

-1 F1 アノー

M2 アノ ソウジニ キマンネ アサネ コノ マ デントーノ カワリ

-2 F1 ソウジニ キハルンネ エーエー

-3 C ハー

M2 ニナァ ガイトーユーテ ミナ……

-4 C エー

086-0 C ソレモ メージデスカ

087-0 M2 エエ ムロン メージ

-1 F1 メージ

088-0 C ショーワニワ モウ ナカッタンデスカ

089-0 F1 ナカッタンデス

090-0 M2 エエ ソンナモン ショーワ オマヘンワナ ア ショーワネ

091-0 M2 ソレカラ アノー

092-0 F1 キャタツ カカゲテネー ア アノー

-1 M2 エー

093-0 M1 ハシゴ カケテネ

094-0 M2 ロクジニナッタラ ハシゴ カケテ マッチ ジュッポンホド クチシテネ

-1 C エー

-2 M1 エー

M2 ビャーット ツケテ コウヤルワ トクシュニ マワリマンネ

-3 C ハイ ハイ

-4 M1 ソヤー

-5 F1 ヒー ツケテ

【石油】

095-0 M3 ア アリャ セキユヤナ セキユダンナ セキユ モットンタ

-1 M2 エー エッ ソソソ

M3ン セキユヤ

-2 M2 アア

-3 M1 アア セキユヤ

096-0 M2 アア モウ セキユバッカリダ セイ ワタシラ ジュウニノ チイソナッ

M2 テカラ セキユオ カイニクルモネ ソノ コノー ムコウヤ チョウド ア

M2 ノ アマガサキノ アノ フノマチバシ ソコノナ ヒラノヘイペイト イウ

M2 トコニネ スタンダードノ セキユノ ジョーマツジルシトユーテ チャーン

M2 ト キレイナ ハコ フタカン ハイッテマンネ ヨエンジュッセンダ ハア

-1 C ホー

M2 フタカンデ

097-0 C ヨエン ジュッセンガ メイジナンネンデスカ

098-0 M2 ヒトカンデ ゴクニユー マア ニエンゴセンダスナ

099-0 C ハー ソレワ メイジノ オワリゴロデスカ

100-0 M2 エー ソーダンナ ソウドッシャロナ ワタシ ソ ソ ソヤ メイジイッ

M2 バイダンナ ヤッバリ

101-0 C ト ユーコトワ カナリ タカイデスネ ソノトージトシテハ

102-0 M2 タ タカイケレド アンマリネ フタカンテユウ カウ ワレワレノバアイ

M2 デッチモ …………… イキヨッテニ カイニイキマッケド モー ミナ マイ
-1 C ハー ハー

M2 ニチ アブラウリニ キマンネ アブラヤー アブラヤーユーテ イリヨウガ
-2 C ホー

M2 イダ ワリカタ

【ランプそうじ】

103-0 M2 デ ワタシラ モウ アサ ハチジニ ショクジンタラ モウ カテイデ
-1 C エエ

M2 ランプソウジ コレ キマッタモノダ ランプノ ソウジスルノワネ モー
-2 C フーン

104-0 M3 アレワ デッチノ シゴトヤッタ

105-0 M2 アー モー コレモ ミンナ デッチコーノ シゴトダ フーン ソリャ
-1 C アー

M2 ヨーチナ モンダケドナ

3.3. 東京・下町グループ談話テキスト

下町 内藤グループ

【町名】

001 F1 オタクサマワ アズマバシムコーノ チョーメーニイタシマスト ナント

&F1ユー 003アー サヨーデゴザイマスカ

002 M2 ホンジョヨンチョーメデス

004 M1 モ モト マツクラチョーッテ イッテキタンデスヨ

005 & F 1 アー サヨ一デゴザイマスカ 008ネ一

006 M 1 工一

007 F 2 アー マツクラチヨー イーナマエデシタネー

009 M1 ミツメドーリッテチューネ アノヒロイトーリ

010 F 2 ドーシテ

011 & F 1 ハーハー ミツメドーリゴザイマス11-1アー ソデスカ

012 M2 H-

013 F2 ドーシテ アーユー イーチヨーマーオ ナクシタデシヨ－ネー

014 M1 ウー ソー ソ

M1 レガー

015 F2 コチラワネー アベカワチヨ一デス

016 M1 7-

017 M1 アー アベカワチョー

018 M2 7- 7- 7-7-7-7-7-7-7-

019 F 2 ムカシノネー

- 020 F 1 フルイチョーメーデネー
-
- 021 F 2 アベカワチョーッタラ フルイトコデスヨー アベカワチョー
- 022 M 2 ソ シッテマス
-
- 023 M 1 マツクラチョーッテユー チョーカイワネー イッチョーメ ニチョーメッ
-
- M 1 テアッテ マダ ホントノダイチョーカイ ダッタンダケドネー
- 024 F 1 ハー ハー
-
- 025 M 1 ソ ソレガ クカクセー ゼーリデネ エー ショーガナインデスヨ ミン
- 026 & F 2 ハー 027ハー
-
- M 1 ナ カワエオトッテ ハシノナマエオトッテ コマガタパシ コマガタイッ
- 028 F 2 ハー
-
- M 1 チョーメ ニチョーメ サンチョーメ ヨンチョーメ シンマヤバシイッチョー
- 029 & F 2 ハー 030ハー 031ハー
-
- M 1 メ ニチョーメ サンチョーメ ヨンチョーメ コトドイバシイッチョーメ
-
- M 1 ニチョーメ チョーメモサ ミンナ ハハシデ チュ イ ナンチョーメニ シ
-
- & M 1 チャッタンダ 034ソー
- 032 F 1 ソ ソーイタシマス アノ コマガター チョーメーワ コチ
- 033 F 2 ア ソーデスカー
-
- F 1 ラノ アサクサガワノホーニモ コマガタッテノゴザイマスネ
- 035 M 1 エー ット ホンジョーガワト
-
- 036 F 2 ア ホンジョガワニモ アルンデスカ コマガタガ
- 037 F 1 リョーホーニ ホンジョガワニ
- 038 & M 1 ソー 039ホンジョーノガワガ コマガ
- 040 M 2 ダケド
-
- M 1 タニアル
- M 2 コマガタガ アッテモ アノー ホンジョーノホーワ ヒガシコマガタンナッ
-
- M 2 チャウワケデス
- 041 & M 1 ソー 045ヒガシガツクンデスヨ
- 042 F 2 アー

043	& F 1	アー サヨーデスカ	044	ハーハー	046	アーソーデ
	& F 1 スカ	048	ハーハーハハハ			
047	M 1	ホラ タイヨーノアタルホーダカラ				
049	F 2	アーソーデスカ				
050	M 2	アー				
051	F 1	ハハハ アハ				
052	M 1	アサクサガワ コマガタッテユードケ				
053	F 2	シカシ コマガタッテート ムカシカラ アサ				
	F 2 クサノモンデショーネー	コマガタドジョーダトカネー		ナントカイッテ		
054	& M 2	ソーソーソー ソー ソー	055	ソー		
	F 2	ナンカピントキマセンネー カワムコーガ コマガタダナンテ				
056	& M 1	ダ ホンジョー	057	ソー ソー ホンジョーガワワ ヒ		
	M 1 ガシコマガタッテ	シガシガ ツイテルダケデ	コマガター	アサクサト	ホ	
	M 1 ンジョリョーホーエ	コー	ワカレチャッタンネー			
058	F 2	アトー ホンジョチューガクノ キンジョデスカ	ソーソ	ソー		
059	M 1	ソーソーソー ソー				
060	F 2	イマ ウチノムコガ ホンジョチューガクノ センセーシテンデスケド				
061	M 2	ア ソーデスカ				
062	& M 1	センセーッ 063	ア ソーデスカ			
064	F 2	デスカラ ナントナクネー	アノー	コマ		
065	M 2	アー	ワカ			
	F 2 ガタ……ネー	ナツカシーカンジガ	スルンデスヨー			
	M 2 ルワケデスネー					
066	F 1	デスカラ オハナシネー	シジュー	オハナシ	キータリナンカスル	
	F 1 ト	カンシンモツヨーニ	ナリマスネー			

【町名ゆかりの名文句】

001 F 1 ムカシワ コマガタナンテモーシマストネー タカオノモンクニ スシワ

210 III 資料編

	F 1	イマ コマガタアタリオ ホトトギスナンテ シャレタモンクガ ゴザイマシ	
002	M 1	ハハハハハ	ホトトギス ア ア
003	M 2	ハハハハハ	
004	F 2	ハハハハハ	

	& F 1	タネ	007	エヘ
005	M 1	キミワイマ コマガタアタリ ホトトギスカ		
006	& F 2	アー	008	ホントデスネー
009	F 2	デ ダ ドーシテ コーイー……		
010	M 1	ヤ イーナマエダヨ コマガタッテ ナマエワ		
011	F 1			ソーデスネー
012	M 1	ンーン イーナマエデスヨ ンー		
013	F 2			シカシ イーチャーメーガ ナクナリマシ

	F 2	タネエ		
014	& M 1	キミワイマ コマガタアタリ ホトトギス ネー	016	ンー
014-1	M 2	エー……		
015	F 1			ネー イーモンクデスネー
017	C	ドーモ アノー		
018	F 1	アーユー ムカシノヨーナ ソノジョーチョノアル ウタナンテノ		
019	M 1			アー ジョーチョ

	F 1	ワ ナクナリマシテネー		
020	M 2	エー		
021	F 2	イヤ ワカラナイデス イマノワカイヒトワネ		
022	& M 1	ア ゼンゼン イミモナニモ	025	エーン ダカ
023	M 2	ハハハハハ		
024	F 1	モ ジャンジャカジャンジャカ ヤッテマスカラネ		

	M 1	ラ ワタシドモノ ホンジョーニワネー ホンジョーニー スギタルモノガ		
026	F 1	ハー		

	M 1	フタツアリ ツガルダイミョー スミヤシオバラッチイッタンダ		
027	& F 1	ハー	028	アーアー
029	F 2			ア シオバラタス

M1 - 工 -

【東本願寺周辺】

001	F 2	イヤー カワムコーモ カワッタケド コッチモ カワリマシタヨー	
002	M 2	エー ソーデショーネー	
003	F 2	ワタシガー コドモノジブソワネー スグキンジョガネー アノ	
	& F 2	ヒガシホンガンジナンデスヨ	006デー アソコワネー コ
004	M 2	エーエー	
005	M 1	アーアー ホンガンジ アー	
	F 2	ナナマガリッテマシテネ コーユーフーニ コーマガッテ ムコーノ ツ	
007	& M 1	ソー	009オーン
008	& M 2	ソー	010オー
	F 2	マリ タワラマチノドーリィ デタワケデスヨネ	
011	M 1		オー
012	M 2		エー
013	F 1		エー
014	& F 2	ムカシノデンシャドーリ イマノジンタンドーリ	014-1ソノネ マガリッカ
015	M 1	オーオ イマワ マガッテナイヨナ	
016	& M 2	エー	017アーアー
	& F 2	ドニ カナラズ コジキガイルンデスヨネ	020ムカシデュー ナンテユッテ
018	F 1	ハー	
019	M 1	ハーアー	
	F 2	シャ イマー イマ ……ンナンテン ……トカ ……ッテュンデショーネー	
021	M 2	……デスネ	
022	F 1	ハー	
023	F 2	マ ……ッテューノガ	
024	M 1	ヤーヤー ……ッテイッテタ ン	
025	F 2	コノマガリッカドニ カナラズイタモンデスヨ	
026	M 1		ホー

- 027 F 2 ホーデ ナーンカ アソコトルノ コワクテネー
027-1 M 1 ウン
-
- 028 F 2 ヨク ワタシラ チーサイジブソニ アレンマシタ
-
- 029 & F 2 アソコノ モンズキサマニネー ロシアジンガネー 031ホリヨ
030 F 1 ホリヨンナッテキマシテ
-
- F 1 ネー
F 2 ソナッタノ ゴゾンジナイデスカー
032 M 1 アー
-
- 033 F 1 メージーナンネン サンジューヒチハチネンノ センソーノ センソーデス
034 F 2 センソーノー
-
- & F 1 ネ 037ハイ 040エー ホリョト
035 & F 2 ソノネ ロシアジンガネ モンズキサマニ イタンデス 039エ ホリョガ
036 & M 1 ホリョーガ 038ホリョデー
-
- F 1 シテ アソコエ ホンガンジー ツレテコラレマシテネ
041 F 2 エー
-
- 042 & F 1 アソコデ マイアサ アノニワデ 044クンレンシタリナンカ
043 F 2 タイソーシテンノネー
045 M 1 ロードー ロードー
-
- M 1 オ シテタワケ
046 & F 1 ハー 048ロードーワ シゴトワシナイ
047 F 2 イヤ タイソースルンデスヨ ウンドー ロードーナンカ スルトコナイデ
-
- 049 & M 1 ホー 051ソー ソー ソー
& F 2 スヨ 050セガタカクテネー 052ソレオ マイニチ コドモノコロ ミ
053 F 1 ワタクシ
-
- & F 2 ニイッタモンデスヨー 055エー アソーユー
F 1 タチ コドモノジブン ヨクネー ミニマイリマシタケレド
054 M 1 ソー
-
- F 2 ソーネー マー カワムコーノカタ ゴゾンジナ ナイトオモイマスケドネー
056 M 1 ソー シラナイネ

057 & F 2 ソーデスネー ドレクライマエデショーネー 058イマカラ

& F 2 ソーネー ゴジューシチハチネングライマエデショーネー 061タイショーノ

059 & F 1 アタシタチ 060ソーネー

& F 2 ー 064ロクジューネンマエ 066ジャタイショー

062 & F 1 イヤー ア ロクジューネンマエヨ 065ン ソー

063 M 2 エヘ

& F 2 ロクシチネンデスネ 067ソノジブンデスカラネ 069ソイデ アソコエー アノ

068 M 1 ン

& F 2 ー モンズキサマノネー モンゼキサマッテンデスヨネー 071トコロガ アタ

070 M 1 ン

& F 2 シタチワ モンズキサマトイッテ 074デ モンゼキサ

072 F 1 アハ

073 M 1 イヤ モンズキサソ ミンナモンズキサソ

F 2 マッテユーノガ ホントノナデスケドモ マー シタマチノモノワ モンズキ

& F 2 サン モンズキサソッテユーワケデスヨネー 076デアソコニ アノ オヒガン

075 M 1 ホーホー

F 2 テマストネー タイシタネー ソノ アレガ カカッタワケデスヨー イロン

& F 2 ナミセガネ 079アノー アタシ オボエテマスヨ ロクシャクノイタチッテ

077 & M 1 ン 080ン

078 M 2 ン

& F 2 ユーノ 082ロクシャクノイタチガ イルッテミタラ ロクシャクノイタエ チ

081 M 1 ン

& F 2 ガ ツイテタッテ 085ホントニ ソノトーリデシタヨ

083 F 1 チガ

084 M 2 アハハハ

086 F 1 ソイデ ヤシヤ ヤシヤナンカネー イマシテネー

087 F 2 オボエテマスヨ アタマガフタツデ カラダガヒトツトカッテネー

088 M 2 ホー

089 & F 2 ソーユーモノガ イッバイデタンデス 091ソーユー コドモゴコロニネ
090 M 1 フーン

F 2 ー ソレオミルノガ タノシクテ ムカシデユー イッセン オオーキナ ニ

F 2 センドーカッテノ アリマシタネー

092 M 1 エ ニセンドーカワ コンナオーキーカラネー

093 & F 2 エー 094アレオ モッテネー ウロウロウロウロンテ シタコトオボエテマ
095 M 1 ウーン

& F 2 スヨー 096マー コチラワネー シジョーニ オジョーサンデネー ソンナコ

097 F 1 イイヤダ

098 M 2 へへへ

& F 2 トナカッタ 099アタシナンカワモー ホントノシタマチデネー モー ムカシ

100 F 1 ンー

101 M 1 ンー

& F 2 カラ アパレンボーデネー 103アノデンシャドーリッテッタンデスヨ

102 & M 1 ンー 104ンー

105 F 2 デ デンシャドーリノイジメッコッテ ウチノマエ トーラナカッタ

106 F 1 オンナオヤブンダモノ ホ カオヤクダモノ

107 M 2 ハハハハハ

108 F 2 コドモガ トーラナカッタ……アノ アソコラ カケズリマワリマ

F 2 シタケドネー

109 M 1 ンー

【居住地の川】

001 F 2 ソーユー アレデシタネー アソコニシンポリバ シンポリガワッテ カワ

F 2 ガ コー

002 M 2 エーエーエーエー

003 F 1 キクヤバシノトコロニ コーカワガ

004 M 1 エー スキヤバシノトコロニネー アッタネー

& M 1 アーン

006ンー

005 & F 2 シンボリガワッテ カワナンデスヨ 007デ シンボリバタッテユーネ アソ

F 2 コラユーンデスケド シンボリバタオシッテルノワ ワタシトアンタグライナ

& F 2 モンネ 009ホトンド イナイデスヨ

008 & F 1 ソーネ イマワモーホントニ イナイデスネ 012ハー

010 M 2 ソー

011 M 1 ヤッパリネー ドコノチョーナ

M 1 イデモ モー フルイヒトワ イナクナッチャッターネー ソー

013 F 2 イナクナリマシタ

014 F 1 デ ソノカワエー ム

F 1 カシワ ナツニナリマスト ユースズミノコロニー フ チーサナフネガ マ

F 1 イリマシテ アサリヤサン シジミヤアサリオ ツンデー ソノカワオ

015 & M 2 エー 018フーン

016 F 2 ア アサリガ トレタンデスヨー

017 M 1 ソー

F 1 ウリニナガシテイクンデスヨ

019 F 2 アノ キクヤバシノカワデスヨー アソコデ アサリトッタンデ

020 M 1 ソーン

F 2 スヨ

021 M 1 ソー ヤ ワタシタチモ アノー アズマバシワタッテ コッチークル

M 1 ツギノハシニ ナリヒラバシッテハシガ アルンデスガネー

022 F 1 ハイハイ エー ナリヒラバシ

023 F 2 エーエー

024 M 1 アノハシノシタエネ シー シジミガトレテ シジミガトレテネー ナリヒ

025 F 1 ハー

M 1 ラシンジメジャ ホントニ ト トンニイッテ トッタモンダ ナリヒラシジ

026 F 1 アー ソーデスカ

M 1 メ ソー シジメオネー ソー

& F 1ー 027ハー

028 F 2 ンジャー オタクサンモ ズイブン アソコデ オンマレンナッタ

029	M1	アー	ワタシントコワ	ゲンザイデ	ヒャクロクジューネンイルノ	
030	&F2	アラ	ウチミタイダ	ウチワヨダイメナノ		033ア ソーデスカ
031	F1		アーソーデスカ			034ソーデスカ
032	M1			ウチワサンダイメダ		
035	&M1	アーアー		037ジマン	イヤー	アタシワ
036	F2		マ	アンマリ	ジマンニャナリマセンケドネー	
038	M2				ハハハハハハハハ	
039	F1				ハハハ	
		M1	ペツニネー	ワルイコトシナイカラ	ト	トチニイラレルンダト オモッテネ
		&M1ー		041オー		042オー
040	F2	イヤ	アノー	ソーデスヨ	トモカク	ヒトツノトチニネー ナンダイ イ
		F2	ラレルッテコトワ	ヨホドジャナキャ	イラレマセンヨ	
043	&M1	ワタシー	クサブキヤネ	シッテンダモン		045シー
044	F1			アーソーデスカ		
046	F2				アー	ソーデスカー

【お酉様への道】

001	F2	アノネー	オトリサマネー	オトリサマ	アノ	アタシガ コドモノジブン
		F2	オトリサマ	イキマスニワネー	イマミタイニ	ヒロクナインデスヨネー コ
002	M1					シー
		F2	ーセマイトキナデスヨー	スコデモー	ビチャビチャグチャグチャシテンデ	
		&M1	シー	003シーシーシー		
		&F2	スヨ	シタガネ	006ミチガワルクテ	008ソコエネー アンペラッテノヒク
004	F1			ミチガワルクテ		
005	&M1		シー	007シーシーシー		
		&F2	ムカシノアンペラ	011アレガ	ズーット	ヒーテアンデスヨ
009	M1		ア	アンペラ	アー……	
010	F1			……………	ハハ	

- 012 M2 アンペラッテユーノワ マタ ジョーブナンダヨ アノネー クロ
- 013 F1 ハーハ
-
- 014 F2 ソノ アンペラヒーテ ソイデネ コー ゲタハイテネ イッタモンデスヨ
-
- F2ネー オトリサマエ
- 015 &M1 オーオーオー 017アンペラッテユーノワネー
- 016 C アンペラッテノワ ドンナモンナンデスカ
- 018 F1 ゴゾンジナイデショー
- 019 M2 アーアー
-
- M1サトーノネー アノー ク シボッタキタネー クロイノオネー エ
- M2イマノヒトワ シラネーナ
-
- M1 イレル イマノナンキンブクローノ モモー イッセーキマエノモンダネー
- 020 M2 フクロデスヨー
-
- &M1 コー 024アラッ タケセーダヨ タ
- 021 C アーソーデスカ
- 022 F2 ナンキンブクロオネー モットコーアラクネー アラクアンダヨーナ
- 023 M2 ソーソーソー
-
- &M1ケセーダ 027エ タケーノルイダネ ン 029サトーイレテ
- 025 F1 タケデアンデアルヨーナ
- 026 F2 タケナノカネー アレ
- 028 M2 オサトーイレテキテルン
-
- 030 M1 ン カワノ カワ ンーゾー
- 031 F2 アッソーカ タケノコー カワカナンカトッタネー
- 032 C ハーソ
- 033 M2 オサトーイレテキタノ
-
- 034 F2 ホデ アンペラッテノガネー ヒジョーニ ハバキカシタンデスヨ
- 035 &M1 ンー アンペラッテ 037ンー
- 036 C アーソーデスカ
-
- 038 F1 ヨク モー ミチソノドーロノ スカルミヤナンカエ ミンナネ ソレヒ
- 039 M1 シクイトコロエ ンー シクノ
- 040 C ハー
-

F 1 キマスネー

041 F 2 アノネー コンクリジャナイデショー ダカラネー ミチガ アメガ

042 C ハイ

043 M1 ンー

&F 2 フリャ モー グッジャグジャナノ 045 モー ソノアンペラオ シクヨカショ

044 C ハー

F 2 ーガナイネー

046 F 1 ソイデソノ オートリジンジャノシュエーヘンワ ヤハリムカン

F 1 アサクサタンボッテ モーシマシテ タンボノトコロデシタカラ ハー

047 F 2 タンボダッタカラ

048 M2 エーエ

049 C ソーラシーデスネ

050 M1 ダカラ ゲタダヨー ソノー オーオ コマゲタジャ ナナインダヨ

051 F 2 アタシワ ヒヨリゲタハキマシタヨ

052 M2 ハハハ

053 M1 ヒヨリゲタカネー ハ ハ ハノツイタ

&M 1 コンナタカイゲタダヨ アーン 055 アシダ アシダ ンー

054 F 1 アシダガ

056 F 2 ヤー ツイネー コナ

F 2 イダマデデスヨー アソコデネー アノー ワスレナイワ オトリサマ タン

F 2 ボダッタカンジシマスネー アソコラー ツイコナイダマデ タンボダッタ

057 M1 ンー

058 C ハー

&F 2 ラシーノヨー 059 マー タンボノイセキダネー ノコリダネー アノミチノ

060 F 2 ワリーノワ

F 1 ハハー

3.4. 「談話行動の総合テキスト」 について

ここには、3.1. に述べたように、われわれの研究グループがかつてまとめた「談話行動の総合テキスト——東京・下町・資料(1)」の一部をかかげて、今回のような研究のためにどのような基礎テキストが必要だと考えていたかを、実物をとおして示しておきたい。

このテキストについて、目指したところや編集の力点をおいたところなどは「談話行動の総合テキストについて」(南・江川・米田・杉戸 1980) に述べたので参照されたい。

以下には、刊行したテキストの冒頭に付した解説のうち、テキストの記載事項や使用記号についての説明を再録することにする。

3.4.1. 音声言語形式の記載について——記載事項と記載要領

- (1) テキスト各ページ左端部に1～5の小数字を与えた枠がある。談話参加者番号である。各々の枠内に、M(男性)、F(女性)、C(司会者)の略号、および右下付き小数字(1, 2)による性別の個人識別番号が併記してある。計5人の参加者の談話行動は、それぞれの該当段に、互いの発話の時間的位置関係を考慮して並行的に記載してある。
- (2) 本文の音声言語形式はカタカナ表記により、音声的(Broad Notationの段階)に表すことを原則としてある。たとえば、

ガ ([ga]) ～ カ° ([ŋa])*

シ ([ʃi]) ～ ヒ ([çi])

などは区別してあるが、より詳細な音声的区別は示していない。長母音は

「一」で表してある。

*ただし、3.1. にかかげた文字化資料では、ガ〜カ^oの区別は示さずが
で統一して表記した。参加者は全員、鼻濁音の持ち主ではあった。

- (3) 言いよどみ、言いさしなど不整発話の部分、および、より詳細な音声的情報が必要と考えられる部分については、各ページ下欄中央の「言語形式注」の欄に適宜注記した。その際、本文該当箇所①、②の番号を付けて注記との対応を示した。全くの聴取不能部分は~~~~~で示してある。
- (4) 一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続（笑い、短かいあいづちも含む）を「発話」と呼び、音声言語面の単位とした。これらは、他の参加者の音声言語連続や時間的ポーズとの関連で設定したものである。書きことば研究で言う「文」の一部だけの場合も、複数の「文」が該当する場合もある。それぞれの末尾に#印を付けることにより示した。またそれぞれの発話の冒頭左上に番号を付けた。これは話題のまとまりごとに新しく1から始まる番号である。聴取不能部分はこれを付けない。
- (5) 原則として、発話末尾のイントネーションはすべて記述した。上昇調はノ、下降調は、平調は―で示した。これは発話末尾以外についても、顕著な音調が注意された場合は記述してある。逆に、笑いなどで観察が困難な場合は記述していない。
- (6) ある発話と別の発話との時間的な位置関係は、それぞれの発話の冒頭部分の位置に留意して記載した。従って、ある発話がいつ始まったかは、その発話の表記の第1文字目の位置を、直前の他の発話の中に対応させてみることにより（テキストの外枠の上下に付けた・の目盛りが役立つ）理解される。逆に、発話の終結点は、参加者の発話速度がまちまちであるため、このように示すことができない。
- (7) 発話内部および発話と発話のあいだのポーズは、その概略を、ほぼ対応する数の空白枠を設けることにより示した。ただしこれは時間的に厳密なものとは言いがたい。
- (8) 各ページ左側の5字分（各参加者の段とも）は、前ページからの連続情報である。縦の点線の左側がこれである。従って各ページごとの新しい情報

は縦の点線の右側に収めてあることになる。

- (9) 各ページの左下に、当該ページ記載の音声言語形式の「標準語訳」を付けた。これは漢字ひらがな混じり表記によった。このうち→印は、本文で発話が前後のページにわたって記載される場合の連続を示す。+印は、複数の発話が同時に言い始められた場合に用いた記号である。聴取不能部分については、本文と同じく~~~~~で示した。

3.4.2. 非言語的行動の記載の方針

- (1) 座談の各メンバーが行った非言語的行動は、それがたとえ伝達意図を含まないと思われるような種類の行動まで含めて、観察可能な限りできるだけ広く記載することとした。
- (2) 各非言語的行動は、ある種のまとまりごとに名詞（的表現）でラベルをつけることとした。
- (3) このラベルでは示し得ない細かい動きに関しては、テキスト右下の「非言語行動注」の欄に説明的に記載することとした。
- (4) 指折り数えるような行動では、これ全体が一まとまりの行動であるが、第1指（親指）から順に1指ずつ折っていくという動きに分節されるものもある。このような場合には2種類の行動を示すこととした。

3.4.3. 非言語的行動に関係する記号

(1) 区間の表示記号

← 一まとまりの非言語的行動の持続区間——これは、大まかなレベルで、発話との対応関係およびその非言語的行動の持続時間の長さを知るのに役立つものである。

→ 非言語的行動の継続——前ページから続く行動がそのページ全体にわたって継続していることを示す。ただし、矢印は左端5字枠分のみに表示するにとどめる。

… 準備的・先行的区間——ある種の非言語的行動においては、その行動の前に何らかの準備的な動きと目されるようなものが認められる。この区間を示すものである。

(2) 非言語的行動の種類とその記号

- ㊦ 偶発的・生理的行動——談話中に姿勢を変えたり、咳やあくびをするなど機械的・生理的な行動
- ㊧ 表出的行動——感情や態度を伝達する行動。これには微笑・冷笑などの顔の表情や肩をすくめるような行動が含まれる。また、強調やリズムをとるような動きもこれに含まれる。
- ㊨ うなずき——表出的行動の一種であるが、高頻度で現れるものであるため別項とすることとした。なお、㊨²は2回うなづくことであり、㊨ⁿはこれを数回くり返すことである。
- ㊩ ↑頭後振り——うなずきの反対で、頭を後に倒す動きである。
- ㊪ 視線向け——視線の向けられた相手は1~4(メンバー番号)またはC(司会者)で示している。このコードは、㊨、㊨↑についても同様である。
- ㊫ 指示的行動——方向や数量などを指し示す行動である。
- ㊬ 模倣的・模写的行動——手綱を取る格好で馬を表すなど、物の全体または一部をまねることでその物を示すような行動である。
- ㊭ 象徴的行動——角を出すような格好で怒りを表すなど、抽象的な事象を示す行動である。

(3) 身体部位の記号

A _B 両腕	A _R 右腕	A _L 左腕
H _B 両手	H _R 右手	H _L 左手
F _B 両手指	F _R 右手指	F _L 左手指

この他の身体部位の動きはことばで表現してある。なお、指についてはF_{R1}などのように数字が付加されている。この数字は第1指(親指)から順に第5指(小指)までに対応している。

(4) その他の記号

- + 同時的行動または付加的行動——二つ以上の行動が同時に生じたと思わ

れる場合には、主と認められる行動を示した後、+でつないで副次的な行動を示した。また、この記号は+F_R2のような使われ方をする場合もある。これは、直前の指の形に第2指が加わったことの意味である。

[] 右下の「非言語行動注」に現れるもので、[] 内が観察者の主観による記述であることを示す。

group 東京工大一 page 44

5.04.	11 オー# ④+	12 オーオ イマワマカッチナイヨナ# ④+
1M1		
1M2	12 エー# ④+	12 エー# ④+
1F1	12 エー# ④+	12 エー# ④+
1F2	12 エー# ④+	12 エー# ④+
5C		
(標準語訳) <F1>→田原町の通りへ武たわけてすまね <M1>おお+<M2>ええ+<F1>ええ、<F2>舌の舌 草通り、今の仁井通り、<M1>おお、今は曲ってない さま、+<M1>ええ、<M2>おあおあ。 (標準語訳) ①右すは一端和山に度す。千首と千の中間を軸に して机に接板。 ②右すを右頭上に上げ、その際下す。手指は開きに さま。		

1 M ₁	509			32 → アー#
2 M ₂				
3 F ₁			20 ホリヨナンマシキマシネー# ⑤ 較短何れ④	33 アー
4 F ₂	ンズキサマニネー ⑨	→ ロミアジシカネー# ⑨⑩⑪足短音え ⑫1,2	31 ホリヨナンマシキマシネー# ⑤ Hie 平音振り⑥	→ アースカネー# ⑦ 上体寄りエし⑩
5 C				
(標準品説) <F> → にねえ ロシア人がねえ。 <F> 閉唇 (口端形式) 人になって来ましてねえ。 <F> 閉唇人になったの閉唇部 ないですわあ。 <M> ああ。 <F> 明 →		(非標準品説) ① それまで正面やや下ろしを見ていたが、急に顔を上げ、 <M>、<M> の方に向ける。 ② 右側面やや前方で「升差を内側に振る」「ないて」の 発音と較べたものと同じ。 ③ 上体を前方に振り出して <M>、<M> の顔をじっと 見る。		

国立国語研究所
昭和62年3月

国立国語研究所報告 92

談話行動の諸相

—座談資料の分析—

昭和62年3月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号

電話 (03) 900-3111 (代表)

N. D. C. 分類番号 818

本書の市販品発行所

〒101 東京都千代田区三崎町2丁目22番14号

(03) 230-9412

株式会社 三省堂

国立国語研究所の 《社会言語学研究》報告書概要

○八丈島の言語調査（報告 1, 1950 年）

創立後、最初の共通語化の調査。共通語化の程度は共通語使用場面の量に比例することが示されている。

○言語生活の実態（報告 2, 1951 年）

福島県白河市で行なった共通語化の調査。日本での社会言語学的調査研究の先駆として注目されている。学歴、生育地、両親の出身地の 3 要因が共通語化に強く関与する等の結果が得られた。

○地域社会の言語生活（報告 5, 1953 年。報告 52, 1974 年）

山形県鶴岡市における約 20 年を隔てた 2 度の共通語化調査。2 回の調査から、共通語化の要因は時勢により異なること、共通語化には 4 つの段階が考えられる等が明らかになった。

○敬語と敬語意識（報告 11, 1957 年。報告 77, 1983 年）

上記同様、同一地域社会（愛知県岡崎市）で約 20 年を隔てて行なった調査。敬語使用の判断基準は 2 回の調査でほとんど変わらなかった。使い分けに関しては、現在の方がうまくなった等のことが明らかになった。

○共通語化の過程（報告 27, 1965 年）

北海道入植者を対象に行なわれた世代差の調査。語彙は 1・2 世間で、文法や音韻は 2・3 世間で、共通語化の程度に落差がある等が指摘された。

○待遇表現の実態（報告 41, 1971 年）

島根県松江市の 1 家庭での 24 時間録音調査に基づく。日常会話における待遇表現の表れ方には、会話の種類・機能・話題が関与することを、話しことば資料の電子計算機処理を通じて解明する。

○言語使用の変遷(1)（報告 53, 1974 年）

福島県北部の農・山村での調査。年齢と学歴の 2 要因が共通語化に強く関与し、音声・語彙は共通語化しやすいが、文法は比較的方法形式が残しやすい等の結果が得られている。

○大都市の言語生活—分析編—（報告 70-1, 1981 年）

東京・大阪での大規模な調査。調査は、語彙・文法・アクセント・敬語などの言語的側面のほか、住民意識・ふるさと意識など多岐にわたる。「見ラレル」より「見レル」という語形が優勢であることをはじめとして、大都市住民の言語状況について多くの知見を示す。

○大都市の言語生活—資料編—（報告 70-2, 1981 年）

上記の「分析編」では繁雑を避けて示さなかった各種統計結果を網羅する。

○企業の中の敬語（報告 73, 1982 年）

日立製作所・日鐵建材という一般企業の従業員各層が、日常の勤務生活の中で敬語をどう意識し、どう使っているかを解明しようとした調査。敬語行動に関わる要因を、職階を軸としつつ在社歴・職種など種々の観点から分析する。

○言語行動における日独比較（報告 80, 1984 年）

日本とドイツ、それに在日外国人の三者間における言語行動の相違について、対照言語学的に比較分析を試みた報告書。さまざまな生活場面における、それぞれの違いを実態調査によって明らかにしていく。

○方言の諸相（報告 84, 1985 年）

全国的な方言地図である『日本言語地図』（国立国語研究所編・全 6 巻）の記載内容をめぐって、年齢差・場面差などの社会言語学的観点や調査法の点から検証を加えた 8 種類の調査研究の報告。

○社会変化と敬語行動の標準（報告 86, 1986 年）

民主化・都市化・産業化という戦後日本の社会変化が、国民の敬語意識や敬語使用にどのような影響を与えたかについて、統計資料や秋田県・富山県での臨地調査に基づいて実証的に検討する。